仙台市文化財調査報告書第310集

松森城跡他

発掘調査報告書

松森城跡第1.2次・南小泉遺跡第48～51次
富沢遺跡第137.139次・田母神屋敷跡
袋前遺跡第３次・養種園遺跡第６次
杉土手第４次調査

２００７年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第310集

松森城跡他

発掘調査報告書

松森城跡第1.2次・南小泉遺跡第48～51次
富沢遺跡第137.139次・田母神屋敷跡
袋前遺跡第３次・養種園遺跡第６次
杉土手第４次調査

２００７年３月

仙台市教育委員会

序　文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守れてきた文化遺産（文化財）の存在が挙げられます。仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承いくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成17年度に発掘調査を実施した松森城跡、南小泉遺跡の他、平成18年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、富沢遺跡、田母神屋敷跡、袋前遺跡、養種園遺跡、杉土手の調査結果を収録しております。

松森城跡および田母神屋敷跡は今回初めて実質的な調査が行われ、遺跡の実態を知る上での貴重な資料となる遺構・遺物を確認し、また、その他の遺跡の調査についても貴重な資料を得ることができました。

先人の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大事な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の文化財へのより深い関心とご理解の一助となれれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成19年３月

仙台市教育委員会
教育長　奥山　恵美子

例　言

1　本書は、仙台市教育委員会が実施した民間開発事業に伴う松森城跡第１・２次、南小泉遺跡第50次、富沢遺跡第139次、杉土手第４次と、個人住宅建設に伴う南小泉遺跡第48・49・51次、富沢遺跡第137次、袋前遺跡第３次、養種園遺跡第６次及び仙台市関連施設建設に伴う田母神屋敷跡の発掘調査報告書である。

民間開発事業に係わる発掘調査は事業者の負担において実施し、個人住宅建設及び仙台市関連施設建設に係わる調査は公費で実施した。

2　本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議をもとに、工藤哲司・今野秀治・早川潤一・藤田雄介が分担して行なった。担当は次のとおりである。

工藤：松森城跡第１・２次、南小泉遺跡第48・49次、富沢遺跡第139次、杉土手第４次

今野：南小泉遺跡第51次、袋前遺跡第３次、養種園遺跡第６次

早川：富沢遺跡第137次、田母神屋敷跡

藤田：南小泉遺跡第50次、

3　本書に掲載した陶器・磁器に関する産地及び年代については、仙台市博物館の佐藤洋氏に鑑定をお願いした。

4　本書に係わる遺物・写真・実測図面等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。

2　断面図・平面図の標高値は、海抜高度を示している。

3　遺構は種別毎に次の略号を使用した。

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＩ：竪穴住居跡・竪穴遺構

ＳＫ：土坑　Ｐ　：ピット　ＳＸ：その他の遺構

4　遺物の登録は、以下の分類と略号を使用している。

Ａ：縄文土器　Ｂ：弥生土器　Ｃ：土師器（非ロクロ）　Ｄ：土師器（ロクロ）

Ｅ：須恵器　Ｆ：丸瓦　Ｇ：平瓦　Ｉ：陶器　Ｊ：磁器

Ｋ：石器・石製品　Ｌ：木製品・杭材　Ｎ：金属製品　Ｐ：土製品

5　竪穴住居跡等における、焼け面範囲は、網かけにより表現した。

6　掘立柱建物跡の柱穴およびピット内の網は柱痕跡の位置と範囲を示している。

7　土師器実測図における網は、黒色処理されていることを示している。

8　遺物観察表の（　）内の法量は残存値を示している。

9　本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、「十和田ａ（To－a）」と考えられ、十和田ａの降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。（町田：1981・1996）

10　本書における「擬似畦畔Ｂ」という用語は、水田畦畔直下の自然堆積層に認められる畦畔状の高まりをさす（斎野ほか1987：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集）が、本書では自然堆積層の高まりだけでなく、畦畔直下の下層の水田耕作土層に認められる畦畔状の高まりにもこの用語を使用した。

目　次

序文
例言・凡例
目次

Ⅰ　松森城跡第１次発掘調査報告書

1　調査要項…… 1
2　調査に至る経過と調査方法…… 1
3　遺跡の位置と環境…… 1
4　基本層序…… 3
5　発見遺構と出土遺物…… 4
　1）掘立柱建物跡…… 4　　3）土坑…… 7
　2）溝跡…… 7
6　まとめ……11

Ⅱ　松森城跡第２次発掘調査報告書

1　調査要項……19
2　調査に至る経過と調査方法……19
3　遺跡の位置と環境……19
4　基本層序……19
5　発見遺構と出土遺物……19
　1）溝跡……20　　3）ピット群……22
　2）土坑……20　　4）沢状の落込み……25
6　まとめ……25

Ⅲ　南小泉遺跡第48次発掘調査報告書

1　調査要項……33
2　調査に至る経過と調査方法……33
3　遺跡の位置と環境……34
4　基本層序……35
5　発見遺構と出土遺物……36
　1）Ⅱ層検出遺構……36　　2）Ⅲ層検出遺構……37
6　まとめ……39

Ⅳ　南小泉遺跡第49次発掘調査報告書

1　調査要項……45
2　調査に至る経過と調査方法……45

3　遺跡の位置と環境……45
4　基本層序……45
5　発見遺構と出土遺物……46
　1）溝跡……46　2）土坑……46
6　まとめ……47

Ⅴ　南小泉遺跡第50次発掘調査報告書
1　調査要項……51
2　調査に至る経過と調査方法……51
3　遺跡の位置と環境……51
4　基本層序……51
5　発見遺構と出土遺物……52
　1）溝跡……52　2）出土遺物……54
6　まとめ……55

Ⅵ　南小泉遺跡第51次発掘調査報告書
1　調査要項……59
2　調査に至る経過と調査方法……59
3　遺跡の位置と環境……59
4　基本層序……59
5　発見遺構と出土遺物……60
　1）柱列……60　3）土坑……61
　2）小溝状遺構群（ＳＤ１－５）……60　4）ピット……61
6　まとめ……61

Ⅶ　富沢遺跡第137次発掘調査報告書
1　調査要項……65
2　調査に至る経過と調査方法……65
3　遺跡の位置と環境……66
4　基本層序……66
5　発見遺構と出土遺物……67
　1）水田層……68　2）Ｖ層水田畦畔跡……69
6　まとめ……69

Ⅷ　富沢遺跡第139次発掘調査報告書
1　調査要項……73
2　調査に至る経過と調査方法……73
3　遺跡の位置と環境……73
4　基本層序……74

5　発見遺構と出土遺物……75
1）Ⅱ層出土遺物……75
2）Ⅲ層検出の遺構……75
3）Ⅲb層：耕作土層 ……77
4）Ⅳ層検出遺構……77
5）Ⅵ層：水田土壌……77
6）Ⅶ層：水田土壌……77
7）Ⅸ層水田跡……78
6　まとめ……78

Ⅸ　田母神屋敷跡発掘調査報告書
1　調査要項……89
2　調査に至る経過と調査方法……89
3　遺跡の位置と環境……89
4　基本層序……92
5　発見遺構と出土遺物……92
1）溝跡……92
2）土坑……92
3）低地形……93
6　まとめ……93

Ⅹ　袋前遺跡第３次発掘調査報告書
1　調査要項……99
2　調査に至る経過と調査方法…… 100
3　遺跡の位置と環境…… 100
4　基本層序…… 100
5　発見遺構と出土遺物…… 100
1）小溝状遺構群…… 101
2）性格不明遺構…… 102
3）ピット…… 102
6　まとめ…… 102

Ⅺ　養種園遺跡第６次発掘調査報告書
1　調査要項…… 105
2　調査に至る経過と調査方法…… 105
3　遺跡の位置と環境…… 105
4　基本層序…… 106
5　発見遺構と出土遺物…… 106
溝跡…… 106
6　まとめ…… 107

Ⅻ　杉土手第４次発掘調査報告書
1　調査要項…… 111
2　調査に至る経過と調査方法…… 111

3　遺跡の位置と環境…… 111
4　基本層序…… 112
5　発見遺構と出土遺物…… 113
　1）平面調査の検出状況…… 113　　2）断面調査の状況…… 114
6　まとめ…… 115

Ⅰ　松森城跡第１次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	松森城跡（宮城県遺跡番号19020）
調 査 地 点	仙台市泉区松森字内町20－２、20の一部
調 査 期 間	平成18年２月27日～３月10日
調査対象面積	154㎡
調 査 面 積	94㎡
調 査 原 因	長屋住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　三塚博之・浅野克樹・赤岡光騎

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成16年６月10日付けで、地権者の斎藤幸雄氏より、表層土壌改良の基礎工法伴う長屋住宅の建築に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成17年12月15～16日に実施した。42㎡の範囲で調査を実施した結果、多数の柱穴などの遺構や土師器などの遺物が発見されたので本調査が必要と判断した。本調査は、地権者と協議のうえ、厳冬季を避けて２月27日から３月10日に行った。

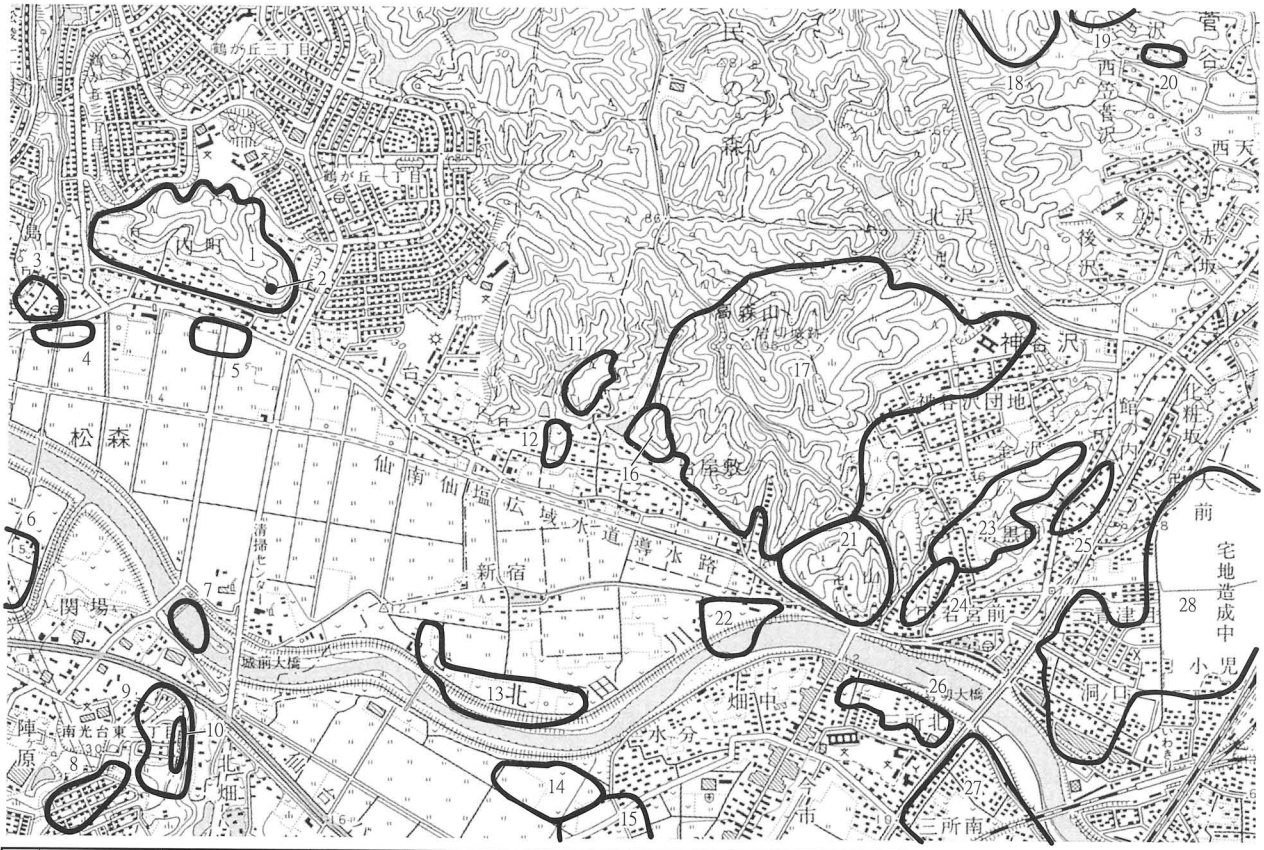
3　遺跡の位置と環境

当該地は、仙台市の北東部にあたり、ＪＲ岩切駅の北西3.5km付近に位置する。仙台平野の北部を画して東西に延びる富谷丘陵の南側の縁辺部にあたる。松森城跡は、標高20m前後の麓部から標高85m前後の丘陵頂部に渡り、東西700m・南北350mの範囲が遺跡に登録されている。遺跡の南面は、遺跡から約600m付近を七北田川が東流し、その間は標高15m前後で、水田となっている沖積地が広がる。遺跡の北側は、標高60～95mの丘陵が続いているが、広範囲に住宅団地として開発されている。

富谷丘陵の南辺と七北田川に沿った地域には遺跡が数多く認められる。縄文時代には本町遺跡や若宮前遺跡・宝堰遺跡で遺物が採集されているが遺跡の実態は不明である。弥生時代には長岫遺跡と岩切畑中遺跡で土器片が出土している。古墳時代中期になると鴻ノ巣遺跡に堀と柵列に囲まれた集落が形成され、柵内から多数の竪穴住居跡が検出されている。以後集落やこれに関係する祭祀遺構、横穴墓などが古代にかけて連続的に営まれている。

古代から中世に移行するころ、富谷丘陵の東端に陸奥国留守職の伊沢家影の居城である岩切城や中世寺院の東光寺が築かれる。周辺には、稲荷館跡・洞ノ口遺跡・菅谷館跡・若宮前遺跡・化粧坂遺跡などの城館関係遺跡や、東光寺の磨崖仏群・板碑群、穴薬師磨崖仏群などの宗教遺跡がある。また、今市遺跡や鴻ノ巣遺跡のあたりの七北田川のそばには「冠屋市場」や「河原宿五日市場」と呼ばれる市があったといわれ、中世においてこの地域は非常に栄えていたことがうかがわれる。

松森城跡は、泉区七北田から宮城野区岩切へ向う街道沿いにあり、旧黒川郡と宮城郡の境界付近に位置する。山城形式の城館で、大手は城の南面の中央からやや西に寄ったところにある現在の登り口がこれに当ると考えられている。城は大手口を境に東西に分かれ、東側が本丸、西側が二の丸と考えられる。東側の本丸は標高約85mの丘陵



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	松森城跡	城館	丘陵	中世・近世	15	稲荷館跡	城館	自然堤防	中世
2	松森薬師堂板碑	板碑	丘陵	中世	16	台屋敷横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳・古代
3	本町遺跡	散布地	段丘	縄文	17	岩切城跡	城館	丘陵	中世
4	岡本前遺跡	集落	自然堤防	縄文・古代	18	管谷館跡	城館	丘陵	中世
5	城前遺跡	散布地	沖積地	古代	19	管谷横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳・古代
6	館遺跡	散布地	沖積地	古代・中世	20	穴薬師磨崖仏群	宗教遺跡	丘陵	中世
7	宝堰遺跡	散布地	現河道	縄文	21	東光寺遺跡群	城館・板碑・磨崖仏	丘陵	中世
8	長岫遺跡	集落・水田	丘陵	縄文・弥生・古代	22	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	古代
9	住吉遺跡	散布地	丘陵	縄文・近世	23	羽黒前遺跡	散布地	丘陵	中世～近世
10	住吉塚群	宗教遺跡	丘陵	中世？	24	若宮前遺跡	城館・散布地	丘陵	縄文・古墳・中世
11	入生沢横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳・古代	25	化粧坂遺跡	城館	丘陵	中世
12	入生沢遺跡	散布地	丘陵麓部	古代	26	今市遺跡	集落	自然堤防	平安～中世
13	大正囲遺跡	散布地	自然堤防	古代	27	鴻ノ巣遺跡	集落・屋敷	自然堤防	古墳・古代・中世
14	岩切畑中遺跡	集落	自然堤防	縄文～中世・近世	28	洞ノ口遺跡	城館・集落・水田	自然堤防	古墳～中・近世

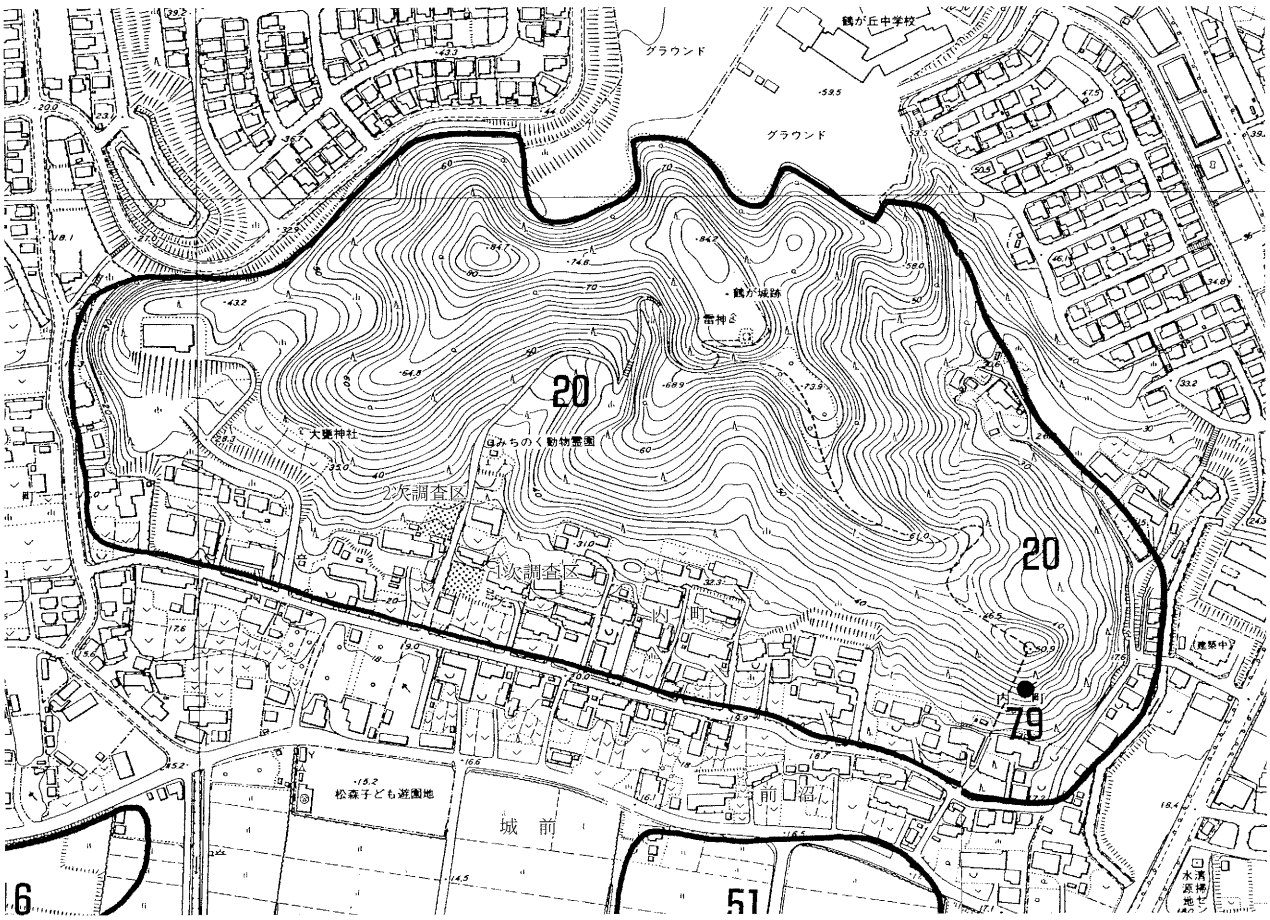
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

頂部に大きな平場が造成され、ここからさらに四方に曲輪がのび、西に延びる曲輪は二の丸に続いている。

城の南側の丘陵裾部は、標高30mから15mくらいまでが150mの幅で緩やかに傾斜している。この傾斜面には中央部と南端部に沿って、中世の街並みを反映するかのように東西に延びる２条の道路がある。中央の道路より丘陵側は「内町」、東西の道路の間が「前沼」、南側の道路の外側は「城前」という地名が残っている。内町と前沼地区には、２条の東西道路を機軸として計画的な屋敷割が行われ、城下町的集落が形成されていたことが、現在の地割りからも伺われる。

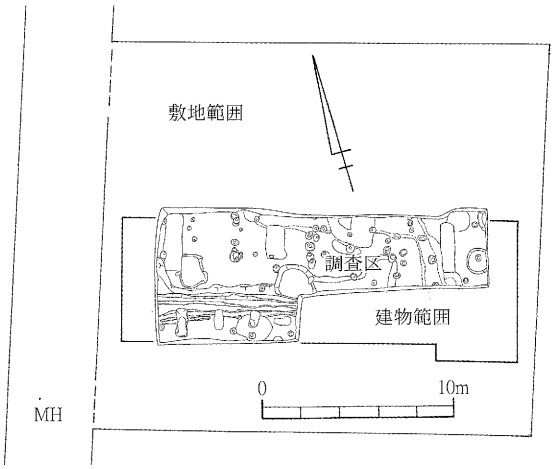
なお、『古城書上』によれば、本丸の大きさ東西四四間・南北一六間、二の丸の大きさ東西一六間・南北一六間と記載されている。また、城の南側には幅一五間、長さ一四〇間の堀が存在したことも記されている。

松森城は、戦国時代には仙台市の中央部から北部を支配した国分氏の所領に当たり、千代城・小泉城・南目館などとともにその城の一つとして成立した。『古城書上』には、「此城主国分彦九郎盛重小泉村より取移、天正年中迄居住」とある。重盛は伊達政宗の叔父で、国分氏の養子として入っていたが、家臣団の統率に失敗すると、天正15年（1587）に米沢に呼び戻され、国分領は伊達家の直轄領となり、国分氏は実質的に滅亡した。天正16年に伊達政



第２図　調査地点の位置

宗が大崎氏を攻めた際には、伊達領の北辺の要衝として重要な役割を果たし、伊達家重臣の石母田氏や粟野氏が城に入っている（伊達政宗書状）。その後、天正18～19年の豊臣秀吉による奥州仕置により廃城となるが、江戸時代には、「御野始」とよばれる正月行事として藩主が行う狩の陣場として利用されている。



第３図　調査区配置図

４　基本層序

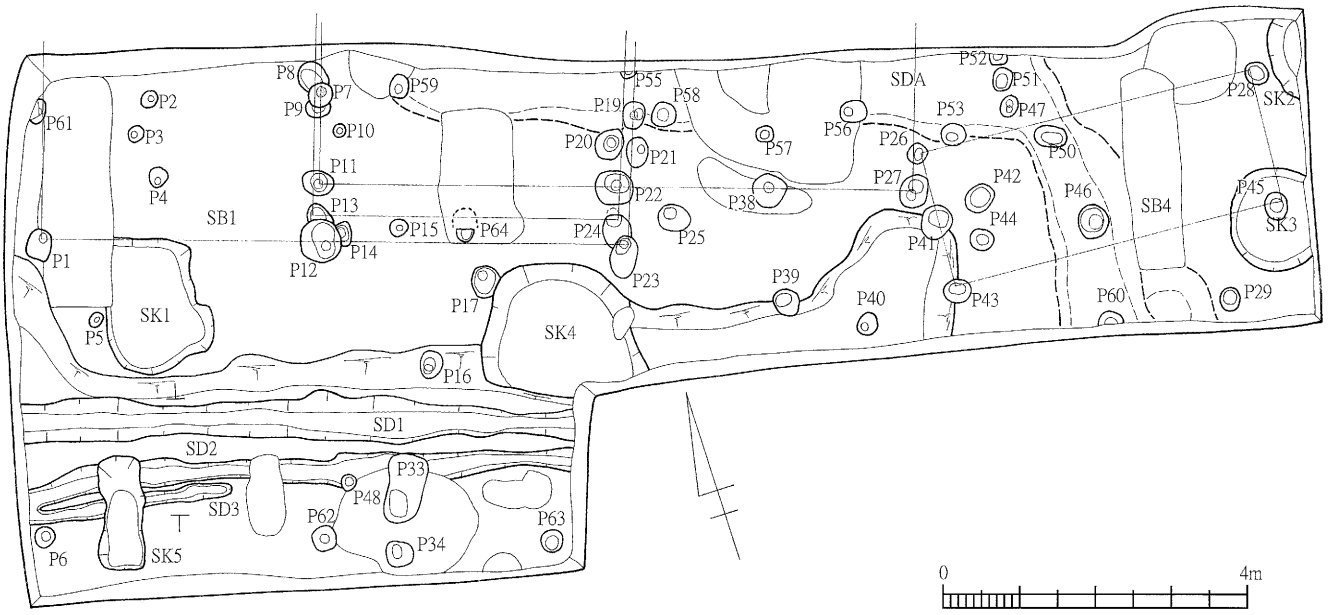
調査区は南部が一段低くなっているため、南部と北部では基本層に多少の違いが認められるが、調査区北壁を基準にすると大別４層、細別５層に分けられた。

Ⅰａ層　：10YR４/４褐色シルト。層厚は20cm。風化礫を多く含む。近年の畑耕作土層上部。

Ⅰｂ層　：10YR４/４にぶい暗褐色シルト。層厚は10cm。風化礫粒を多く含む。炭化物を含む。畑耕作土層下部。調査区西壁面では、地形が低くなった部分のⅠｂ層下部にⅠｂ２～Ⅰｂ６層とした盛土整地層ないし耕作土層と考えられる層の分布が観察される。

Ⅱ　層　：10YR３/３暗褐色シルト質粘土。層厚は５～30cm。風化礫粒を多く含む。東側の一部に黒褐色土のブロックを含む。

Ⅲ　層　：10YR２/１黒色シルト質粘土。層厚は70cm以上。径１～５cmの風化礫を多量に含む。SDAとした浅い溝



第４図　遺構配置図

状の落ち込み部の堆積土。土師器出土。

Ⅳ　層　：10YR５/８黄褐色粘土質シルト。層厚は60～70cm。大小の風化礫を多量に含む。

５　発見遺構と出土遺物

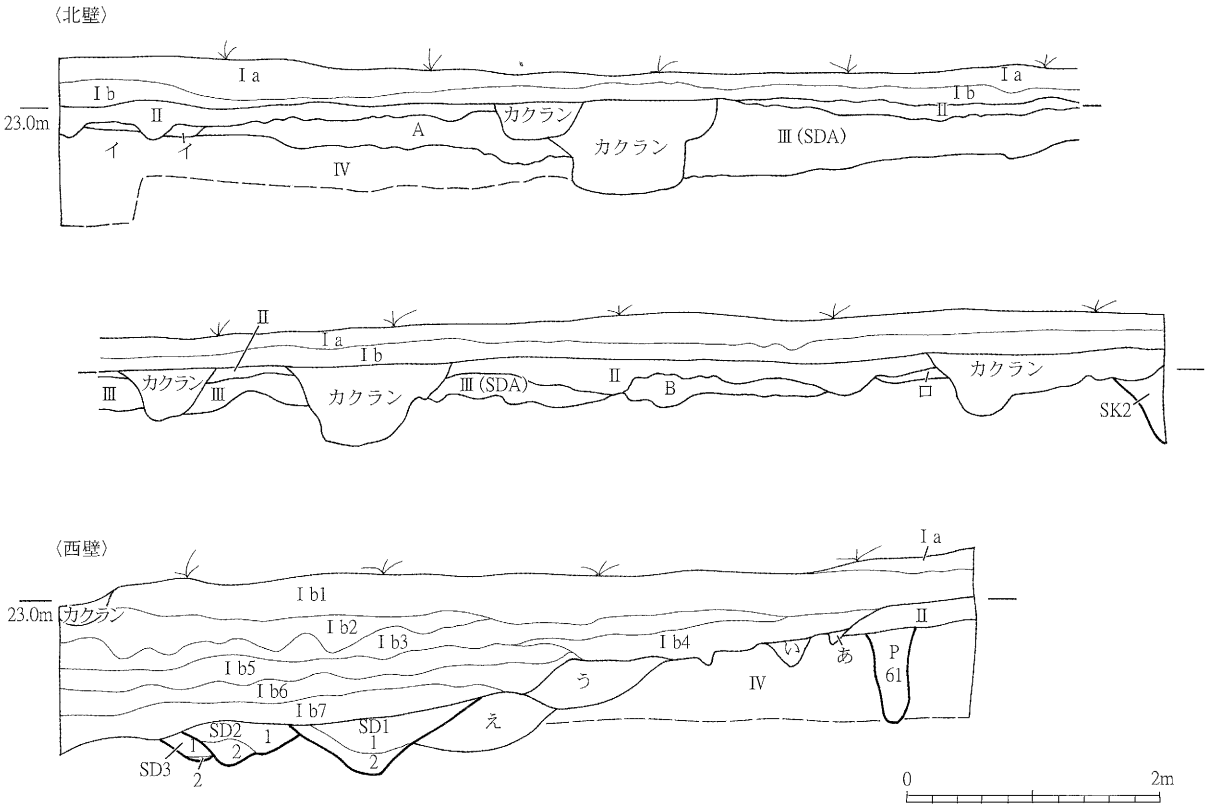
Ⅳ層上面で遺構検出作業を行った結果、掘立柱建物跡４棟・溝跡３条・土坑５基・ピット55基が検出された。

１）掘立柱建物跡

ＳＢ１掘立柱建物跡　調査区北西部の北壁際で検出され、北側は調査区の外にのびる。ＳＢ２掘立柱建物跡を切る。ＳＢ３掘立柱建物跡と平面的には重複関係にあるが、新旧は不明である。堆積土の上面はⅡ層が覆っている。検出部分の建物の規模は、東西が南辺で２間768cm、南北が東辺で１間170cm・西辺で１間168cmである。柱間寸法は南辺東西列が東から393cmと375cmである。南北列の方向は、東辺でN－19°－Eである。検出された６個の柱穴は、直径54cmから32cmの円形ないし楕円形を呈し、検出面からの深さはＰ１で70cm程ある。Ｐ７・12・19・23の４個で直径13～15cmの柱痕跡が検出されている。Ｐ12の掘り方から、17世紀初め頃と考えられる志野の端反碗の破片が１点（第９図５）が出土している。

ＳＢ２掘立柱建物跡　調査区中央西寄りの北壁際で検出された。北側は調査区の外にのびる。ＳＢ１掘立柱建物跡に切られる。ＳＢ３掘立柱建物跡とは平面的には重複関係にあるが、新旧は不明である。検出部分の建物の規模は、東西が南辺で２間398cm、南北が東辺で１間約205cm・西辺で１間約180cmである。柱間寸法は南辺東西列が東から200cmと198cmである。南北列の方向は、東辺でN－20°－Eである。検出された５個の柱穴は、長軸45cm前後、短軸35cm前後の楕円形を呈す。柱痕跡の残るものはない。遺物は出土していない。

ＳＢ３掘立柱建物跡　調査区中央の北壁際で建物の南辺が検出され、大部分は調査区の外にのびる。検出部分の建物の規模は、東西南辺が４間768cmと考えられるが、西から２個目の柱穴は撹乱坑に切られている。柱間寸法は南辺東西列が東から188cm・201cmで、残り２間を二分割するとそれぞれ193cmである。東西列の方向は、南辺でN－72°－Wである。検出された４個の柱穴は、直径52cmから43cmの円形ないし楕円形を呈す。検出面からの深さはP38



＜調査区北壁＞

層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物片を含む。　現耕作土
Ⅰb	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫粒を多く含む。炭化物粒を含む。　現耕作土
Ⅱ	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	風化礫粒を多く含む。黒褐色土の小ブロックを含む。
Ⅲ	10YR2/1　黒色	シルト質粘土	風化礫を多量に含む。ＳＤＡ堆積土。
Ⅳ	10YR5/8　黄褐色	粘土質シルト	大小の風化礫粒を多量に含む。
A	7.5YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	風化礫、黒褐色土のブロックを多量に含む。
B	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	径１～５cmの風化礫を多量に含む。
イ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫・風化礫粒を多量に含む。
ロ	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	風化礫を多く含む。炭化物の小片を含む。

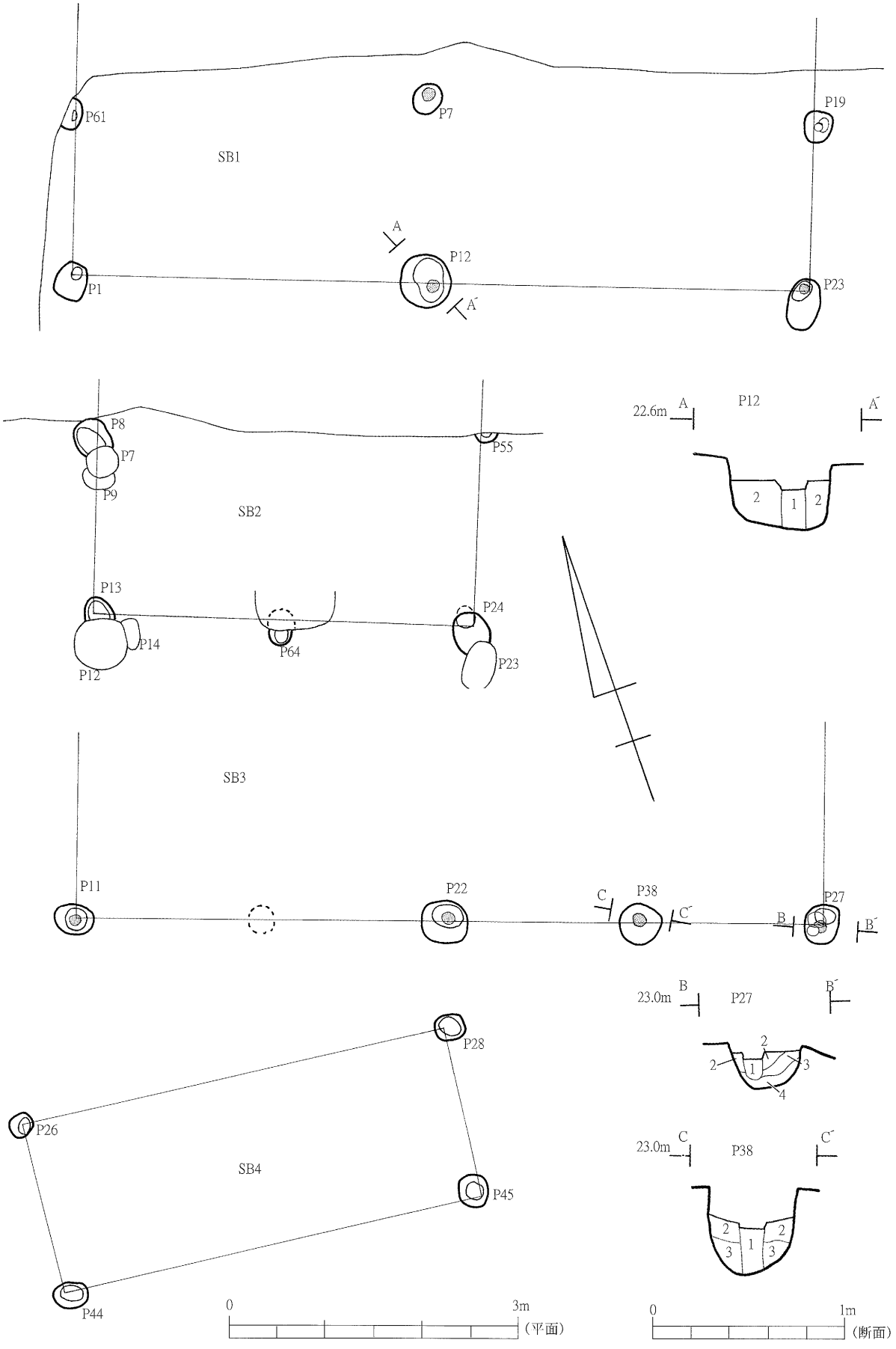
＜調査区西壁＞

層No	土　色	土　性	備　考
1a	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物の小片を含む。　耕作土
1b	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫粒を多く含む。炭化物粒をわずかに含む。　耕作土
1b2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	風化礫粒を多く含む。炭化物粒をわずかに含む。
1b3	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	風化礫を多量に含む。浅黄橙色土のブロックを多く含む。
1b4	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫粒を多く含む。炭化物粒をまばらに含む。
1b5	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫粒を多く含む。炭化物片、褐色土ブロックを含む。
1b6	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫を多量に含む。浅黄橙色土のブロックを多く含む。
1b7	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫を含む。浅黄橙色土の小ブロックを含む。
あ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫をわずかに含む。しまりなし。
い	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	風化礫を含む。
う	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	風化礫をまばらに含む。褐色土ブロック、炭化物を含む。
え	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	風化礫粒を多く含む。炭化物粒を少量含む。
SD1-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	風化礫をまばらに含む。炭化物片をわずかに含む。
2	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	上部に風化礫をまばらに含む。褐灰色粘土ブロックを含む
SD2-1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	風化礫をまばらに含む。炭化物小片をわずかに含む。
2	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	風化礫粒を含む。炭化物粒をわずかに含む。
SD3-1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	風化礫粒を多く上部ほど多く含む。
2	10YR3/4　暗褐色	粘土	下部に褐灰色土を含む。
P61	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	風化礫を多く含む。

第５図　調査区断面図

で45cm程ある。P11・22・27・38の４個で直径15cm前後の柱痕跡が検出されている。出土遺物はない。

ＳＢ４掘立柱建物跡　調査区東部に位置する。ピットの配置から建物跡と想定した。ＳＢ３掘立柱建物跡と平面的には重複関係にあるが、新旧は不明である。検出部分の建物の規模は、東西が南辺で１間約440cm、南北が東辺で


P61
P7
P19
SB1
A
P12
A´
P1
P23
P8
P7
P9
P55
SB2
P13
P24
P14
P64
P12
P23
22.6m
A
P12
A´
2
1
2
SB3
P11
P22
C
P38
C´
B
P27
B´
23.0m
B
P27
B´
2
2
1
3
4
P28
P26
SB4
P45
P44
23.0m
C
P38
C´
2
3
1
3
2
0
3m
(平面)
0
1m
(断面)

第６図　掘立柱建物跡

＜第６図土層＞

P12

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/2　黒褐色	粘土	褐色土粒、褐色土粒を含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒、風化礫を多く含む。

P27

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	褐色土粒を多く含む。
3	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	風化礫を多く含む。
4	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロック、風化礫を多く含む。

P38

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを上部にまばらに含む
2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを多量に含む
3	10YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	黄褐色、風化礫を少量含む。

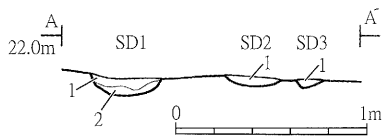
１間180cmである。東西列の方向は、南辺でN－87°－Wである。検出された４基の柱穴は、直径35cmから25cmの円形を呈す。柱痕跡は検出できなかった。出土遺物はない。

２）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区南部の１段下がったところで、段差と平行にのびて検出された。ＳＤ２溝跡を切る。幅は検出部では60cm前後であるが、西壁断面では150cmを確認できる。深さも検出面では18cm程であるが、断面では45cm程ある。断面形は舟底状を呈する。堆積土は上部が暗褐色の粘土質シルト、下部が灰黄褐色の砂質シルトないし黄褐色または灰黄褐色の粘土質シルトで、風化礫を含んでいる。18世紀代の瀬戸美濃産と見られる碗の破片が１点出土している。

ＳＤ２溝跡　ＳＤ１溝跡の南側20～30cmに平行にのびて検出された。ＳＤ３溝跡を切る。幅は検出部では35～20cmであるが、西壁断面では90cmを確認できる。深さは検出面では８cm程であるが、断面では45cm程ある。断面形は舟底状を呈する。堆積土は上部が暗褐色の粘土質シルト、下部が黒褐色の粘土質シルト、最下部がにぶい黄褐色の粘土質シルトで、各層に風化礫粒を含んでいる。

ＳＤ３溝跡　ＳＤ１・２溝跡の南側にこれと平行にのびて検出された。北側はＳＤ２溝跡に切られる。幅は検出部で15～20cm前後である。深さは５cm程で断面形は舟底状を呈する。堆積土は上部が暗褐色の粘土質シルト、下部が暗褐色の粘土で、風化礫を含んでいる。



第７図　溝跡断面図

SD１溝跡

層No	土　色	土　性	備　考
1a	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	風化礫をわずかに含む。
1b	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	上部に風化礫を少量含む。陶磁器片出土

SD２溝跡

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	風化礫粒を含む。

SD３溝跡

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	風化礫粒を含む。

ＳＤＡ溝跡　基本層Ⅲ層とした旧表土が流入したと考えられる黒色シルト質粘土が堆積する溝状の落込みで、調査区の北壁際では東西方向にのび、調査区西寄りで南東方向に折れてのびている。幅は75～200cmと一定していない。検出面からの深さは20～30cmであるが、北壁断面でのⅢ層は最大60cmの厚さがある。北壁の堆積土中から土師器の壺が潰れた状態で出土している。出土した壺は、やや扁平な球形の体部で、頸部から口縁部が外反し、口縁部は外側に折り返されて厚くなっている（第10図８）。外面は底部から口縁部までヘラミガキ調整されている。古墳時代前期の塩釜式期のものと考えられ、類例は、名取市野田山遺跡22号住居跡出土の壺などに見られる。

３）土坑

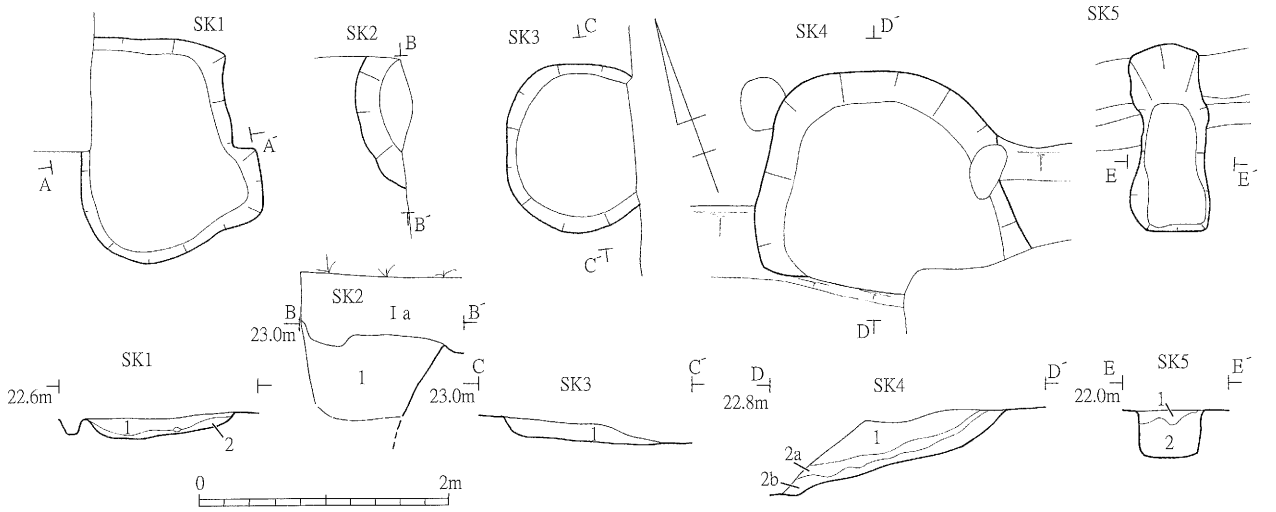
ＳＫ１土坑　調査区西部中央で検出された。平面形は不整な長方形を呈し、南北長軸180cm・東西短軸144cmを測る。検出面から深さは15cmで、断面形はＵ字状を呈している。堆積土は２層に分けられる。上部は黒褐色の粘土質シルトで、底面付近には地山に類似する褐色の粘土質シルトが堆積している。出土遺物はない。

ＳＫ２土坑　調査区の北東角で検出された。遺構の大部分は調査区の外にのびている。検出部の状況から平面形は円形を呈するものと考えられる。検出部で南北104cm・東西45cmを測る。検出面から約70cm下げたが底面に達しなかった。壁面の立ち上がりは比較的急である。調査部分の堆積土は黒褐色のシルト質粘土で、褐色土のブロックを含む。平面形と壁面の立ち上がりが急であることから、井戸跡の可能性が考えられる。遺物は近世の磁器片が出土している。

ＳＫ３土坑　調査区の東壁際で検出された。一部は調査区の外にのびている。ＳＢ４掘立柱建物跡を切っている。平面形は円形を呈し、南北軸で径136cmを測る。深さは15cmで断面形は浅いＵ字形を呈する。褐色及び黄褐色の風化礫を含む暗褐色のシルト質粘土層１層である。遺物は出土していない。

ＳＫ４土坑　調査区の中央部で検出された。南側は調査区南部に形成された段差によって切られている。また、遺構の南東部は調査区の外にのびる。検出部の平面形は隅丸方形を呈する。検出部の大きさは、南北176cm・東西210cmを測る。検出面からの深さは68cmで、断面形は擂鉢状を呈する。堆積土は上部が黒褐色の粘土質シルト層で、下部は黒色ないし黒褐色のシルト質粘土層であるが、各層とも風化礫を含む。遺物は、17世紀初頭頃の唐津の鉢（第９図７）、18世紀前半頃の肥前の碗（第９図３）、18世紀代と見られる産地不明の擂鉢（第９図８）。16世紀後半の中国産青花の皿片（第10図４）などが出土している。

ＳＫ５土坑　調査区西南部で検出された。ＳＤ２・３溝跡に切られている。平面形は長方形を呈する。大きさは、南北長軸150cm・東西短軸63cmを測る。深さは39cmで、断面形はＵ字形を呈する。堆積土は、上部が灰黄褐色シルト質粘土、下部は褐色の粘土質シルト質粘土１層で、各層とも風化礫を多く含む。遺物は２層中から土師器片が出土している。



SＫ１土坑

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。北部ほど黒褐色のブロックを含む。

SＫ２土坑

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックをまばらに含む。

SＫ３土坑

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	褐色・黄褐色の風化礫を多量に含む。

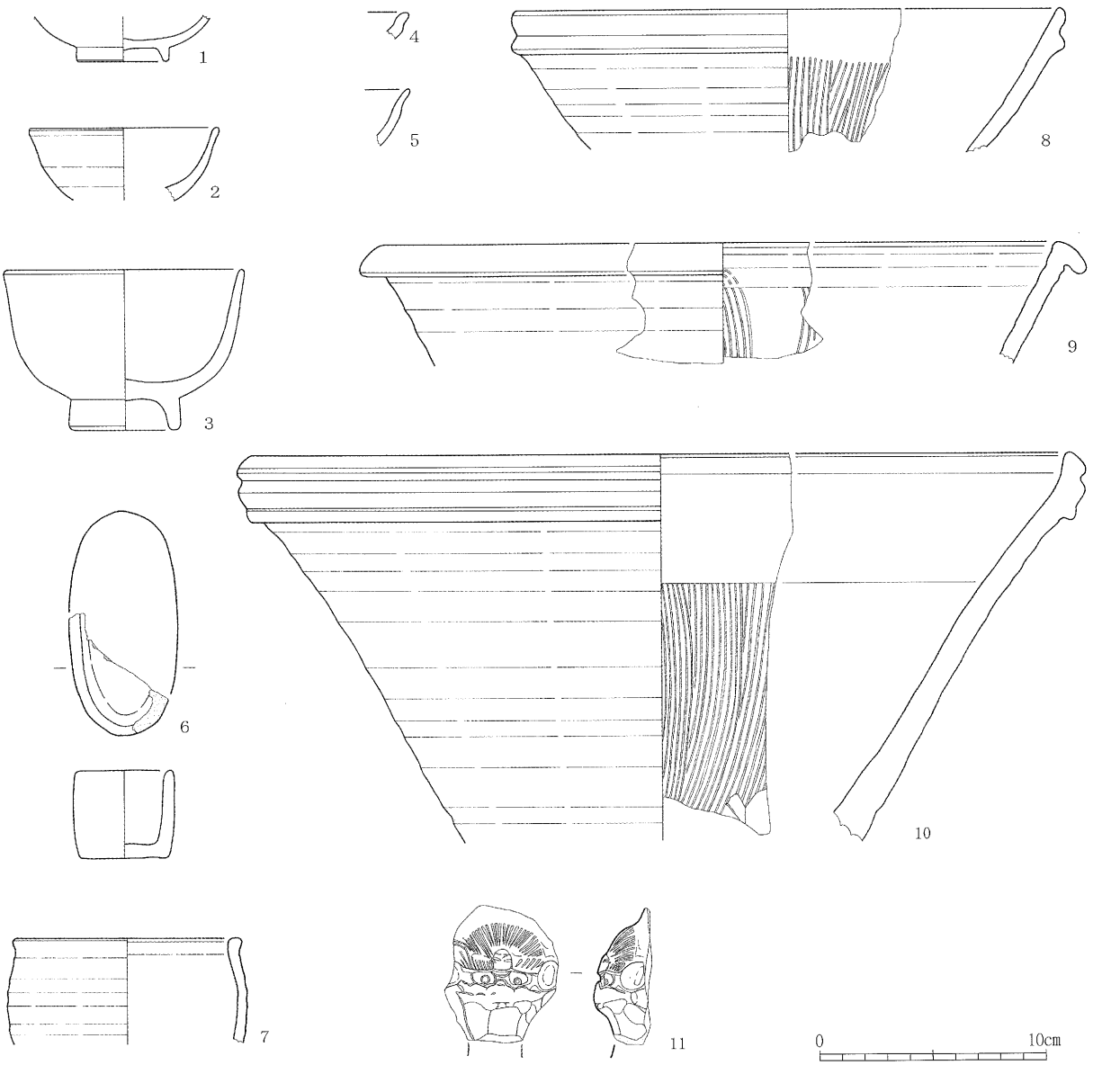
SＫ４土坑

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	風化礫及び風化礫粒を多く含む。
2a	10YR2/1　黒色	シルト質粘土	風化礫を含む。
2b	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	風化礫粒を多量に含む。

SＫ５土坑

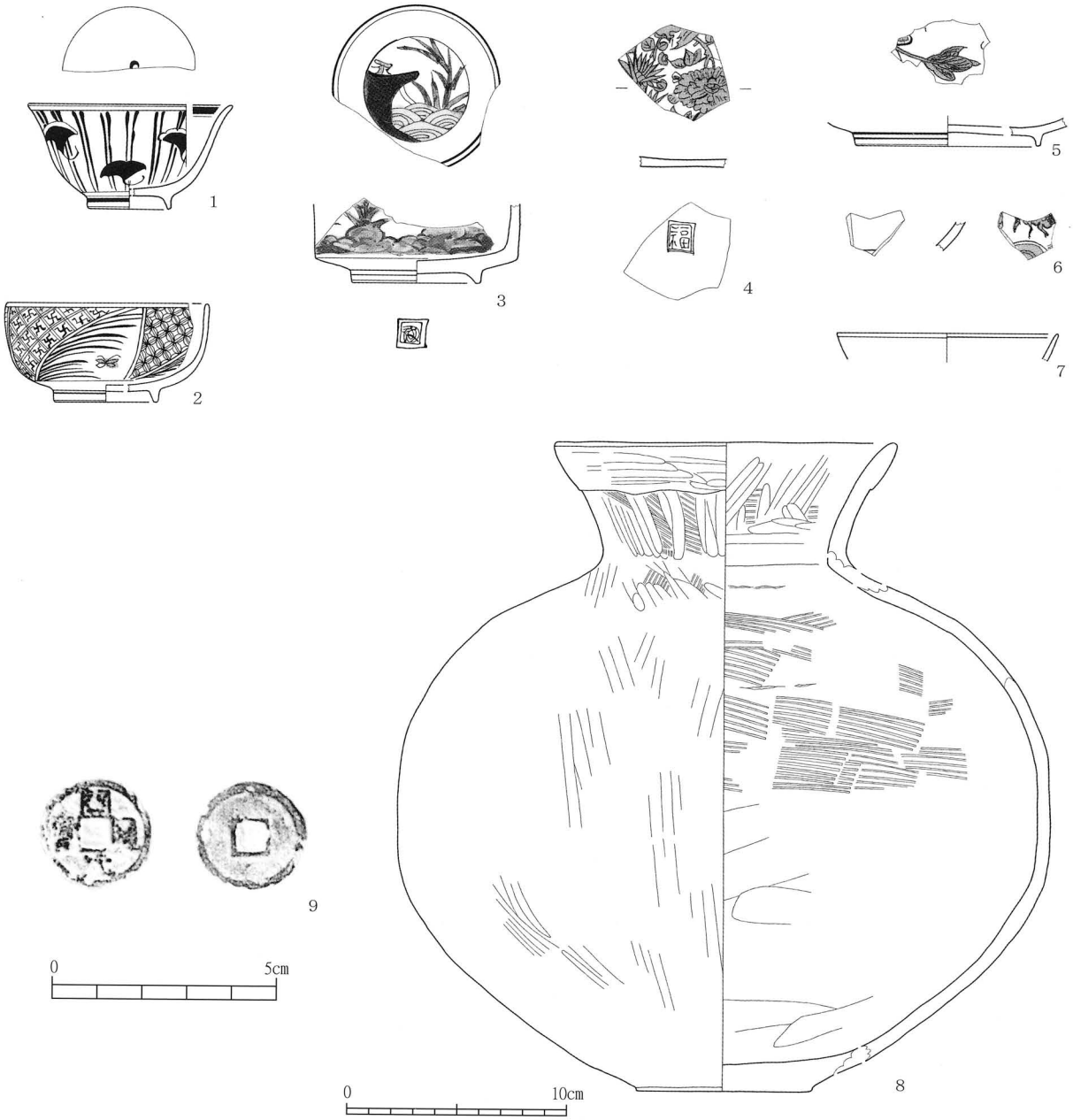
層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	風化礫粒、褐色土の小粒を多く含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	風化礫を多く含む。炭化物の小片をわずかに含む。

第８図　土坑実測図



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
1	I-4	Ⅰ層				陶器	碗	(2.2)			4.1	灰釉　大堀相馬　18c代	6-1
2	I-8		SD1			陶器	碗	(3.4)	8.6			飴釉　瀬戸美濃　18c代	6-2
3	I-6		SK4	2層		陶器	碗	7.3	10.9		4.8	透明釉　呉器手　肥前　18c前半頃	6-3
4	I-10		Pit33	1層		陶器	皿					端反　志野　17c初	6-4
5	I-9		Pit12	1層		陶器	皿					端反　志野　17c初	6-5
6	I-1		撹乱			陶器	鬢水入	3.9	(5.1)	(2.3)		淡青色釉　小野相馬　18c代	6-7
7	I-5		SK4			陶器	鉢？	(4.8)	10.1			長石釉　唐津　17c初	6-6
8	I-7		SK4	2b層		陶器	擂鉢	(6.4)	(24.5)			鉄釉　在地？　18c代	7-1
9	I-2	Ⅰ層				陶器	擂鉢	(5.5)	30.4			鉄釉　岸窯系　17c後半	7-2
10	I-3	Ⅰ層				陶器	擂鉢	(17.4)	36.7			鉄釉　在地？　18c代	7-3
11	I-11	Ⅰ層				瓦質土器	獣足鉢？	6.2	6.0		2.5	獣足部片　江戸	6-8

第９図　出土遺物１（陶器、瓦質土器）



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	J-1	I層				磁器	碗	4.7	9.2		3.7	染付　端反　銀杏文　瀬戸美濃　19c頃	7-4
2	J-2	I層				磁器	碗	4.5	9.1		4.6	染付　蓋物　外面卍文、草文、蝶文　肥前　18c代	7-5
3	J-3	I層				磁器	碗	(3.6)			5.7	染付　見込青海波文　高台内渦福銘　肥前　18c前半	7-6
4	J-6		SK4	2層		磁器	皿					青花　草花文　高台内二重枠の「福」銘　中国　16c後半	7-7
5	J-4	I層				磁器	皿	(1.1)			(8.0)	青花　草花文　中国　16c後半	7-8
6	J-5	I層				磁器	碗					青花　文様不明　中国　16c代	7-9
7	J-7		Pit56	1層		磁器	碗					青花　文様不明　中国　16c代	7-10
8	C-1		SDA			非ロクロ土師器	壺	29.4	(15.7)		(7.8)	外面:口縁ハケメのちヘラミガキ,体部ヘラミガキ　内面:口縁ヘラミガキ,体部ハケメナデ	6-9
9	N-1		Pit1	1層		古銭			2.4			開元通宝	6-10

第10図　出土遺物２（磁器、土師器、古銭）

６　まとめ

①　今回の調査区では、掘立柱建物跡４棟・溝跡３条・土坑５基及び掘立柱建物跡以外のピット36基が検出された。

②　調査区南部の段差は、18世紀以降の陶磁器が出土したＳＫ４土坑を削っていることから、概ね江戸時代中期以降に形成されたもので、城館の造成に伴うものでないと考えられる。

③　掘立柱建物跡は、ＳＢ４掘立柱建物跡以外は調査区の北側にのびている。

④　掘立柱建物跡は、柱穴の切り合い及び空間の重複があることから、建て替えが行われたことがわかり、長期間にわたって土地が使用されていたことが考えられる。

⑤　掘立柱建物跡のうち、ＳＢ１掘立柱建物跡は17世紀初頭の陶器が出土したことからこれ以降の建築年代で、ＳＢ２掘立柱建物跡はこれより古いと考えられる。ＳＢ３掘立柱建物跡はこの前後の時期と推定される。

⑥　ＳＤ１～３溝跡は、西壁の断面観察及び堆積土の状況により、段差の形成に伴う遺構で、掘立柱建物跡などより新しい時期のものと考えられる。

⑦　５基の土坑のうち、ＳＫ２土坑は、遺構の規模・形態・深さから井戸跡と考えられるが、底面を検出することはできなかった。また調査部分では井戸枠施設は検出されなかった。

⑧　本調査で検出された掘立柱建物跡や土坑は、松森城の麓部に形成された屋敷地に関係する遺構と考えられる。

＜参考文献＞

紫桃正隆（1973）：『史料　仙台領古城・館　第３巻』宝文堂出版

誉田慶信（2006）：「松森城跡」『仙台市史　特別編７　城館』仙台市

吾妻俊典ほか（1992）『野田山遺跡』「宮城県文化財調査報告書第145集」

1　遺構検出状況（南西から）

2　遺構検出状況（東から）

3　基本層序（北壁西端部）

図版１　遺構検出状況と基本層序

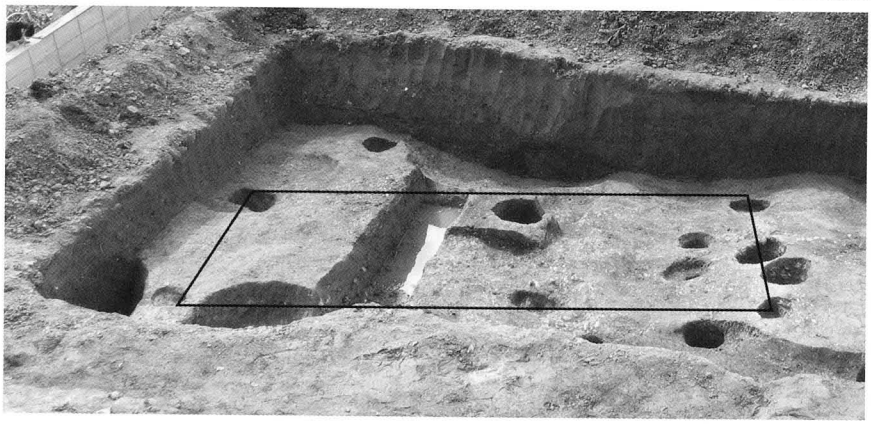
1　北壁断面：北壁中央部（南西から）

2　西壁断面（東から）

3　ＳＢ１・２・３掘立柱建物跡（西から）

図版２　土層断面と掘立柱建物跡

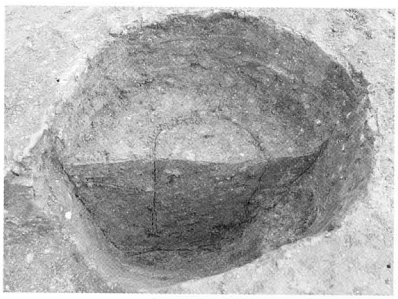
1　ＳＢ１掘立柱建物跡
（南東から）



2　ＳＢ４掘立柱建物跡
（北西から）

5　ＳＤ１・２・３・溝跡とＳＫ１・５土坑（北西から）

3　ＳＢ３掘立柱建物跡：Ｐ38



4　ＳＢ３掘立柱建物跡：Ｐ22

図版３　掘立柱建物跡と溝跡

1　ＳＤ１溝跡断面

2　ＳＤ２溝跡断面

3　ＳＤ３溝跡断面

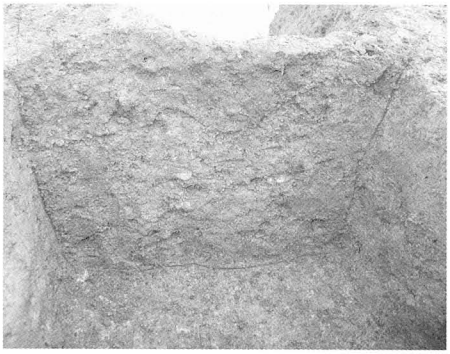
4　ＳＫ１土坑（南から）

5　ＳＫ２土坑（西から）

6　ＳＫ３土坑（西から）

7　ＳＫ４土坑（南から）

8　ＳＫ４土坑（東から）



9　ＳＫ５土坑断面（南から）

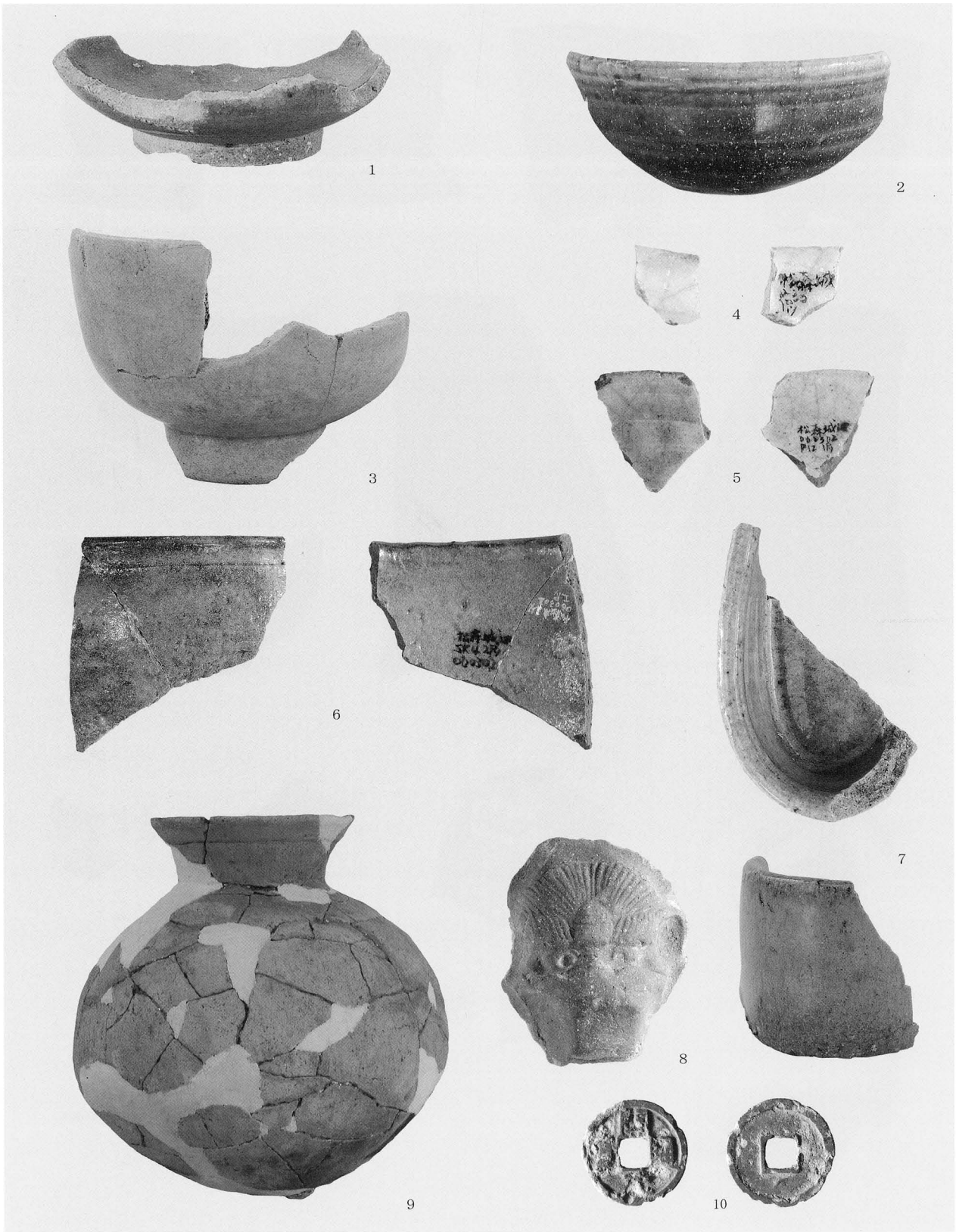
図版４　溝跡と土坑

1　ＳＤＡ溝跡（北壁Ⅲ層）土師器出土状況（南から）

2　完掘全景（東から）

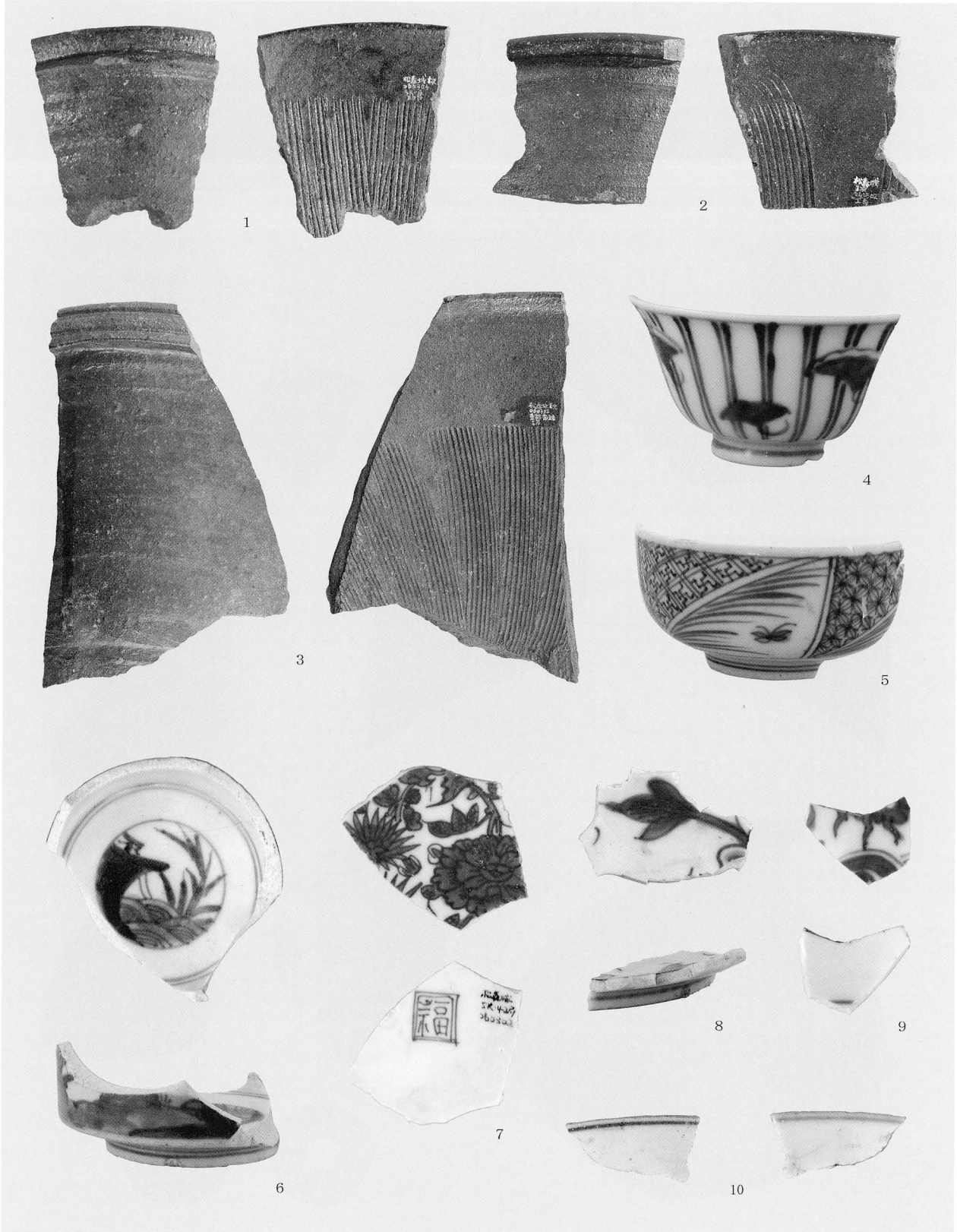
3　完掘全景（南西から）

図版５　ＳＤＡ溝跡の土器出土状況と完掘全景



1	陶器	碗	Ⅰ－4	Ⅰ層	（第９図１）	2	陶器	碗	Ⅰ－8	ＳＤ１	（第９図２）
3	陶器	碗	Ⅰ－6	ＳＫ４	2層 （第９図３）	4	陶器	碗	Ⅰ－10	Pit33	（第９図４）
5	陶器	碗	Ⅰ－9	Pit12	（第９図５）	6	陶器	鉢	Ⅰ－5	ＳＫ４	（第９図７）
7	陶器	鬢水入	Ⅰ－1	撹乱	（第９図６）	8	瓦質土器	鉢	Ⅰ－11	Ⅰ層	（第９図11）
9	土師器	壺	Ｃ－1	ＳＤ４	（第10図８）	10	古銭		Ｎ－1	Pit１	（第10図９）

図版６　松森城跡第１次調査出土遺物１



1	陶器	擂鉢	Ⅰ－7	ＳＫ４	2層	(第９図８)	2	陶器	擂鉢	Ⅰ－2	Ⅰ層	(第９図９)
3	陶器	擂鉢	Ⅰ－3	Ⅰ層		(第９図10)	4	磁器	碗	Ｊ－1	Ⅰ層	(第10図１)
5	磁器	碗	Ｊ－2	Ⅰ層		(第10図２)	6	磁器	碗	Ｊ－3	Ⅰ層	(第10図３)
7	磁器	碗	Ｊ－6	ＳＫ４	2層	(第10図４)	8	磁器	皿	Ｊ－4	Ⅰ層	(第10図５)
9	磁器	碗	Ｊ－5	Ⅰ層		(第10図６)	10	磁器	皿	Ｊ－7	Pit33	(第10図７)

図版７　松森城跡第１次調査出土遺物２

Ⅱ　松森城跡第２次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　松森城跡（宮城県遺跡番号19020）

調 査 地 点　仙台市泉区松森字内町19－１の一部

調 査 期 間　擁壁部分　　平成18年１月31日～２月２日

造成工事部分　平成18年３月１日～３月10日

調査対象面積　開発面積　1,538㎡　　造成工事部分　317㎡

調 査 面 積　擁壁部分　64㎡　　造成工事部分　302㎡

調 査 原 因　長屋住宅建築

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担 当 職 員　主査　工藤哲司　　文化財教諭　三塚博之・浅野克樹

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成17年６月２日付けで、地権者の斎藤一夫氏より、切土と盛土を伴う宅地造成工事のうえ、長屋住宅の建築に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答したことに基づく。調査は、擁壁工事部分を平成18年１月31日～２月２日に実施した。また、造成工事関係部分は、平成18年２月16日～17日に確認調査を実施したところ、多数の遺構が検出されたことから再度協議し、平成18年３月１日～３月10日に本調査を行った。

3　遺跡の位置と環境

松森城跡の位置と環境は、本書Ⅰ松森城跡第１次発掘調査報告書を参照されたい。第２次調査区は、城への登城路を挟んで１次調査区の北西約200mにあたる。松森城跡の麓に形成された城下集落の最上部に位置し、開発地区の北側は急傾斜となっており、斜面の途中に数段の曲輪が想定される。

4　基本層序

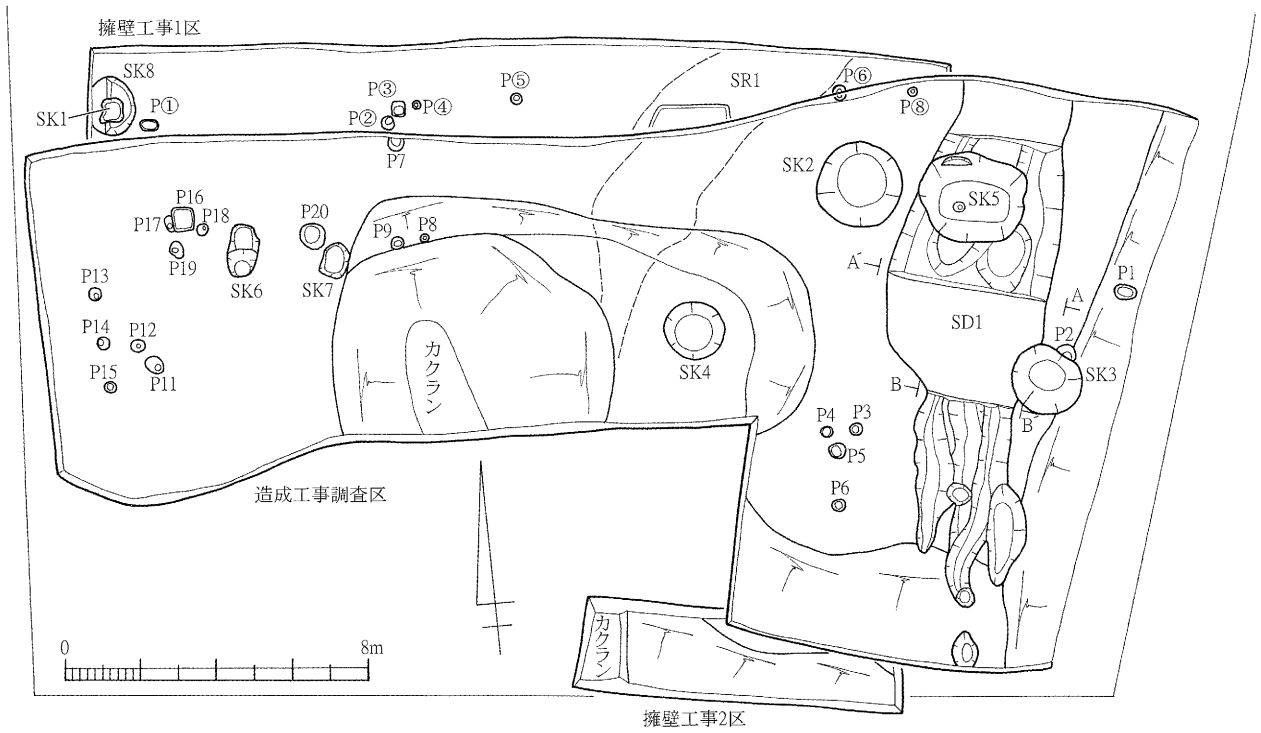
Ⅰ　層　10YR２/３黒褐色のシルト質粘土。表土及び耕作土。

Ⅱ　層　10YR３/３暗褐色のシルト質粘土。風化礫を多量に含む。ＳＲ１より東部の一部に分布。

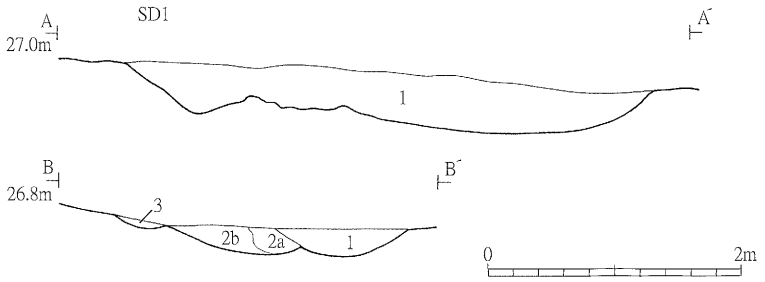
Ⅲ　層　2.5YR５/６黄褐色の粘土層。地山。場所により、黒色粘土・暗褐色シルト質粘土が地山層となっているが、いずれも丘陵から供給されたと観察される風化礫を多く含んでいる。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で、溝跡１条・井戸跡３基を含む土坑７基・ピット25基が検出された。ピットには柱痕跡の認められるものや、底面から扁平な石材が出土したものもあるので、掘立柱建物跡が存在した可能性が考えられるが、建物配置の分かるものはない。調査区中央の現況が屋敷から果樹畑への登り口に当る部分は、近代以降に削平を受け、大きな撹乱坑が掘られている。



第11図　遺構配置図



ＳＤ１

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/2　黒褐色	シルト	風化礫粒を下層に少量含む
2a	10YR2/2　黒褐色	シルト	風化礫ブロックを多量に含む

層No	土　色	土　性	備　考
2b	10YR2/2　黒褐色	シルト	風化礫粒を少量含む
3	10YR2/2　黒褐色	シルト	風化礫粒を少量含む

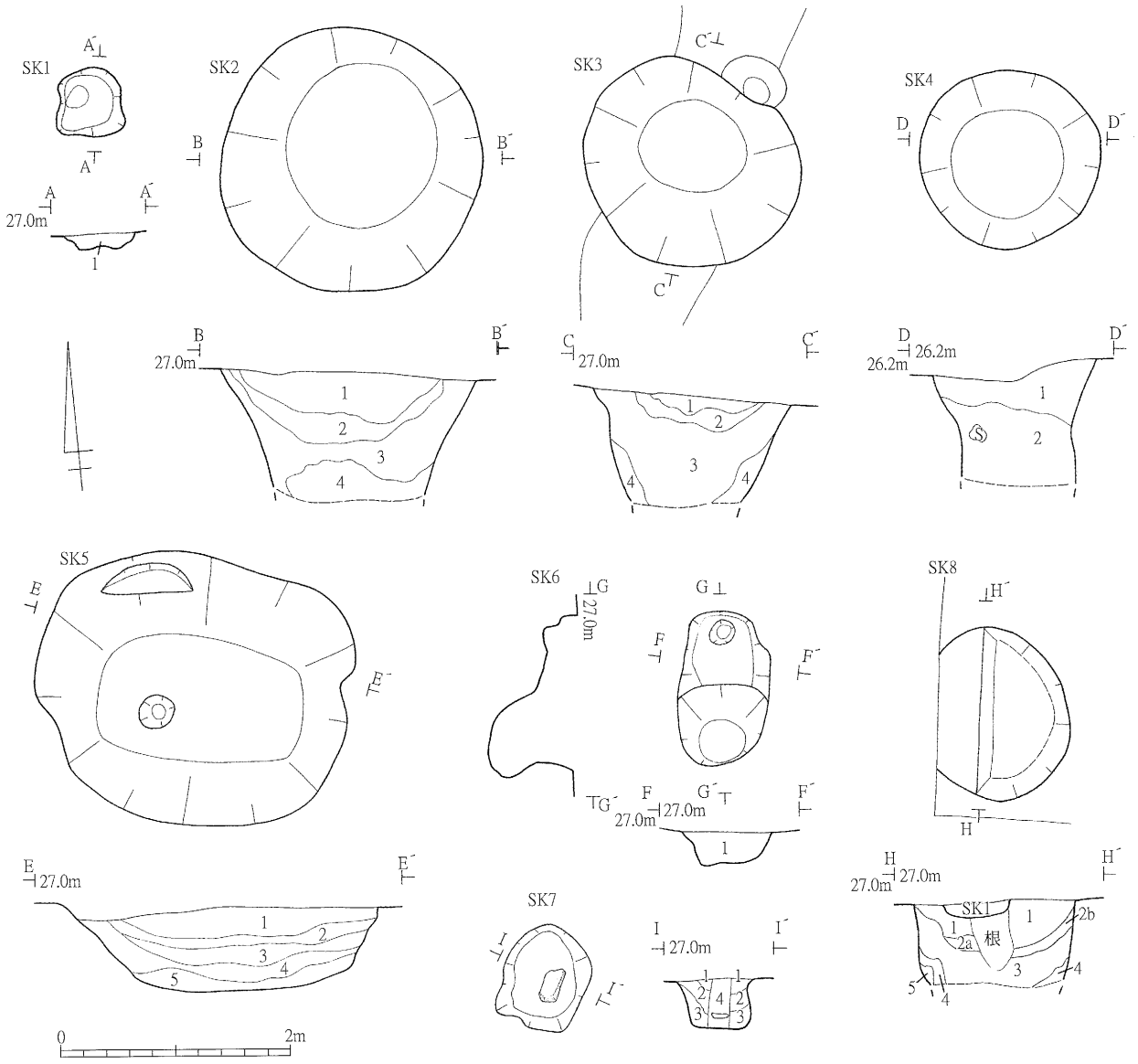
第12図　溝跡断面図

１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区の東部で、傾斜と同じ南北方向に延びて検出された。ＳＫ３・５土坑に切られている。検出部の中央付近で幅4.2m・深さ44cmを測る。北端部では１回以上、南半部では２回の掘り直しが行われたことが遺構の横断面と土層断面から確認でき、南端部では４条の平行する溝に分かれている。堆積土は各層とも風化礫を含む黒褐色のシルト層で、旧表土層が流入して堆積したと考えられる。遺物は、ロクロ土師器坏片１点（第14図１）、土師質土器皿３点（第14図４～６）が出土した。土師質土器は、佐藤洋氏の編年では、３期ないし４期に相当し、13世紀から14世紀頃の年代が考えられる（注１）。

２）土坑

ＳＫ１土坑　擁壁工事１区の西端部で検出された。ＳＫ８土坑を切る。平面形は不整な方形を呈し、南北長軸60cm・東西短軸55cmを計る。断面形は底面に凹凸のある不整形で、深さは12cmほどである。堆積土は、風化礫を多く含む



SK 1

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR5/8　黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色の風化礫を多く含む。炭化物を少量含む。

SK 2

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3　黒褐色	シルト	風化礫を多量に含む。炭化物を含む。
2	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土及び褐色土のブロックを多量に含む。
3	10YR3/3　暗褐色	砂質粘土	風化礫を含む。
4	5Y2/2　ｵﾘｰﾌﾞ黒色	粘土	オリーブ灰色の小ブロックを含む。

SK 3

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3　黒褐色	シルト	風化礫を多量に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト	黄褐色粘土のブロックを多量に含む。
3	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	風化礫を少量含む。
4	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	風化礫を多量に含む。

SK 4

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3　黒褐色	シルト	風化礫を含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	層下部は次第にグライ化している。

SK 5

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	風化礫・風化礫粒を多量に含む。
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	粘土・砂の薄層を含む。
3	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	炭化物・風化礫を多量に含む。
4	10YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	黒色粘土・砂の薄層・風化礫粒を含む。
5	10YR3/1　黒褐色	粘土	植物遺体を含む。

SK 6

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	風化礫を多量に含む。

SK 7

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	風化礫粒を含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	暗褐色土と風化礫粒を少量含む。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト	風化礫粒を少量含む。褐色土を部分的に含む。
4	10YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	

SK 8

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘土	風化礫を多く含む。
2a	2.5YR7/4　浅黄色	粘土	風化礫及び黒褐色のブロックを含む。
2b	10YR5/8　黄褐色	粘土	風化礫及び黒褐色のブロックを多量に含む。
3	10YR3/4　暗褐色	粘土	風化礫及を多く含む。明黄褐色土のブロックを含む。
4	10YR6/6　明黄褐色	粘土	風化礫を少量含む。
5	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	風化礫を少量含む。

第13図　土坑（井戸跡・柱穴）実測図

黄褐色のシルト質粘土層である。遺物は出土していない。

ＳＫ２土坑（井戸跡）　調査区の北東部で検出された。重複はない。平面形は円形を呈し、南北軸223cm、東西軸217cmを測る。検出面から110cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は逆台形で、上部がやや広がっている。堆積土は調査部分で４層に分けられた。調査部分では井戸枠等は検出されておらず、素掘りの井戸と考えられる。遺物は、古代の平瓦片１点（第14図14）、折り曲げて形成した管状の鉄製品１点（第15図６）、洪武通宝１点（第15図７）が出土している。

ＳＫ３土坑（井戸跡）　調査区の東辺部中央で検出された。ＳＤ１溝跡・Ｐ２を切る。平面形は円形を呈し、南北軸で150cmを測る。検出面から90cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は円筒形で、壁面は垂直に近い立ち上がりを示す。堆積土は調査部分で４層に分けられた。素掘りの井戸と考えられる。遺物は、表面が平滑なことから砥石と考えられる砂岩製の石材（第15図２）が１点出土している。

ＳＫ４土坑（井戸跡）　調査区の中央付近で検出された。撹乱によって上部が切られている。平面形は円形を呈し、南北軸155cm、東西軸156cmを測る。検出面から110cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は円筒形で、壁面は垂直に近い立ち上がりを示すが、上部はやや広がっている。堆積土は調査部分で２層に分けられた。素掘りの井戸と考えられる。遺物は、中世陶器の甕の体部破片１点（第14図７）と、茶臼の下臼の破片（第15図１）が出土している。

ＳＫ５土坑　調査区の北東部で検出された。ＳＤ１溝跡を切る。平面形は楕円形に近い隅丸長方形を呈し、東西長軸273cm・南北短軸で233cmを測る。深さは72cmで、断面形は舟底形を呈する。北壁の西寄りには半円形のステップ状の段が形成されている。堆積土は５層に分けられた。いずれも色調は黒褐色を呈す。各層とも自然堆積層と観察される。最下層は粘土層で、植物遺体を含んでいる。南西角付近の底面は直径30cm、深さ約５cmのピット状に落ち込んでいる。遺物は出土していない。

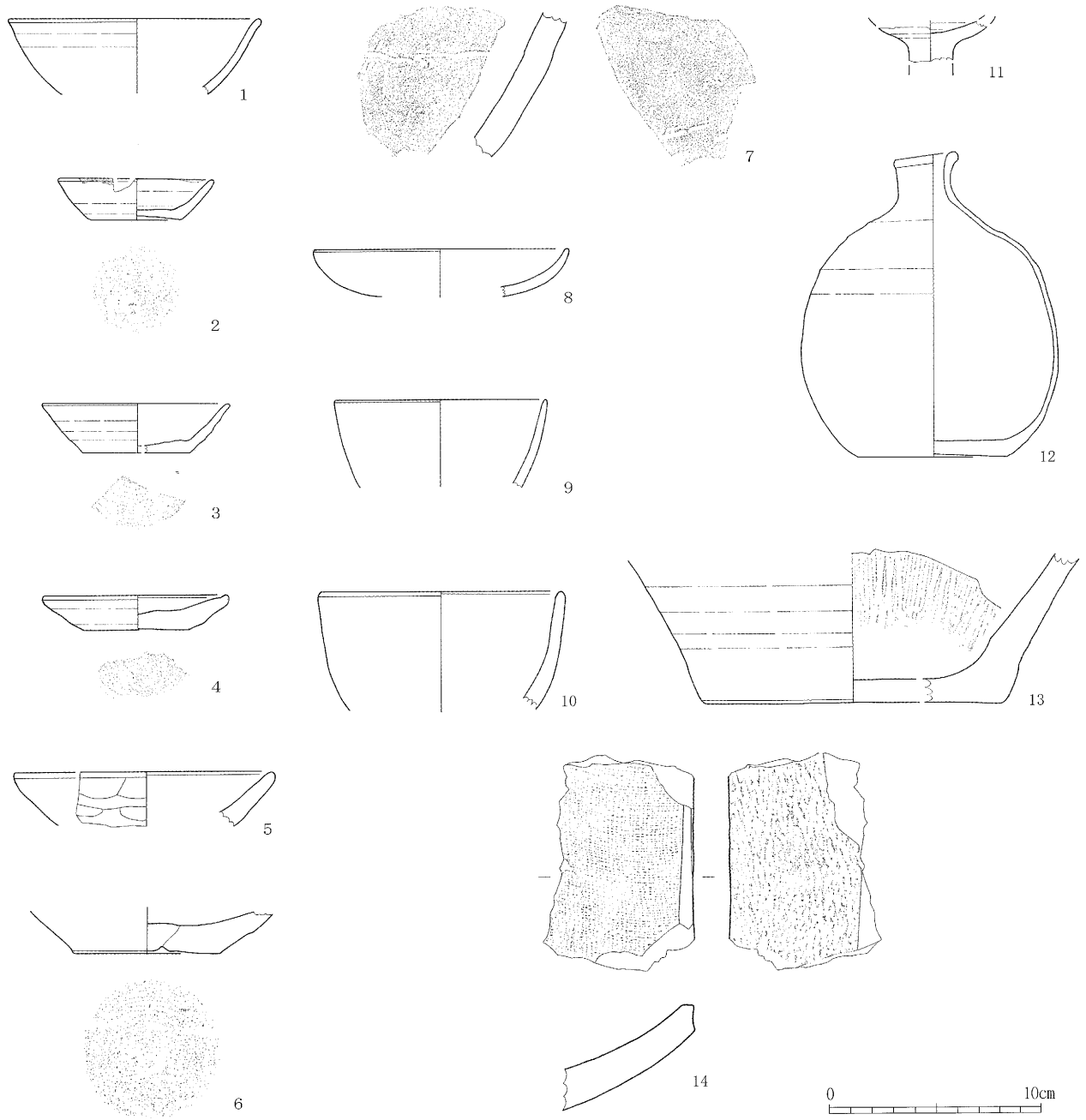
ＳＫ６土坑　調査区の西部で検出された。平面形は不整な楕円形を呈し、南北長軸134cm・東西短軸で77cmを測る。深さは75cmで、横断面形は舟底形を呈し、縦断面形は南側が１段深く掘られ、南端は壁面がオバーハングしている。また、北側の底面端部には浅いピット状の落込みがある。堆積土は黒褐色シルト１層で、下部には黄褐色土のブロックを含んでいる。遺物は土師器片が数点と、土師質土器の皿１点（第14図２）出土している。土師質土器の口縁部には数箇所にススが付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。佐藤洋氏の編年では、該当する資料はないが、空白期の５期ないし６期の資料で、15～16世紀に相当する可能性が考えられる。

ＳＫ７土坑　調査区の西部で検出された。平面形は不整形を呈し、南北長軸93cm・東西短軸で77cmを測る。深さは44cmで、横断面形は凹形を呈す。径18cmの円形の柱痕跡が認められたことから、掘立柱の掘り方と考えられる。柱痕跡の位置からは掘り方の底面から数cm浮いた面で礎板状の扁平な石が出土している。柱痕跡の堆積土は黒褐色シルト質粘土で、掘り方の埋め土は３層に分けられる。17世紀後半から18世紀前半頃と考えられる肥前産の碗の破片（第14図９）が出土している。

ＳＫ８土坑（井戸跡）　擁壁工事１区の西端部で検出された。ＳＫ１土坑に切られる。西部は調査区の外にのびている。平面形は円形を呈し、南北軸で150cmを測る。検出面から90cmまで下げたが底面は検出されなかった。調査部分の断面形は円筒形で、壁面は垂直に近い立ち上がりを示す。遺物は出土していない。

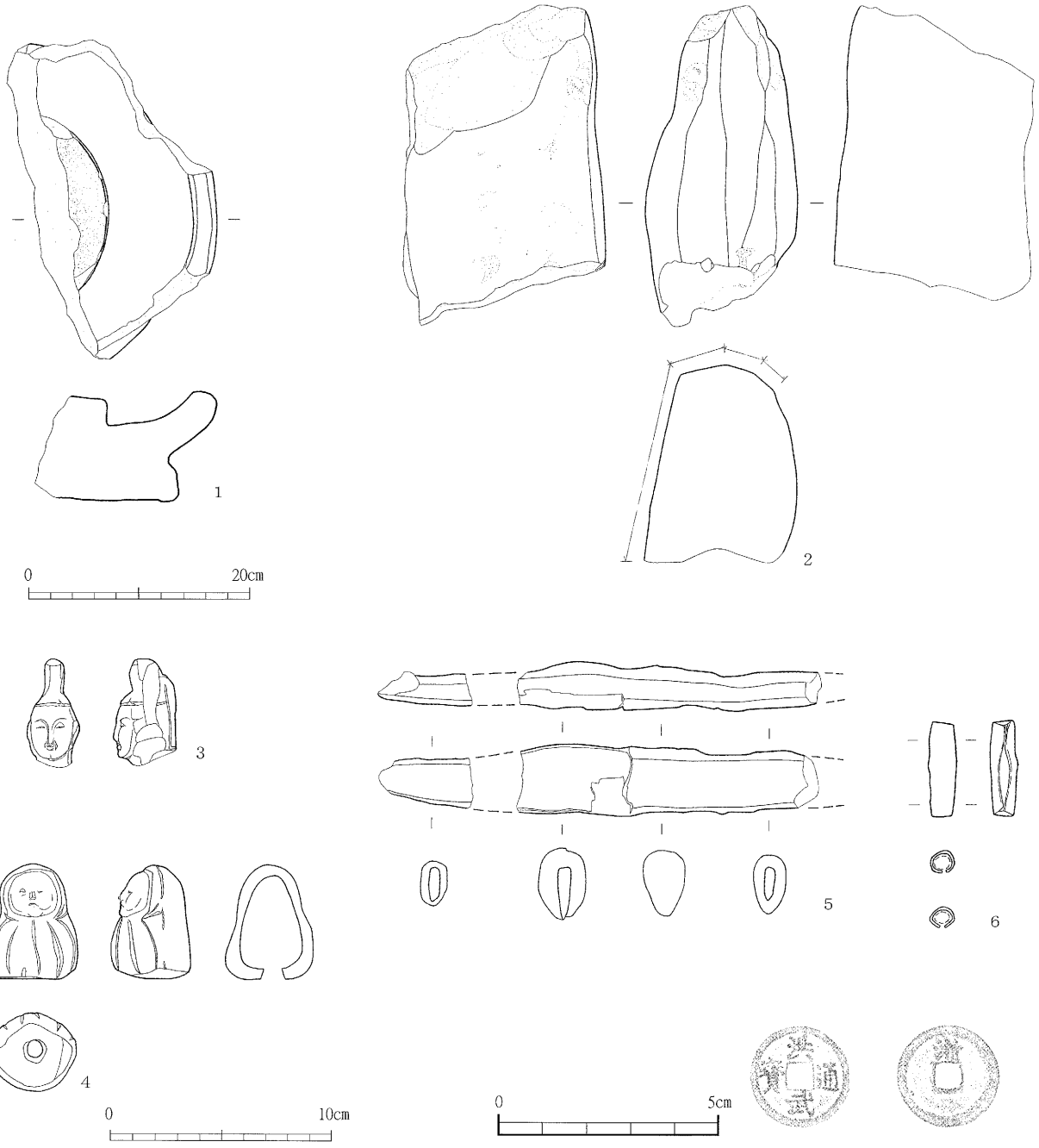
３）ピット群

ピットは25基検出され、このうち擁壁工事１区に関わるピット①・②・③・⑤・⑥、造成工事調査区に関わるピット５・11・14・16で柱痕跡が確認できた。ただし、撹乱や調査区の制約があり、掘立柱建物跡の柱配置を想定することはできなかった。



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
1	D-1		SD1	埋土		ロクロ土師器	坏	(3.5)	11.4			外面：ロクロ調整　内面：ヘラミガキ？	13-1
2	I-11		SK6			土師質土器	灯明皿	1.9	7.0		4.2	内、外面：ロクロ調整　底部回転糸切り　口縁スス付着　江戸～明治	13-2
3	I-5	Ⅰ層				土師質土器	皿	2.3	(8.6)		(5.0)	内、外面：ロクロ調整　底部回転糸切り　江戸	13-3
4	I-6		SD1			土師質土器	皿	1.6	(8.6)		4.8	内、外面：ロクロ調整　底部回転糸切り　中世？	13-4
5	I-8		SD1	埋土		土師質土器	皿	(2.5)	11.8			手づくね　中世？	13-5
6	I-9		SD1	埋土		土師質土器	皿	(2.0)	6.8			外面：ロクロ調整　底部回転糸切り　中世？	13-6
7	I-10		SK4	2層		陶器	甕					無釉陶器　在地　13c後半～14c前半	13-7
8	I-3	Ⅰ層				陶器	皿	(2.2)	(11.8)			淡青色釉　見込蛇ノ目釉ハギ　小野相馬　18c	13-8
9	I-13		SK7	1層		陶器	碗	(4.1)	(9.8)			透明釉　呉器手　肥前　17c後半～18c前半	13-9
10	I-2	Ⅰ層				陶器	碗	(5.5)	(11.4)			透明釉　呉器手　肥前　17c後半～18c前半	13-10
11	I-12		Pit20			陶器	仏飯器	(1.8)				鉛釉　脚欠損後に再利用　堤焼　19c前半	14-1
12	I-1		攪乱			陶器	壺	14.3	3.1		6.9	鉄釉　産地不明　江戸～明治	14-2
13	I-4	Ⅰ層				土師質土器	播鉢	(7.0)			(14.0)	外面：ロクロ調整　内面：筋目　16c頃？	14-3
14	G-1		SK2	1層		瓦	平瓦	(10.1)	(17.0)	(7.0)		凹面：布目　凸面：叩目	14-4

第14図　出土遺物１（土師器、土師質土器、陶器、瓦）



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
1	K-1		SK4	2層		石製品	石臼	(29.5)	(19.2)	(10.3)	4620	茶臼の下臼	14-5
2	K-2		SK3			礫石器	敲り面のある礫	29.7	14.1	18.5	8000	すす付着	14-6
3	P-1	I層				土製品	土人形	(5.0)	(2.5)	(2.9)		雛人形　内裏様　堤人形	14-10
4	P-2	I層				土製品	土人形	5.3	4.2	0.8		だるま？　堤人形	14-11
5	N-3					鉄製品	刀子？	(20.3)	3.2	2.2		錆付着	14-7
6	N-2		SK2	3層		鉄製品	不明	4.4	1.3	1.2			14-8
7	N-1		SK2	1層		古銭						「洪武通寶」「雍」	14-9

第15図　出土遺物２（石製品、土製品、金属製品）

４）沢状の落込み

ＳＲ１　調査区の中央を傾斜面と同方向にのびて検出された。擁壁工事１区の西部では幅が2.8mで、検出面からの深さは70cm以上である。断面形はＶ字上を呈する。堆積土上部に「十和田ａ（To－a)」(10世紀初頭降下）と見られる灰白色火山灰の小ブロックが分布することから、平安時代には埋没していたことが考えられる。この落込みについては、自然に形成された沢と推定される。

6　まとめ

①　溝跡１条・井戸跡３基を含む土坑７基・ピット25基などの遺構が検出された。

②　溝跡からは土師質土器の皿が複数出土しており、遺構の時期としては中世頃と考えられる。

③　土坑のうち３基は井戸跡と考えられる。調査部分では井戸枠施設は検出されなかった。

④　ＳＫ４土坑（井戸）からは、13世紀後半～14世紀前半頃の中世陶器が出土しているが、この遺物が井戸跡の年代を示すかどうかは判断できない。

＜参考文献＞

紫桃正隆（1973）:『史料　仙台領古城・館　第３巻』宝文堂出版

誉田慶信（2006）:「松森城跡」『仙台市史　特別編７　城館』仙台市

佐藤洋（2003）:『(２)陸奥南部２－宮城県－』「中世奥羽の土器・陶磁器」ｐ29～36東北中世考古学会編　高志書院

1　調査前全景
（北東から）

2　遺構検出状況全景
（北西から）

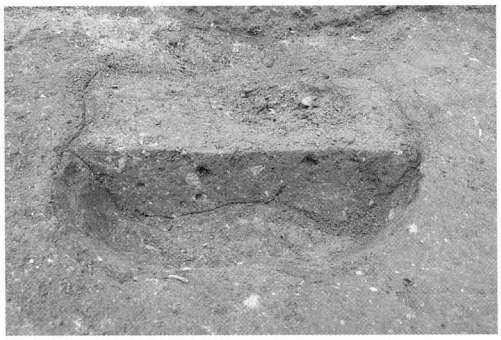
3　遺構検出状況：東部（南から）

4　遺構検出状況：中央部（北から）

図版８　調査区の位置と遺構検出状況

1　ＳＤ１溝跡
（南から）

2　ＳＤ１溝跡断面
（南から）

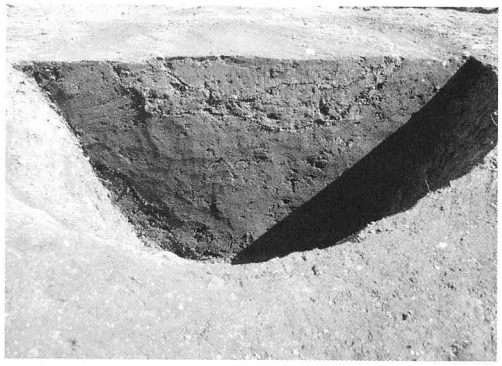


3　ＳＫ１土坑（東から）

4　ＳＫ２土坑：井戸跡（南から）

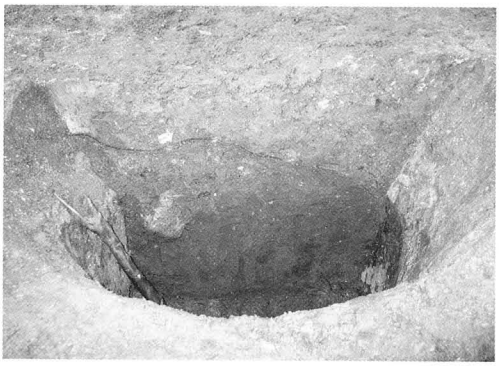
5　ＳＫ２土坑断面（南から）

図版９　溝跡と土坑・井戸跡

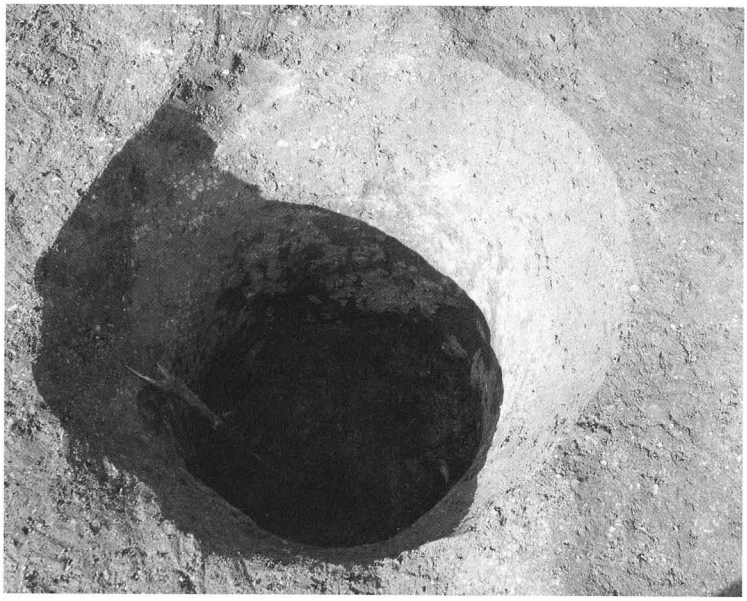


1　ＳＫ３土坑断面（南から）

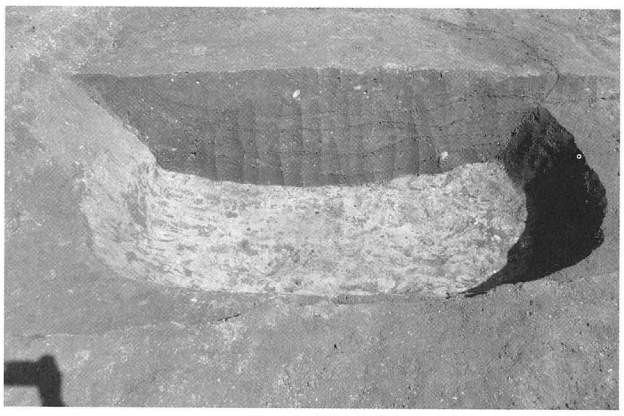
2　ＳＫ３土坑：井戸跡（南から）



3　ＳＫ４土坑断面（南から）



4　ＳＫ４土坑：井戸跡（南から）



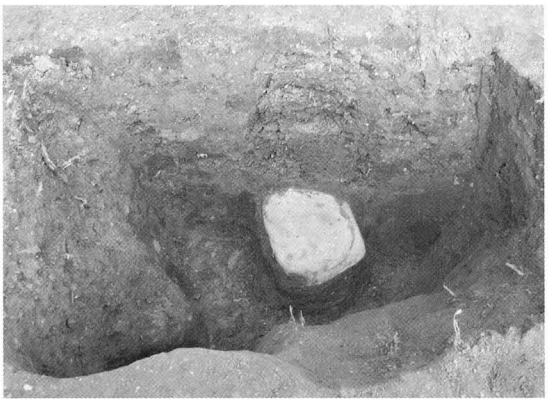
5　ＳＫ５土坑断面（南から）

6　ＳＫ５土坑（南から）

図版10　井戸跡と土坑

1　ＳＫ６土坑断面（南から）

2　ＳＫ６土坑（北西から）



3　ＳＫ７土坑断面（南から）

4　ＳＫ７土坑（南から）

4　ＳＫ８土坑（南から）

6　擁壁工事部２区（西から）

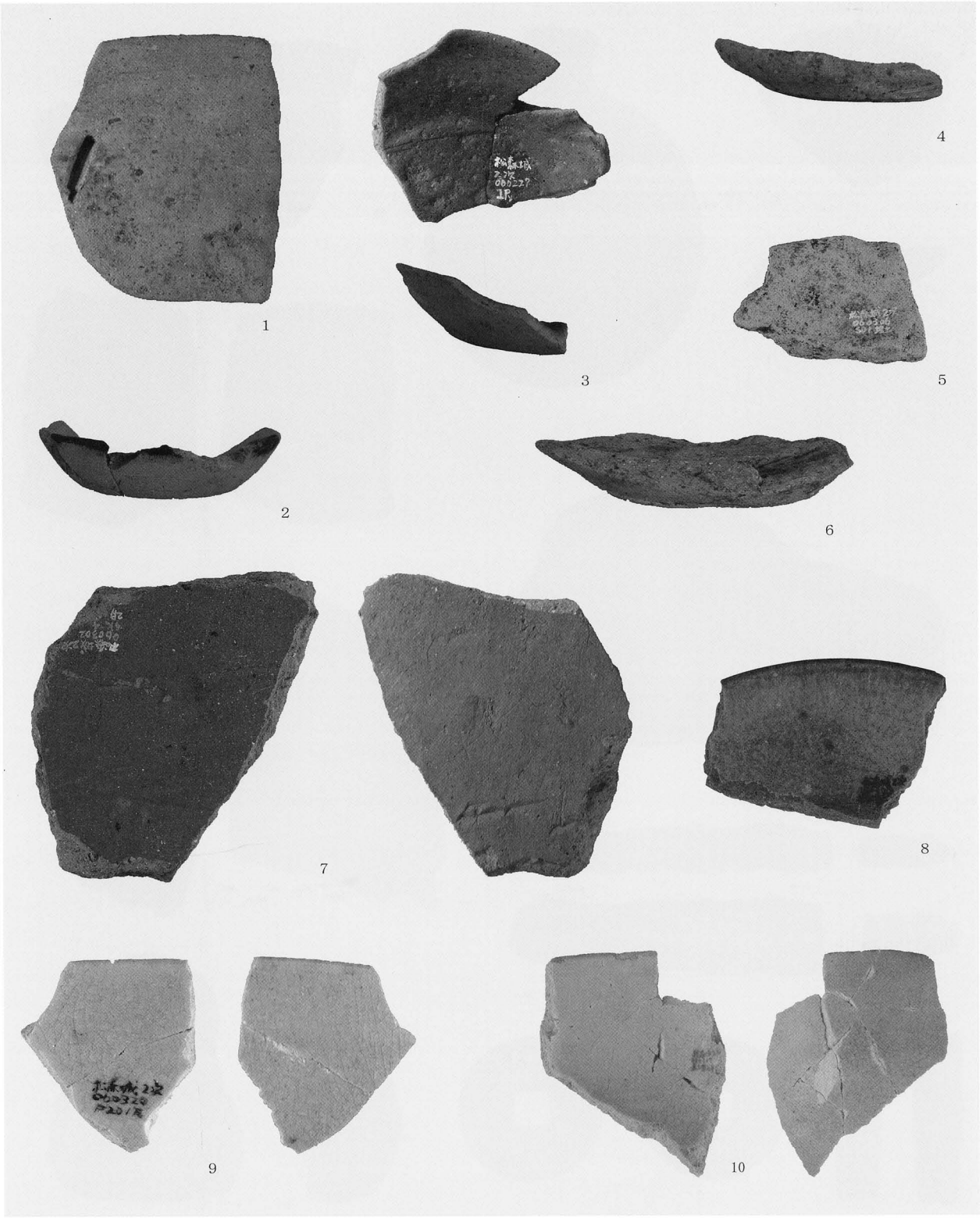
5　擁壁工事部１区（西から）

図版11　土坑と擁壁工事部の調査区

1　調査後の全景（北西から）

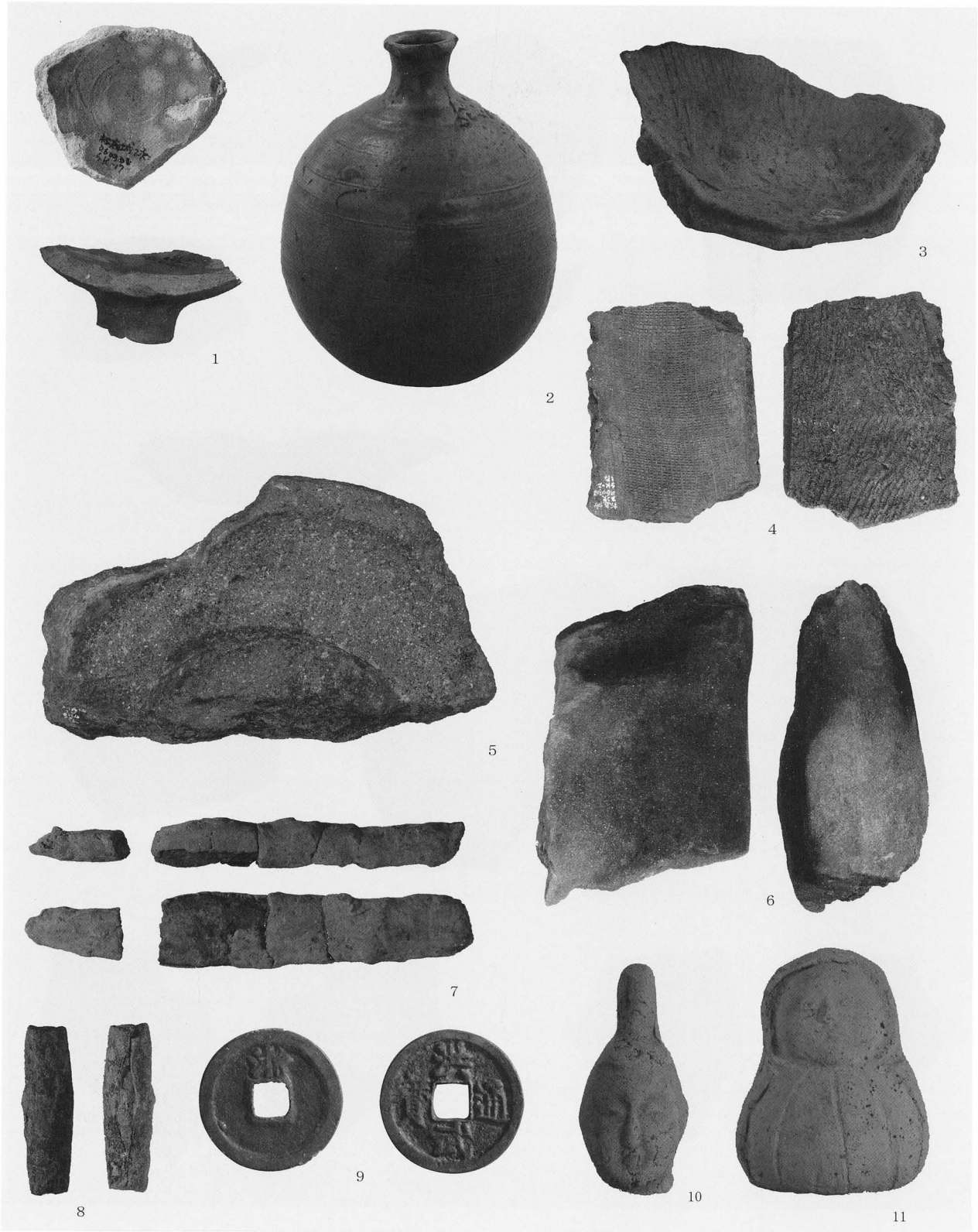
2　調査後の全景（東から）

図版12　調査終了写真



1	土師器	坏	D－1	ＳＤ１	（第14図１）	2	土師質土器	皿	Ⅰ－11	ＳＫ６	（第14図２）
3	土師質土器	皿	Ⅰ－５	Ⅰ層	（第14図３）	4	土師質土器	皿	Ⅰ－６	ＳＤ１	（第14図４）
5	土師質土器	皿	Ⅰ－８	ＳＤ１	（第14図５）	6	土師質土器	皿	Ⅰ－９	ＳＤ１	（第14図６）
7	陶器	甕	Ⅰ－10	ＳＫ４	（第14図７）	8	陶器	皿	Ⅰ－３	Ⅰ層	（第14図８）
9	陶器	碗	Ⅰ－13	Pit20	（第14図９）	10	陶器	碗	Ⅰ－２	Pit１	（第14図10）

図版13　松森城跡第２次調査出土遺物１



1	陶器	仏飯器	Ⅰ－12	ＳＫ７	（第14図11）
2	陶器	壺	Ⅰ－1	撹乱穴	（第14図12）
3	陶器	擂鉢	Ⅰ－4	Ⅰ層	（第14図13）
4	瓦	平瓦	Ｇ－1	ＳＤ１	（第14図14）
5	石製品	茶臼	Ｋ－1	ＳＫ４	（第15図１）
6	石製品	砥石	Ｋ－2	ＳＫ３	（第15図２）
7	鉄製品	刀子	Ｎ－3	Ⅰ層	（第15図５）
8	鉄製品	不明	Ｎ－2	ＳＫ２	（第15図６）
9	古銭		Ｎ－1	ＳＫ２	（第15図７）
10	土製品	人形	Ｐ－1	Ⅰ層	（第15図３）
11	土製品	人形	Ｐ－2	Ⅰ層	（第15図４）

図版14　松森城跡第２次調査出土遺物２

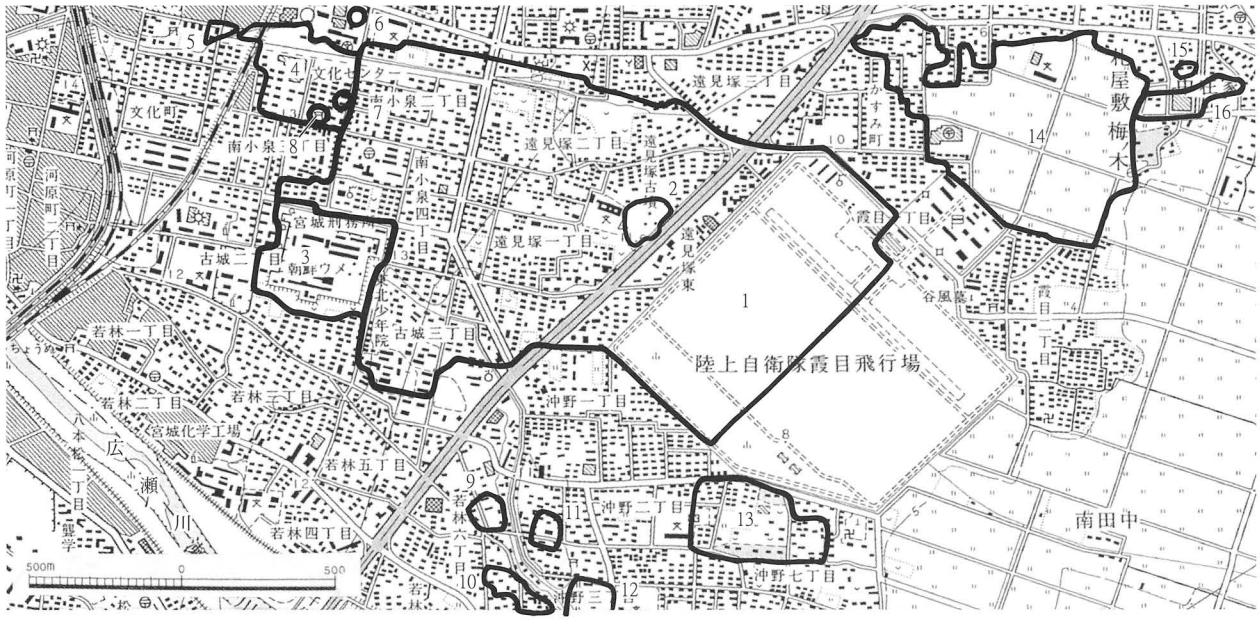
Ⅲ　南小泉遺跡第48次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　仙台市若林区遠見塚１丁目37－６
調 査 期 間　平成18年３月22日～３月23日
調査対象面積　68㎡
調 査 面 積　21㎡
調 査 原 因　個人住宅建築
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　調査係長　篠原信彦　　文化財教諭　三塚博之・浅野克樹・赤岡光騎

2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年２月20日付けで、齋藤良太氏より、柱状土壌改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年３月22日に実施した。建築予定地に３ｍ×７ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区内から土坑および溝跡などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。



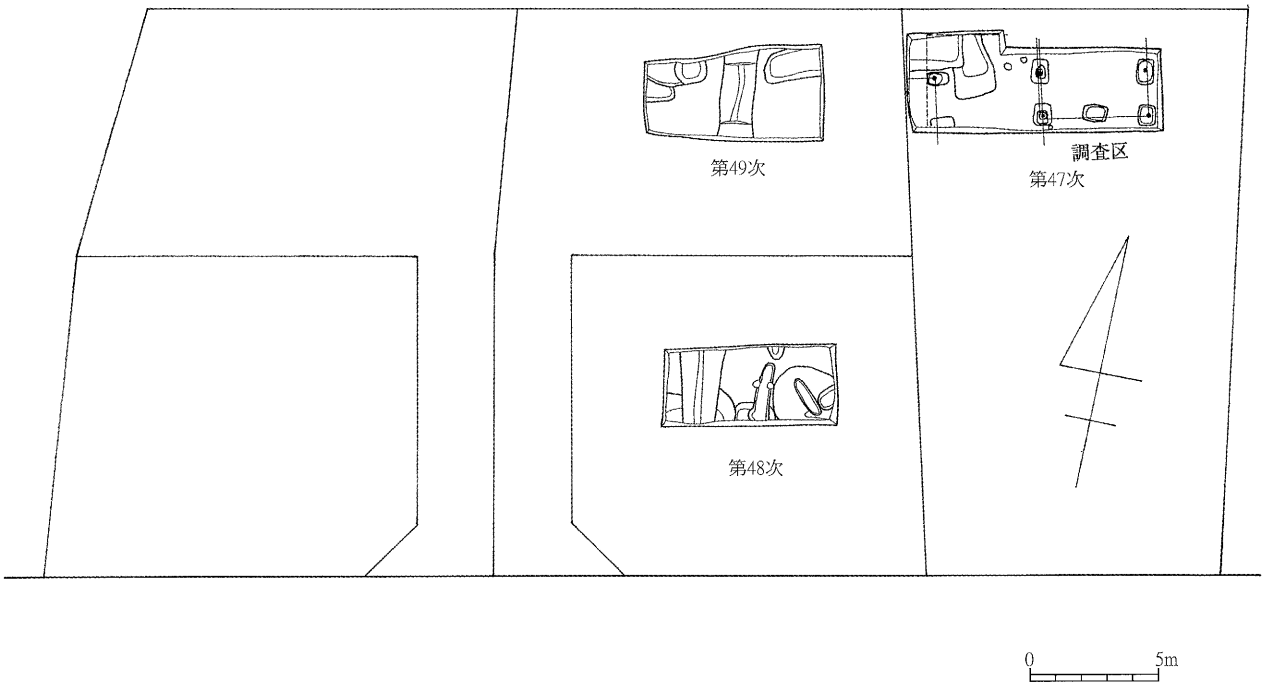
番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	南小泉遺跡	集落	自然堤防	縄文～近世	9	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（前期）	10	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
3	若林城跡	城館	自然堤防	近世	11	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	古代
4	養種園遺跡	城館	自然堤防	古代・中世・近世	12	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
5	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代・中世・近世	13	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
6	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	14	仙台東郊条里跡	条里遺構	後背湿地	古代
7	蛇塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	15	中在家遺跡	包含地	後背湿地	不明
8	猫塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳(後期？)	16	中在家南遺跡	集落・墓地	自然堤防	弥生～中世

第16図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第17図　調査地点の位置

3　遺跡の位置と環境

仙台市は西部と東部で地形が大きく二分され、西部は奥羽山脈から派生する丘陵ないし段丘地形となっている。東部は、北から七北田川・名取一広瀬川・阿武隈川の３河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道からなる複雑な地形を形成している。仙台湾と呼ばれる海岸部には３列の浜堤や潟湖性の低地が認められる。南小泉遺跡は、七北田川と名取一広瀬川に挟まれた沖積平野の発達した自然堤防上に立地している。標高10m前後である。



第18図　南小泉遺跡 第47～49次調査区関係図

南小泉遺跡は、仙台市内でも大きな遺跡のひとつで、東西約２km・南北約１kmの範囲に広がる。これまでの調査では、最古の時期としては縄文時代の遺物包含層が確認されている。その後は、弥生時代前期の土器や、弥生時代中期の土器棺墓が遺跡の東部を中心として発見されている。古墳時代は、前期段階は小規模の集落であったが、中期になると東部を中心に広い範囲に集落が形成される。後期になると集落の範囲は西部に広がることが確認されている。奈良・平安時代の竪穴住居跡も広範囲に確認されている。また中・近世の屋敷跡なども存在し、縄文時代以来各時代の遺構・遺物が発見されている。

周辺には遺跡も多く、南小泉遺跡東方約１kmの中在家南遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代を中心とする木製品が多量に出土した河川跡や、古墳時代前期の方形周溝墓群などが発見されている。また南小泉遺跡内には、全長110mの前期の前方後円墳である遠見塚古墳がある。西に隣接する若林城跡の中では、埴輪を有する古墳が発見されている。北西側には後期の円墳である法領塚古墳などがある。奈良時代になると、遺跡の北西１kmに陸奥国分寺・国分尼寺が建立される。近世には伊達政宗が晩年の居城とした若林城が造営される。

以上のように、これまでの調査からこの地域は、縄文時代に遺跡が形成され、古墳時代以降は陸奥国の中心地域として栄えていたことがうかがわれる。

4　基本層序

Ⅰａ層　10YR３/３暗褐色のシルト層。層厚約20cm。現在の畑耕作土。

Ⅰｂ層　10YR６/４にぶい黄褐色の山砂層。層厚40～50cm。畑のための盛土層。

Ⅰｃ層　10YR４/６褐色のシルト層。層厚10～40cm。盛土前の耕作土層。

Ⅰｄ層　10YR４/４褐色のシルト層。層厚約20cm。調査区東部に分布。

Ⅱ　層　10YR３/４暗褐色のシルト質粘土層。層厚約30cm。黄褐色土のブロックを霜降状に、炭化物をわずかに含む。土師器片を多く含む。上面で溝跡や土坑が検出された。

Ⅲ　層　2.5YR 5/4 黄褐色のシルト質砂層。酸化鉄を霜降状に含む。マンガン粒をわずかに含む。地山。上面で古墳時代の土坑が検出された。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、溝跡２条・土坑２基が検出され、Ⅲ層上面で土坑３基が検出された。

１）Ⅱ層検出遺構

①溝跡

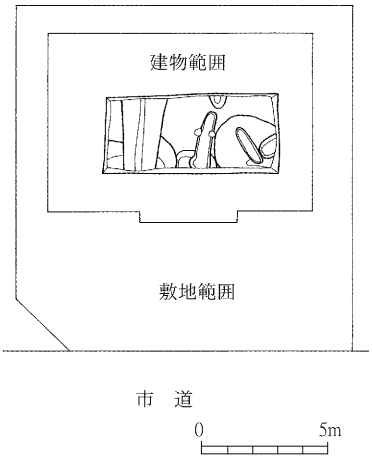
ＳＤ１溝跡　調査区の西部で、南北方向にのびて検出された。Ⅲ層のＳＫ２土坑を切っている。上面幅は北部で180cm・南部で112cm、底面幅は20cm前後である。検出面からの深さは75cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に分けられ、上部は暗褐色の粘土質シルトで炭化物を含んでいる。下部は暗褐色の粘土質シルトで褐灰色土のブロックを含んでいる。遺物は、土師器の壺の口縁部の破片（第22図14）が出土している。

ＳＤ２溝跡　調査区の中央で、南北方向にのびて検出された。北部では一部が浅くなって途切れている。上面幅は断面位置で58cm、底面幅は40cm程である。検出面からの深さは８cmで、断面形は浅い舟底形を呈する。堆積土は、暗褐色のシルト質粘土１層で、黄褐色土のブロックを含む。

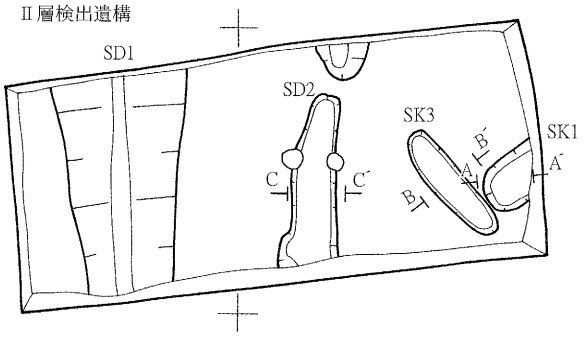
②土坑

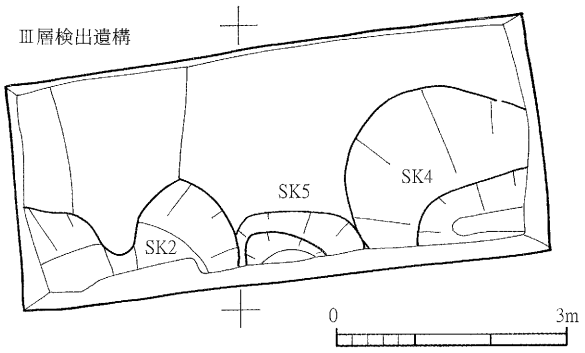
ＳＫ１土坑　調査区南東部で検出された。東部は調査区の外にのびている。検出部は略楕円形を呈し残存長軸約90cm、短軸68cmを測る。深さは約10cmで、底面に凹凸があり、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は、にぶい黄褐色土を黒褐色のシルト質粘土１層である。出土遺物はない。

ＳＫ３土坑　調査区南東部で検出された。平面形は北西から南東方向に長軸を有する長楕円形を呈し、長軸170cm・短軸46cmを測る。深さは７cmで、断面形は舟底形を呈す。堆積土は、黄褐色土の小ブロックを少量含む暗褐色の粘土質シルト１層で、土師器の小片を含んでいる。

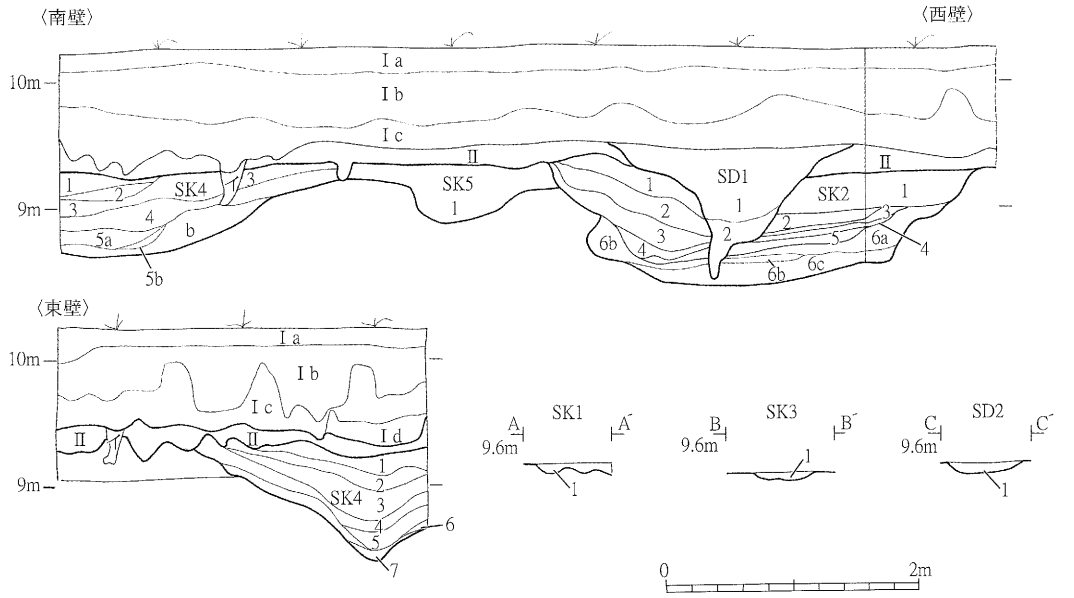


第19図　調査区配置図





第20図　遺構配置図



基本層

層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR3/3　暗褐色	シルト	耕作土
Ⅰb	10YR6/4　にぶい黄橙色	山砂	盛土
Ⅰc	10YR4/6　褐色	シルト	畑耕作土
Ⅰd	10YR4/4　褐色	シルト	
Ⅱ	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを斑状に多く含む。土師器片を含む。
Ⅲ	2.5Y5/4　黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を霜降状に含む

ＳＤ１

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物をまばらに含む
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	下部に褐灰色土のブロックを含む。

ＳＤ２

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む

ＳＫ１

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土を部分的に含む

ＳＫ２

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	土師器片を多く含む。炭化物粒を含む。
2	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄を含む。土師器片を多く含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物の小片をまばらに含む。酸化鉄を含む。
4	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。
5	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物を含む。
6a	10YR6/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄を含む。
6b	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄を含む。
6c	10YR6/2　灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む。

ＳＫ３

層No	土　色	土　性	備　考
1a	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	土師器片を含む。黄褐色土の小ブロックを少量含む。

ＳＫ４

層No	土　色	土　性	備　考
1	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト質砂	土師器片を多く含む。酸化鉄を少量含む。
2	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト質砂	酸化鉄を含む。
3	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト質砂	炭化物の小片をまばらに含む。酸化鉄を斑状に含む。
4	10YR5/1　褐灰色	シルト質砂	酸化鉄を含む。炭化物を少量含む。
5	10YR4/1　灰黄褐色	シルト質粘土	炭片を多量に含む。
6	10YR6/2　灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物の小粒を含む。
7	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	炭を多量に含む。

ＳＫ５

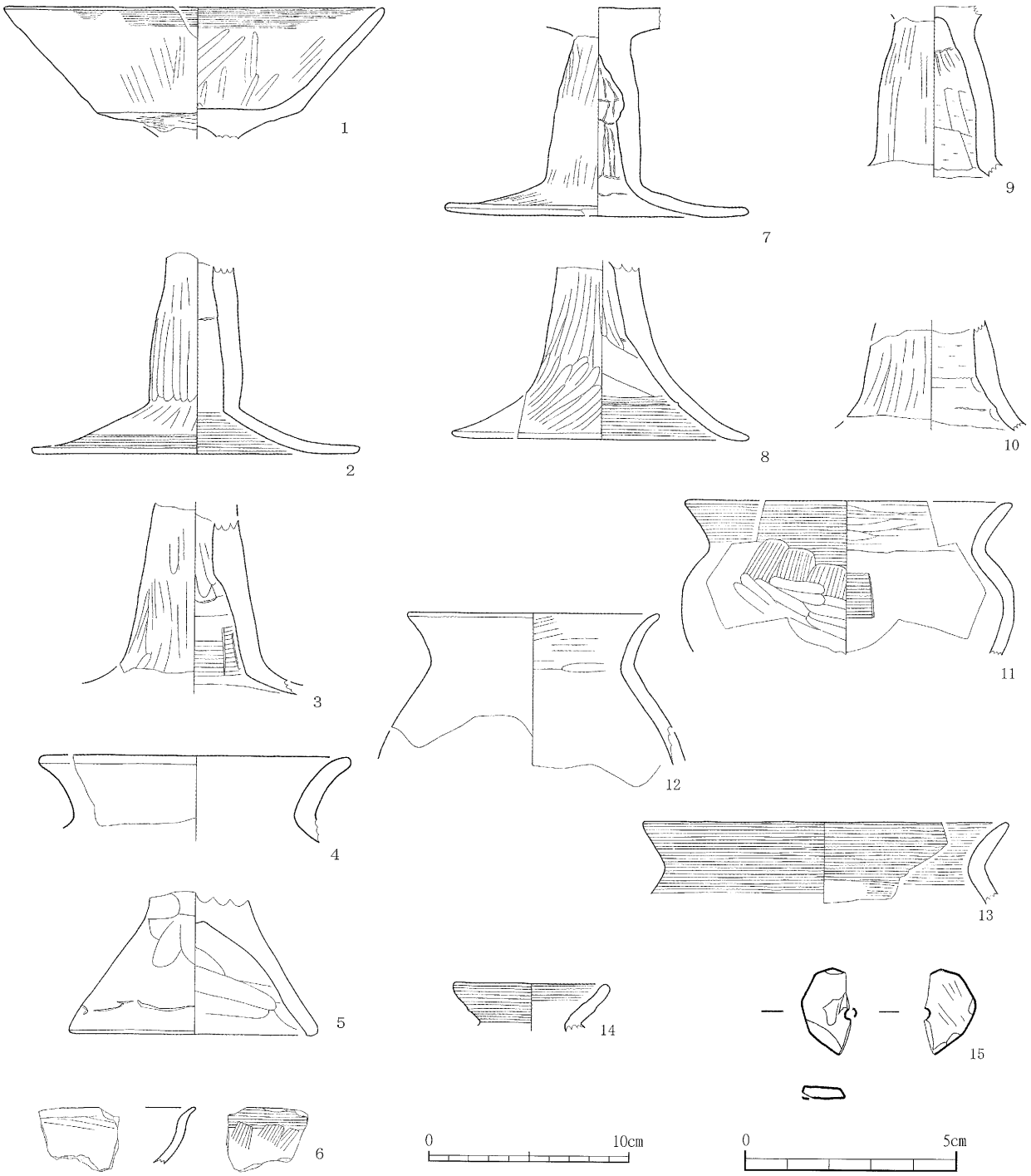
層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを少量含む。炭化物粒を含む。

第21図　調査区・遺構断面図

２）Ⅲ層検出遺構

ＳＫ２土坑　調査区南西角付近で検出された。西と南側は調査区の外にのびており、検出部は全体の１／４程度である。ＳＫ５土坑を切る。検出部から平面形は円形ないし楕円形を呈するものと推定される。検出部で東西約260cm、南北約130cmを測る。検出面からの深さは約85cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は８層に分けられる。上部が暗褐色の粘土質シルトで、下部は灰黄褐色土が数層に分けられる状態で堆積している。２層中から多数の土師器片が出土している。出土土師器には、高坏坏部片（第22図１）・高坏脚部片（２・３）・甕口縁部片（４）・台付甕脚部片（５）がある。器形及び調整は、いずれも南小泉式の範疇で理解されるもので、古墳時代中期に位置付けられる。

ＳＫ４土坑　調査区南東角付近で検出された。東と南側は調査区の外にのびている。検出部から平面形は円形ないし楕円形を呈するものと推定される。検出部で東西約240cm、南北約210cmを測る。検出面からの深さは約51cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は７層に分けられる。堆積土上部から土師器片が多く出土している。出土土師器



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考 (調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期)	写真図版
1	C-1		SK2		No.12	非ロクロ土師器	高坏	(6.3)	18.1			外面:口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面:口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ	18-1
2	C-2		SK2		No.14	非ロクロ土師器	高坏	(9.8)			15.6	外面:ヘラミガキ、ヨコナデ 内面:ナデ、ヨコナデ	18-2
3	C-3		SK2		No.13	非ロクロ土師器	高坏	(9.2)				外面:ヘラミガキ 内面:ナデ、ヘラナデ	—
4	C-5		SK2		No.22	非ロクロ土師器	甕	(4.1)	(14.7)			内外面磨滅	—
5	C-4		SK2		No.11	非ロクロ土師器	台付甕	(7.9)			11.8	外面:ナデ 内面:ナデ	18-7
6	C-6		SK4		No.18	非ロクロ土師器	坏					外面:ヨコナデ、ヘラナデ 内面:ヘラミガキ	—
7	C-7		SK4			非ロクロ土師器	高坏	(10.1)			14.5	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	—
8	C-8		SK4		No.21	非ロクロ土師器	高坏	(8.5)			(14.2)	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ、ヨコナデ	18-3
9	C-9		SK4		No.20	非ロクロ土師器	高坏	(7.8)				外面:ヘラミガキ 内面:ケスリ、ナデ	18-4
10	C-10		SK4		No.20	非ロクロ土師器	高坏	(5.3)				外面:ヘラミガキ 内面:ケスリ、ナデ	—
11	C-12		SK4		No.18	非ロクロ土師器	甕	(7.4)	(15.6)			外面:口縁ヨコナデ、体部ヘラナデのちヘラミガキ 内面:口縁ヘラミガキ、体部ヘラナデ	18-5
12	C-13		SK4		No.20	非ロクロ土師器	甕	(7.4)	(12.0)			外面:磨滅 内面:口縁部ヘラミガキ、体部ヘラナデ	18-6
13	C-11		SK4		No.18	非ロクロ土師器	甕	(3.7)	(17.5)			外面:口縁ヨコナデ 内面:口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ	—
14	C-14		SD1		No.2	非ロクロ土師器	壺	(2.3)	(7.5)			外面:口縁ヨコナデ 内面:口縁ヨコナデ	18-8
15	K-1		SK4		No.18	石製模造品	有孔円盤	(2.0)	(1.2)	0.3	1.0	単孔	—

第22図　出土遺物

には、坏片（第22図６）・高坏脚部片（７～10）・甕片（11～13）・石製模造品（15）がある。これらの土師器も南小泉式に位置付けられ、古墳時代中期と考えられる。

ＳＫ５土坑　調査区中央の南壁際で検出された。南側は調査区の外にのびている。平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出部の東西軸162cm・南北軸69cmを測る。深さは45cmで、断面形は舟底形を呈す。堆積土は、黄褐色土のブロックや炭化物粒を含む灰黄褐色の粘土質シルト１層である。

６　まとめ

①　Ⅱ層上面とⅢ層上面の２層で遺構が検出された。

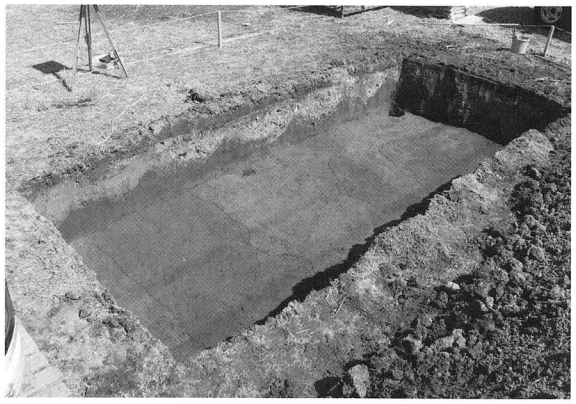
②　Ⅱ層上面では溝跡２条と土坑２基が検出された。

③　Ⅱ層検出のＳＤ１溝跡は、第49次調査区で検出されたＳＤ１溝跡つながることが、方向・規模・堆積土の状況から考えられる。この溝跡については、第47次調査区で検出された平安時代の掘立柱建物跡群の西側を区画する施設の可能性が考えられる。

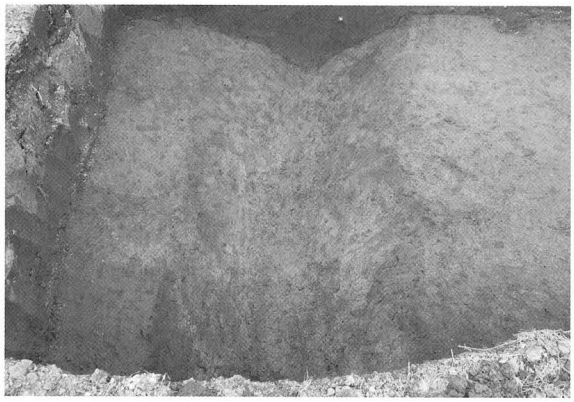
④　Ⅲ層では３基の土坑が検出され、ＳＫ２・４土坑中から古墳時代中期の土師器がまとまって出土し、周辺にこの時期の集落が存在した可能性が考えられる。

＜参考文献＞

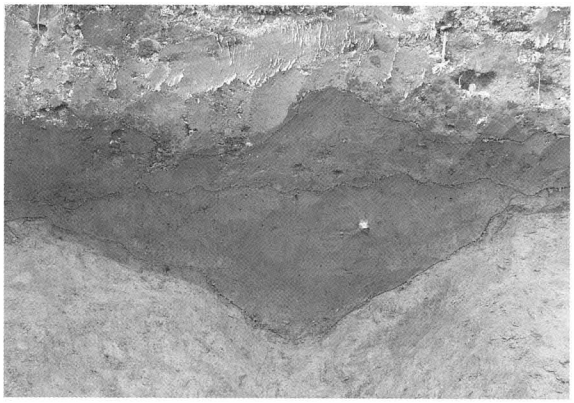
仙台市教育委員会（2006）：「ＸⅣ南小泉遺跡第47次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第301集



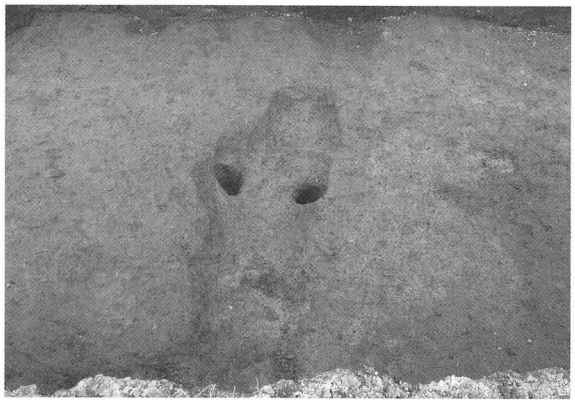
1　２層上面検出状況（南西から）



2　ＳＤ１溝跡（南から）



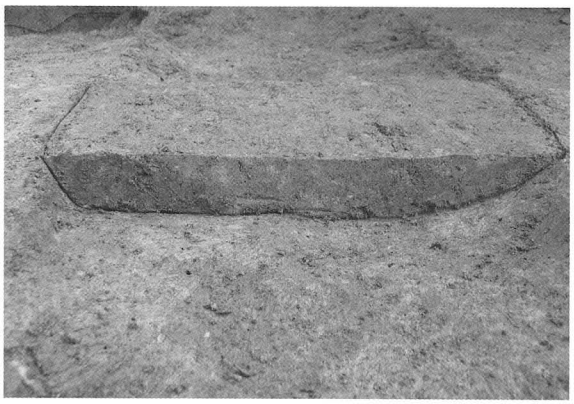
3　ＳＤ１溝跡土層断面（南から）



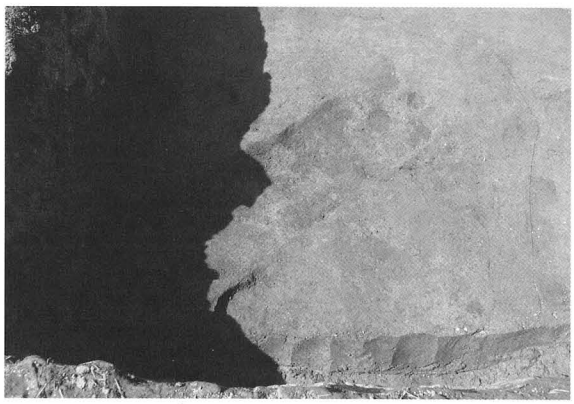
4　ＳＤ２溝跡（南から）

5　ＳＫ１土坑断面（南から）

6　ＳＫ１土坑全景（北から）



7　ＳＫ３土坑断面（南から）

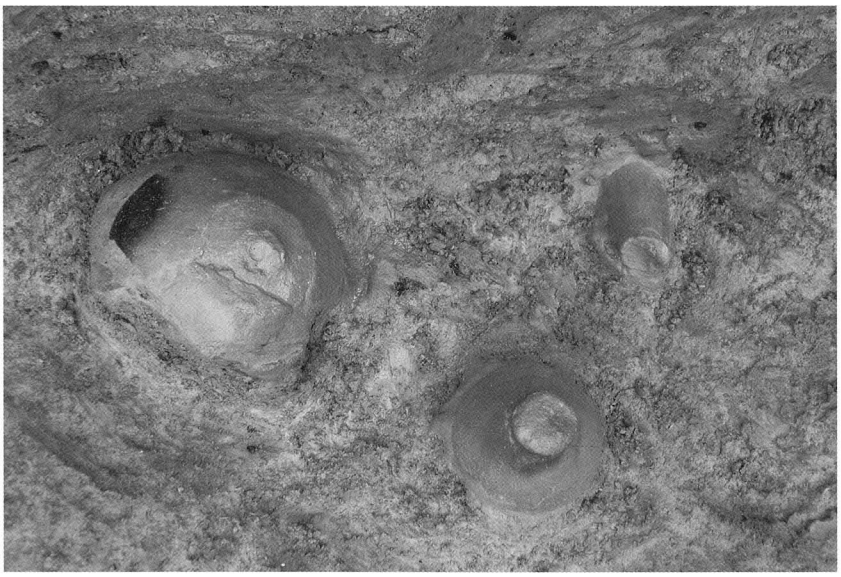


8　ＳＫ３土坑全景（東から）

図版15　溝跡とＳＫ１・３土坑

1　ＳＫ２土坑断面
（北から）

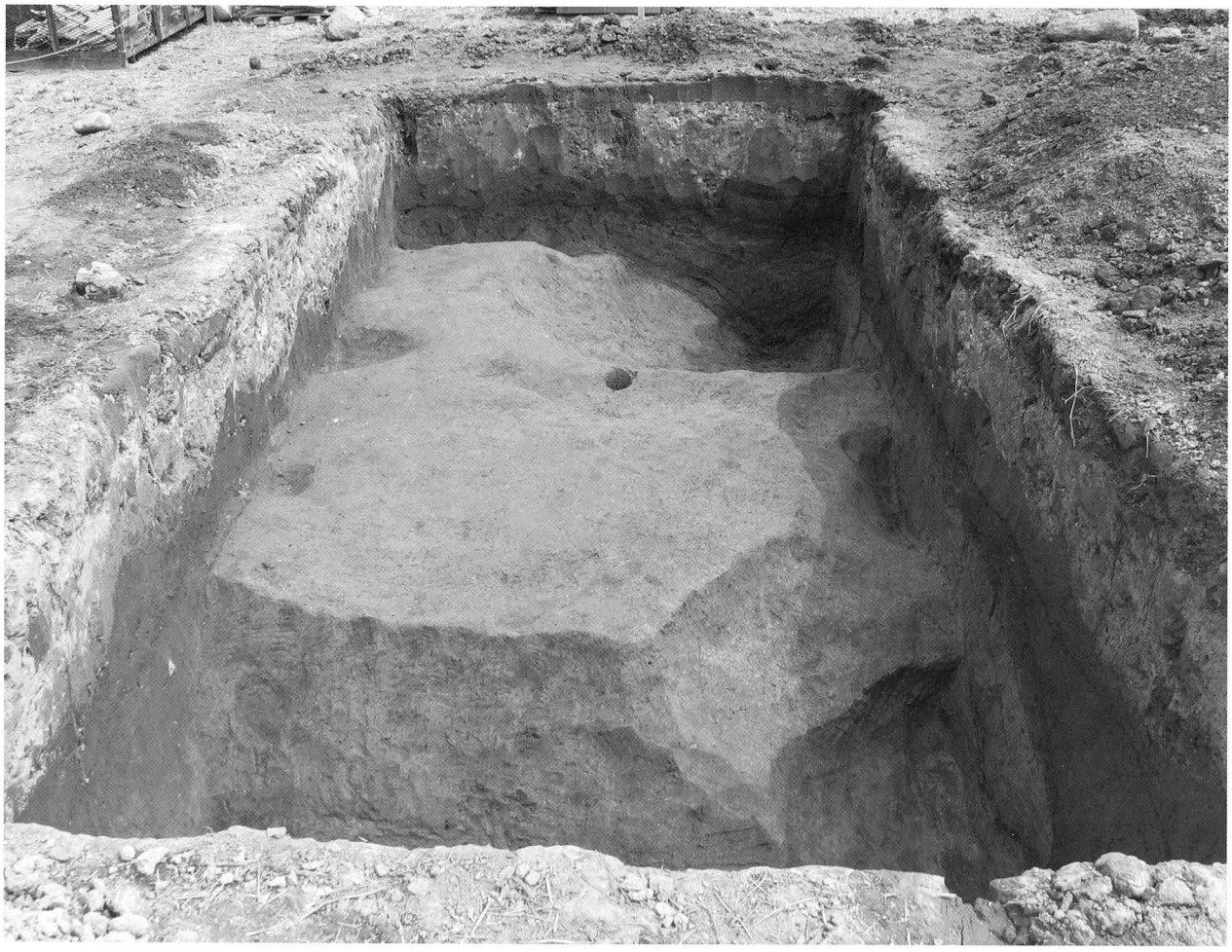
2　ＳＫ２土坑全景
（北から）



3　ＳＫ２土坑遺物出土状況
（北から）

図版16　ＳＫ２土坑と遺物出土状況

1　ＳＫ４土坑
（北西から）



2　調査区完掘全景（西から）

図版17　ＳＫ４土坑と調査区全景

1	土師器	高杯	C－1	SK2	(第22図1)
2	土師器	高杯	C－2	SK2	(第22図2)
3	土師器	高杯	C－7	SK4	(第22図7)
4	土師器	高杯	C－8	SK4	(第22図8)
5	土師器	甕	C－12	SK4	(第22図11)
6	土師器	甕	C－13	SK4	(第22図12)
7	土師器	台付甕	C－4	SK2	(第22図5)
8	石製模造品	円盤	K－1	SK4	(第22図15)

図版18　南小泉遺跡第48次調査出土遺物

Ⅳ　南小泉遺跡第49次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　仙台市若林区遠見塚１丁目37－５
調 査 期 間　平成18年４月12日～４月13日
調査対象面積　62㎡
調 査 面 積　21㎡
調 査 原 因　個人住宅建築
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主査　工藤哲司　　主任　長島榮一　　文化財教諭　早川潤一・藤田雄介

2　調査に至る経過と調査方法

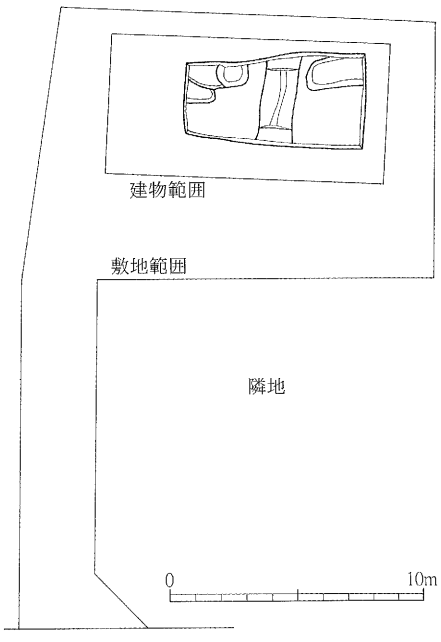
本調査は、平成18年３月22日付けで、佐々木勝彦氏より、柱状土壌改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年４月12日に実施した。建築予定地に３ｍ×７ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区内から溝跡や土坑が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

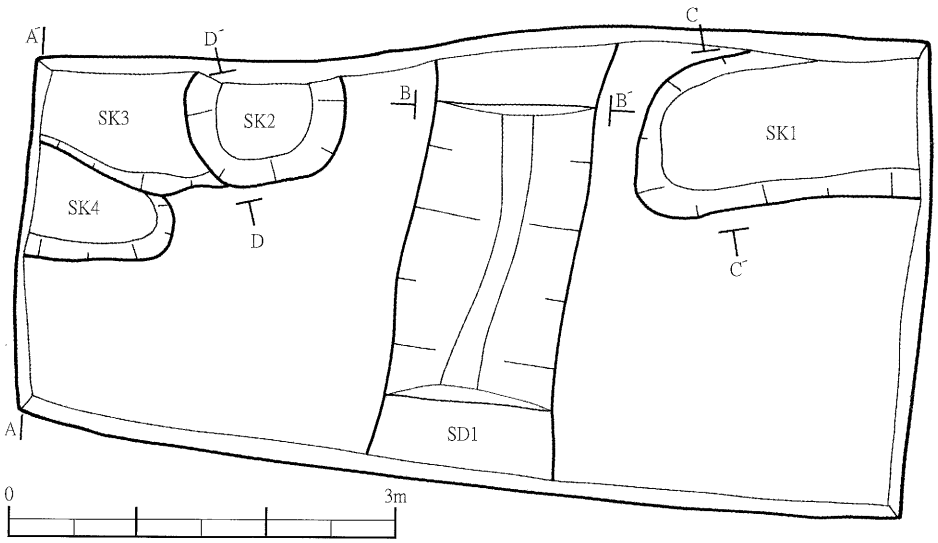
南小泉遺跡の位置と環境は、本書のⅢ南小泉遺跡第48次調査報告書を参照されたい。調査地点は第48次調査区の北側に当る。

4　基本層序

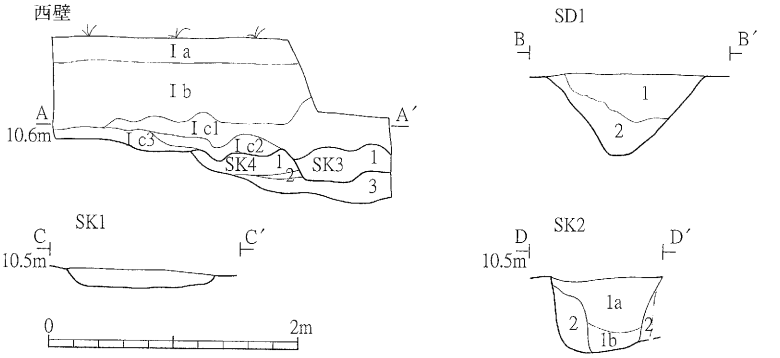
Ⅰａ層　10YR４/３にぶい黄褐色のシルト質粘土層。層厚約20cm。現在の畑耕作土。
Ⅰｂ層　2.5Y７/６明黄橙色の山砂層。層厚約50cm。畑のための盛土層。
Ⅰc1層　10YR４/４褐色のシルト質粘土層。層厚10～40cm。盛土前の耕作土層。
Ⅰc2層　10YR４/１褐灰色のシルト質粘土層。層厚10cm。黒色土を多く含む。
Ⅰc3層　10YR６/４にぶい黄橙色のシルト質粘土層。層厚約10cm。黒色土を少量含む。
Ⅱ　層　10YR６/６明黄褐色の粘土層。遺構検出面。上面で古代・古墳時代の遺構が検出された。



第23図　調査区配置図



第24図　遺構配置図



5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、溝跡１条・土坑４基が検出された。

１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区の中央で、南北方向にのびて検出された。重複はない。上面幅は130cm前後、底面幅は20cm前後である。検出面からの深さは65cmで、断面形はＶ字に近い逆台形を呈する。堆積土は２層に分けられ、上部は暗褐色のシルト質粘土で部分的に黄褐色土及びにぶい黄褐色土を斑状に含んでいる。下部は暗褐色のシルト質粘土で黄褐色土のブロックを多量に含んでいる。南方にのびて第48次調査のＳＤ１溝跡につながると推定される。

２）土坑

ＳＫ１土坑　調査区北東部で検出された。東部は調査区の外にのびている。検出部は略楕円形を呈し検出部の東西長軸約220cm、

基本層

層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	表土。現耕作土
Ⅰb	2.5Y7/6　明黄橙色	山砂	
Ⅰc1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	旧耕作土
Ⅰc2	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	黒色土を多く含む。
Ⅰc3	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土	黒色土を少量含む。
Ⅱ	10YR6/6　明黄褐色	粘土	

ＳＤ１

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	部分的に黄褐色土を斑状に含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを多量に含む。

ＳＫ１

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む。

ＳＫ２

層No	土　色	土　性	備　考
1a	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒・土師器片を多量に含む。
1b	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	炭化物・土器片・にぶい黄橙色土のブロックを含む。
2	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質シルト	土器片をわずかに含む。

ＳＫ３

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR 7/1　灰白色	粘土	土師器片を含む。

ＳＫ４

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	灰白粘土を斑状に少量含む。
2	10YR3/1　黒褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土との混合層。炭化物を多量に含む。
3	10YR6/3　にぶい黄代々色	粘土	マンガン粒・炭化物を少量含む。

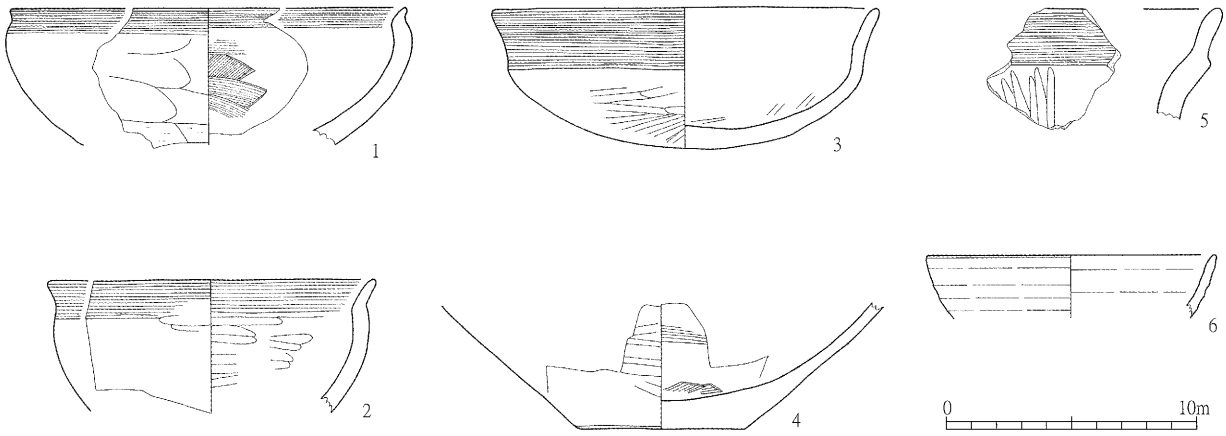
第25図　調査区・遺構断面図

南北短軸118cmを測る。深さは14cmで、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は、褐色土粒を霜降状に含む暗褐色のシルト質粘土１層である。短い口縁部がＳ字状に屈曲する丸底の土師器の坏片（第26図１）と須恵器の坏片（第26図６）が出土している。

ＳＫ２土坑　調査区北西部で検出された。北側は調査区の外にのびている。平面形は円形を呈すると推定され、検出部で東西軸120cm・南北軸80cm以上を測る。深さは58cmで、断面形はU字形を呈す。堆積土は、上部が土師器片を多量に含む暗褐色土の粘土質シルトで、下部はにぶい黄褐色のシルトないしにぶい黄橙色の砂質シルトである。出土土師器には坏２点（第26図２・３）と甕の底部片（４）が出土している。

ＳＫ３土坑　調査区北西角で検出された。北側及び西側は調査区の外にのびている。ＳＫ４土坑を切り、ＳＫ２土坑に切られている。ＳＫ２土坑に切られているために平面形は不明である。検出部で東西150cm・南北92cm以上を測る。深さは58cmで、断面形はU字形を呈す。堆積土は、灰白色の粘土質シルトで、土師器片を含んでいる。出土土師器には壺の口縁部の破片（第26図５）がある。

ＳＫ４土坑　調査区西壁際で検出された。西部は調査区の外にのびている。北部をＳＫ３土坑に切られている。検出部は略楕円形を呈し検出部の東西長軸約110cm、南北短軸89cmを測る。深さは34cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は、上部がにぶい黄褐色の粘土、下部がにぶい黄橙色の粘土層で、その中間に黒褐色の粘土を挟んでいる。



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
1	C-1		SK1	Ⅰ層		非ロクロ土師器	坏	(5.4)	(15.9)			外面:口縁ヨコナデ、体部ナデのちヘラケズリ　内面:口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ	19-2
2	C-2		SK2	Ⅰ層		非ロクロ土師器	坏	(5.4)	(13.2)			外面:口縁ヨコナデ、ヘラミガキ、体部ナデ？　内面:口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ	19-3
3	C-3		SK2	Ⅰ層		非ロクロ土師器	坏	5.7	15.5			外面:口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ　内面:口縁ヨコナデ磨滅、体部ヘラミガキ	19-1
4	C-4		SK2	Ⅰ層		非ロクロ土師器	甕	(5.0)			6.9	外面:体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ　内面:ヘラナデ	19-4
5	C-5		SK3	Ⅰ層	No.1	非ロクロ土師器	壺	(4.8)				外面:ヨコナデ、ヘラミガキ　内面:ヨコナデ	19-5
6	E-1		SK1	Ⅰ層		須恵器	坏	(2.5)	(11.6)			内、外面:ロクロ調整	19-6

第26図　出土遺物

6　まとめ

①　Ⅱ層上面で溝跡１条と土坑４基が検出された。

②　Ⅱ層検出のＳＤ１溝跡は、第48次調査区で検出されたＳＤ１溝跡つながること推定され、第47次調査検出の平安時代の掘立柱建物跡群の西側を区画する施設の可能性が考えられる。

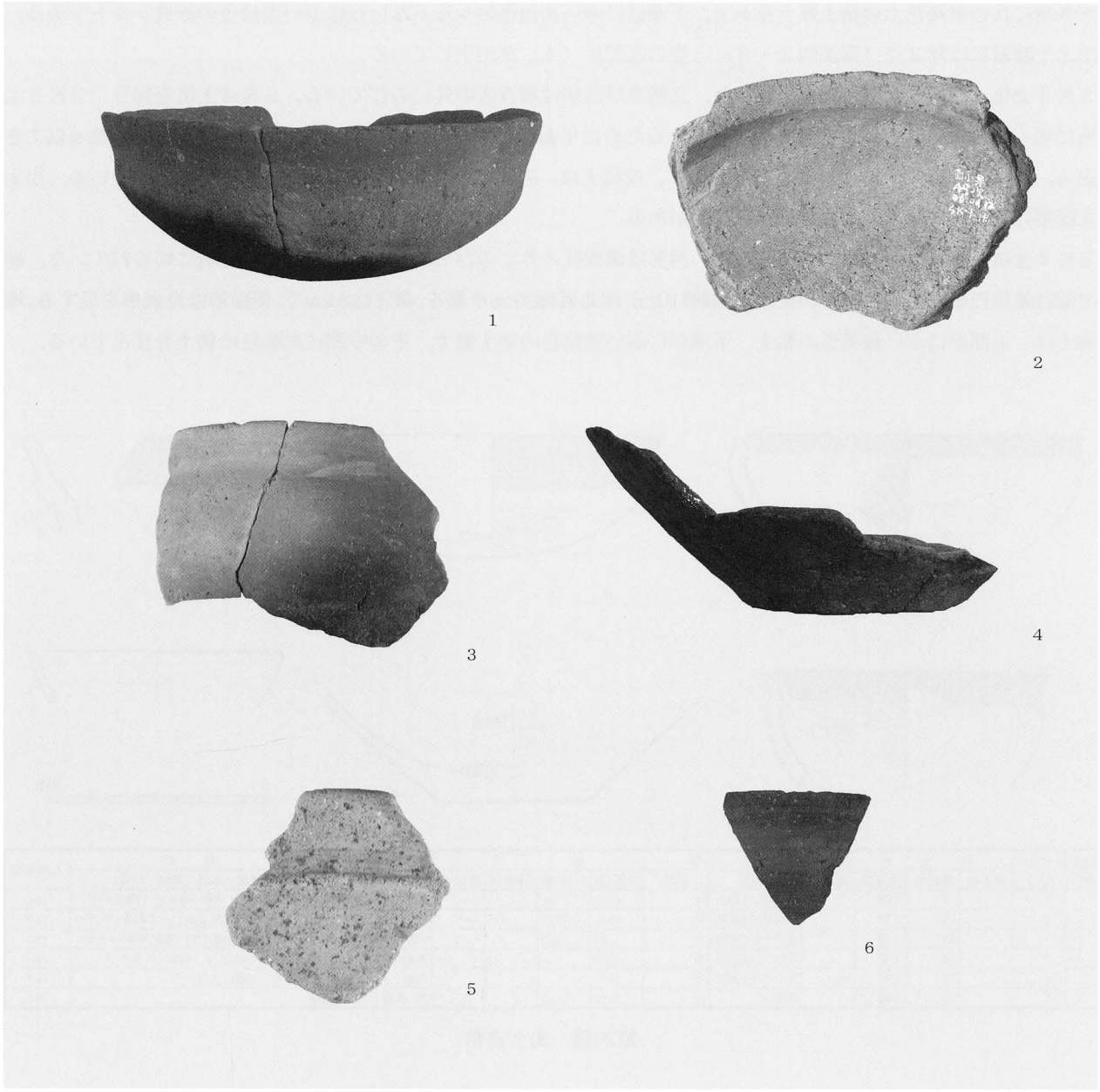
③　ＳＫ１土坑は、規模と方向から、第47次調査区検出のＳＫ１土坑につながる可能性が考えられる。この場合、土坑の延長は約7.9mとなる。

④　図化したＳＫ１・２土坑から出土した土師器については、古墳時代中期のものと考えられるが、詳細な時期

は不明である。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（2006）：「X　Ⅳ南小泉遺跡第47次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第301集



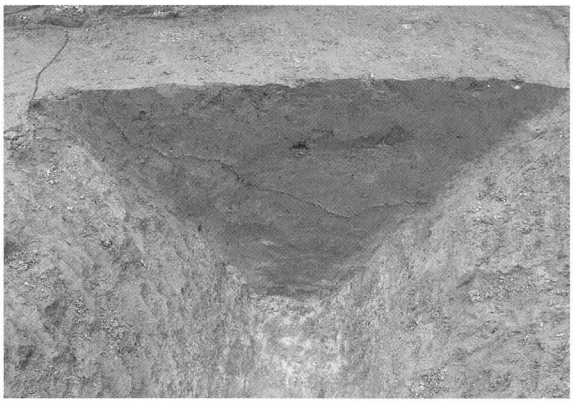
1　土師器　杯　C－3　SK2　1層　（第26図3）
2　土師器　杯　C－1　SK1　1層　（第26図1）
3　土師器　杯　C－2　SK2　1層　（第26図2）
4　土師器　甕　C－4　SK2　1層　（第26図4）
5　土師器　壷　C－5　SK3　1層　（第26図5）
6　須恵器　坏　E－1　SK1　1層　（第26図6）

図版19　南小泉遺跡第49次調査出土遺物

1　遺構検出状況（東から）

2　遺構検出状況（西から）

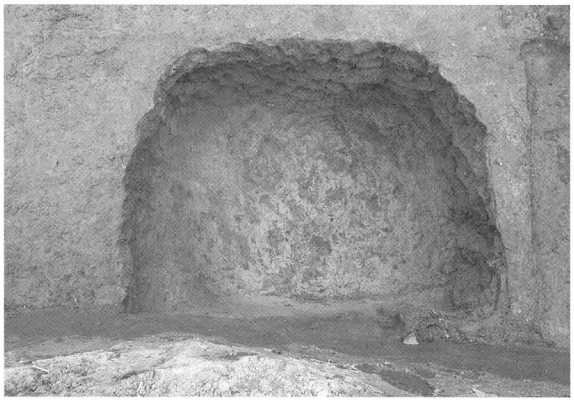
3　ＳＤ１溝跡（北西から）



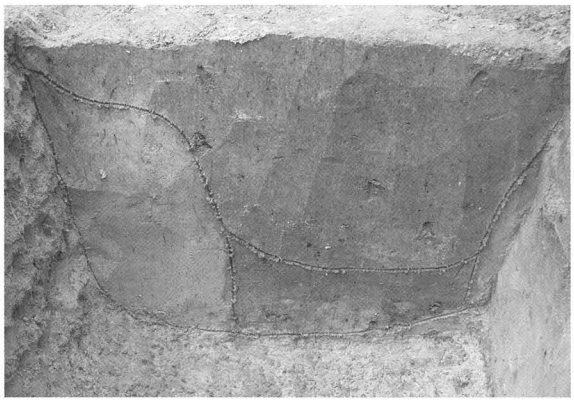
4　ＳＤ１溝跡土層断面（南から）

5　ＳＫ１土坑（東から）

6　ＳＫ１土坑土層断面（西から）



7　ＳＫ２土坑（北から）



8　ＳＫ２土坑土層断面（東から）

図版20　遺構検出状況・溝跡・土坑

1　ＳＫ３・４土坑
（南から）

2　ＳＫ３・４土坑土層断面
（東から）

3　調査区完掘全景（西から）

図版21　土坑・完掘写真

Ⅴ　南小泉遺跡第50次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　仙台市若林区一本杉町26－１
調 査 期 間　平成18年６月19日～６月22日
調査対象面積　166㎡
調 査 面 積　64㎡
調 査 原 因　診療所建築
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主査　工藤哲司　　文化財教諭　早川潤一　藤田雄介

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成18年５月18日付けで、地権者渡邉龍彦氏、渡邉好子氏より、深さ3.5mの柱状土壌改良を伴う２階建ての診療所の建築工事に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年６月１日に実施した。建物建築予定地の北側部分に南北2.5m×東西12m、南側部分に南北2.5m×東西18mの調査区を設定して調査を行なったところ、調査区内から遺構が検出され、本調査が必要と判断されたため遺構の掘り込みは行わず、記録後に調査区内にシートをかけて埋め戻し、確認調査を終了した。

この確認調査の結果を受けて、建物建築予定地に南北6.5m×東西10mの調査区を設定して本調査を実施した。重機により表土およびⅠ層を除去し、Ⅱ層および一部Ⅲ層で個別の遺構調査を行った。その後、北壁際部分および東壁際部分を約１mの幅で、また、調査区中央部分を南北約２m×東西約４mで深掘りし、Ⅱ層の堆積状況とⅡ層の下層（Ⅲ層上面）の遺構の有無を確認した。

なお、本件に関わる敷地については、平成13年にマンション建設に伴う確認調査と本調査（第37次調査）が行われている。

3　遺跡の位置と環境

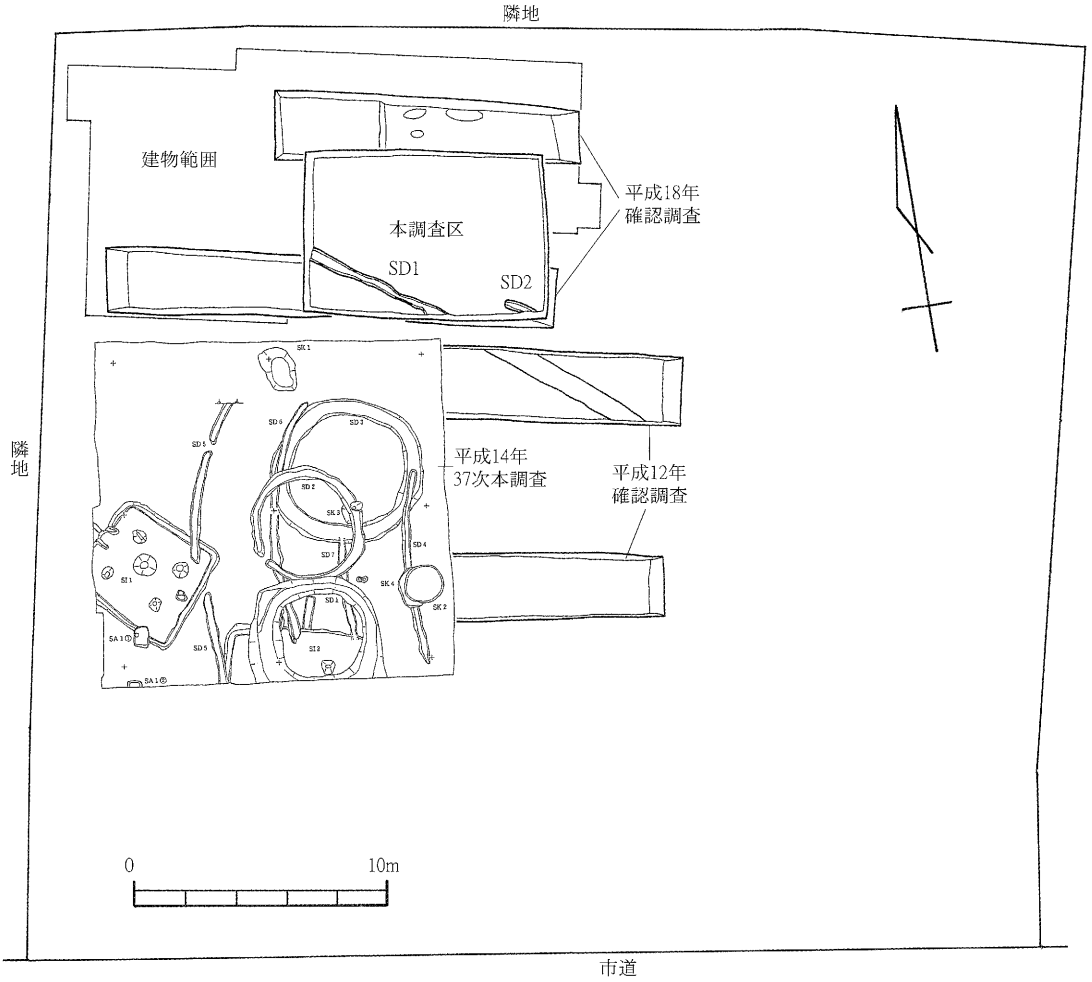
遺跡の環境については第48次発掘調査報告書を参照にされたい。

今回の調査区は遺跡の北西側に位置し、第37次調査の北側に隣接している。第37次調査では奈良時代のものと考えられる住居跡、近世初頭以前の溝跡、時期不明の円形周溝遺構、土坑等が検出されている。

4　基本層序

調査地点は40cm前後の盛土がある。その下のⅠ層は近年の畑の耕作土である。Ⅰ層は、上下２層に分けられる。上部は層厚約30cmの灰黄褐色粘土質シルト層（Ⅰａ層）である。下部は層厚５～15cmの暗褐色粘土質シルト層（Ⅰｂ層）である。調査区の北東部分の一部では、Ⅰ層が見られず盛土が約１mある。

Ⅱ層は調査区の東側約２／３のⅢ層が低くなった部分に分布している。Ⅱ層は、４層に分けられ、Ⅱａ層は層厚５～20cmの褐色粘土質シルト層、Ⅱｂ層は層厚５～15cmのにぶい黄褐色砂層、Ⅱｃ層は層厚５～20cmの灰褐色粘土層、



第27図　調査区配置図

Ⅱｄ層は層厚10～20cmの暗褐色粘土層である。調査区西側はⅠ層直下がⅢ層となる。Ⅱ層中には土師器の小片が多数含まれており、遺物の出土状況などから２次的な遺物包含層と判断される。Ⅱ層出土土師器は後述のとおり器形の特徴から塩釜式に相当すると考えられることから、この層については古墳時代前期頃に堆積したものと考えられる。

Ⅲ層は黄褐色粘土層で、いわゆる地山を形成しており、第37次調査ではこの層の上面で奈良時代以降の遺構が検出されている。

5　発見遺構と出土遺物

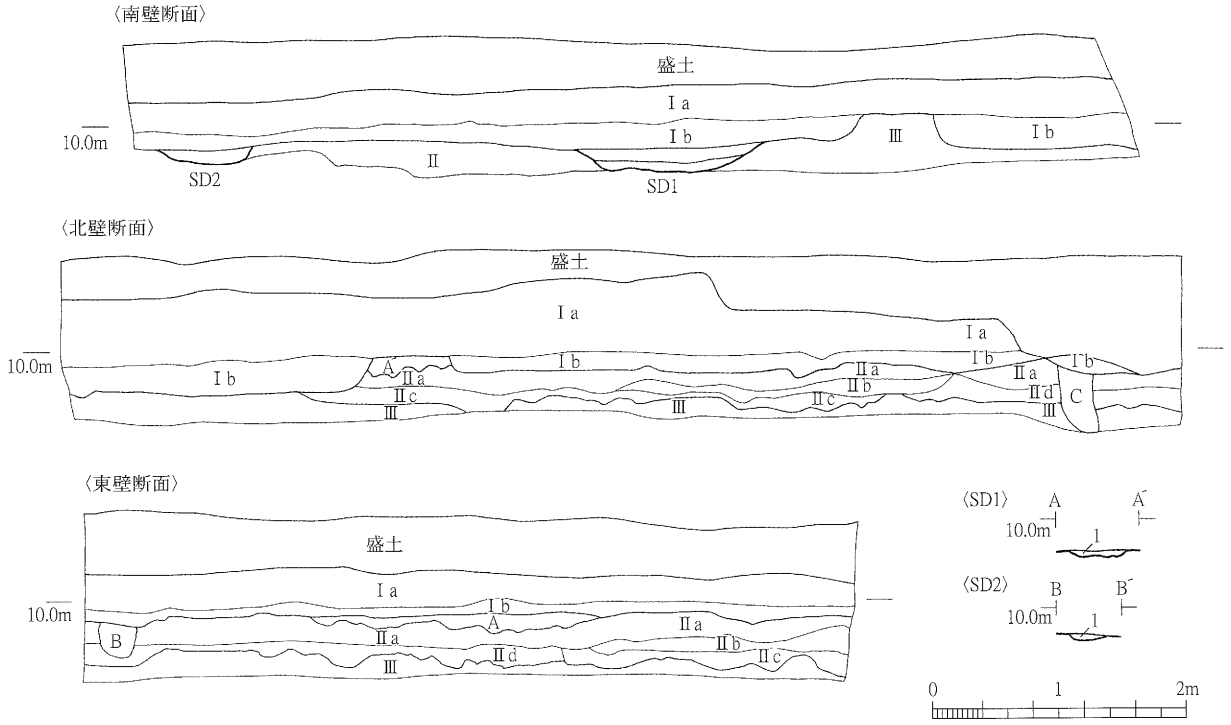
Ⅱ層上面からⅢ層上面を掘り込んで、溝跡２条が検出された。

１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区の南壁中央付近から西壁中央付近へ調査区を斜めに横切って検出された。南東方向側・北西方向側ともに調査区外に延びている。上端幅30～60cm、下端幅20～50cm、検出面からの深さは３～８cmを測る。断面形は浅い逆台形である。堆積土は、にぶい褐色の粘土質シルトで、褐色粘土質シルトを粒状に少量含み、層底面に酸化鉄が集積している。出土遺物が無いため時期は不明である。平成13年３月の確認調査で検出された溝跡の延長

にあたると考えられる。

ＳＤ２溝跡　調査区南壁の東端付近から北西方向に検出された。遺構の南部は、調査区外に延びているため正確な形状・規模は不明である。上端幅約30cm、下端幅10～25cm、検出面からの深さ約５cmを測る。断面形は浅い逆台形である。堆積土は、にぶい黄褐色の粘土質シルトで、褐色シルトを斑状に多量に含む。出土遺物が無いため時期は不明である。



調査区南壁

層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	褐色シルト質粘土を層下部に斑状に多量に含む。最近の畑耕作土。
Ⅰb	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土を粒状に少量に含む。近年の畑耕作土。
Ⅱ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	暗褐色シルト質粘土の植物の根の跡と思われるものを管状に含む。土師器片出土。
Ⅲ	7.5YR4/4　褐色	粘土質シルト	黒褐色シルトの植物の根の跡と思われるものを管状に含む。酸化鉄を少量含む。

調査区北壁

層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	根菜遺体あり。炭化物を粒状に少量含む。東側一部に撹乱あり。最近の畑耕作土。
Ⅰb	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にまばらに含む。畑耕作土。
Ⅱa	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトを斑状に多量に含む。酸化鉄をまばらに含む。炭化物を粒状に含む。
Ⅱb	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂	褐色粘土質シルトのブロックをまばらに含む。土器片を含む。
Ⅱc	7.5YR4/2　灰褐色	粘土	層全体に酸化鉄を多量に含む。褐色粘土質シルトをブロック状に少量含む。グライ化が見られる。土器片を含む。
Ⅱd	10YR4/4　褐色	粘土	酸化鉄をまばらに少量含む。土器片を含む。
Ⅲ	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	10YR5/3にぶい黄褐色粘土を斑状に少量含む。
A′	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	層下部に褐色粘土質シルトをを含む。
C	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトをまばらに少量に含む。層下部に酸化鉄を含む。土器片を含む。

調査区東壁

層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	根菜遺体あり。炭化物を粒状に少量含む。プラスチック片を含む。最近の畑耕作土。
Ⅰb	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にまばらに含む。畑耕作土。
Ⅱa	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトを管状に含む。酸化鉄を一部含む。土器片を含む。
Ⅱb	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂	褐色粘土質シルトのブロックをまばらに含む。土器片を含む。
Ⅱc	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む。黒色粘土質シルトを粒状に少量含む。（炭化物か？）グライ化が見られる。
Ⅱd	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土を層上面に含む。にぶい黄褐色粘土を層底面に含む。炭化物を粒状にまばらに含む。酸化鉄を少量含む。土器片を含む。
Ⅲ	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	10YR5/3にぶい黄褐色粘土を一部に斑状に含む。
A	10YR3/4　暗褐色	粘土	褐色粘土を斑状に多量に含む。
B	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土を斑状に多量に含む。酸化鉄を少量含む。

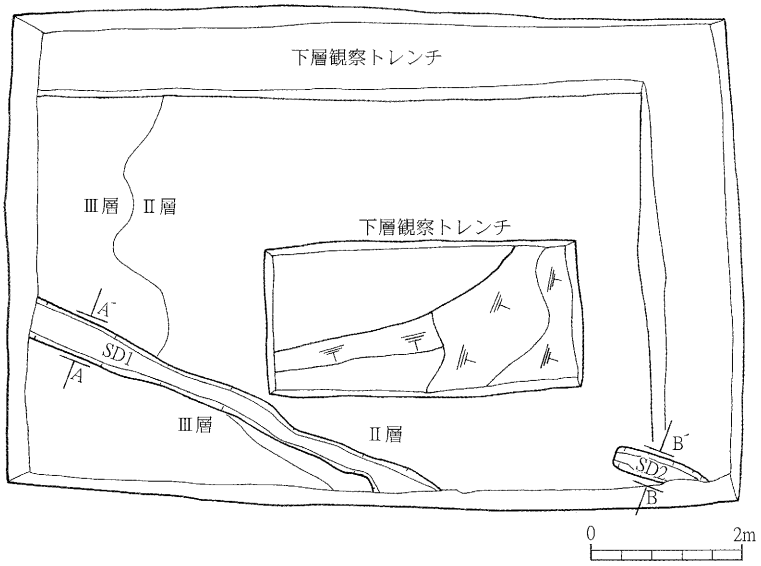
ＳＤ１

層No	土　色	土　性	備　考
1	7.5YR5/3　にぶい褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトを粒状に少量含む。

ＳＤ２

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色シルトを斑状に多量に含む。

第28図　調査区・遺構断面図

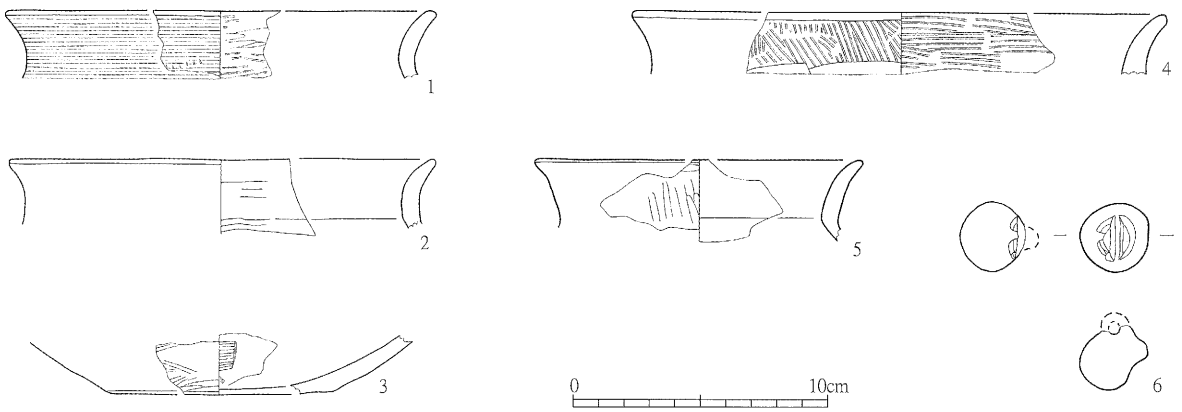


第29図　遺構配置図

2）出土遺物

Ⅱ層中から土師器小片等がコンテナ（32）１／４程度出土した。なお、Ⅱ層からはⅡｂ層を主体に、層全体から散在的に遺物が出土した。この遺物の出土状況からⅡ層は２次的な遺物包含層と判断される。Ⅱ層出土の遺物の中から、非ロクロ土師器甕片４点（第30図1,2,4,5）と非ロクロ土師器壺片１点（第30図３）、土製品１点（第30図６）を実測した。

Ⅱ層出土土師器は、比較的薄手で口縁部が短く外傾ないし外反し、内面の体部と口縁部との境に稜の形成されるものも認められる。調整はヘラミガキを基調とし、ハケメ・ヘラナデ・ヨコナデ調整も見られる。ハケメ調整は、目が細かく鋭利な工具によってなされている。底部は台が未発達で平坦な底面から体部がゆるやかに立ち上がっている。これらの器形や調整の特徴から塩釜式に相当すると考えられる。したがって、この層については古墳時代前



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	写真図版
1	C-1	Ⅱ層				非ロクロ土師器	甕	(2.6)	(16.7)			口縁外面：ハケメ後ヨコナデ　内面：ハケメ後ヘラミガキ	23-1
2	C-2	Ⅱ層				非ロクロ土師器	甕	(3.7)	(17.0)			口縁外面：摩滅　内面：ヘラミガキ	23-2
3	C-3	Ⅱ層				非ロクロ土師器	壷？	(2.4)			(8.9)	底部ヘラケズリ　外面：体部ヘラミガキ　内面：ヘラナデ	23-3
4	C-4	Ⅱ層				非ロクロ土師器	甕	(2.2)	(21.2)			口縁外面：ハケメ後ヨコナデ　内面：ハケメ	23-4
5	C-5	Ⅱ層				非ロクロ土師器	甕	(3.2)	(12.9)			口縁外面：ヘラミガキ　内面：摩滅	23-5
6	P-1	Ⅱ層				土製品	土錘	横径：2.7		縦径：2.6		球形、外面：摩滅	23-6

第30図　出土遺物

期頃に堆積したものと考えられる。

土製品は、分銅状の土錘と考えられるものである。球形の本体に半環状の紐がつくと推定されるが、紐の部分は欠損している。

6　まとめ

① 今回の調査では、溝跡２条（ＳＤ１・ＳＤ２）が検出された。

② ＳＤ１溝跡は、時期を決定する資料等は出土していないが、検出状況から古墳時代前期以降と考えられる。詳細は不明である。

③ ＳＤ２溝跡は、時期を決定する資料等が出土していないが、検出状況から古墳時代前期以降と考えられる。詳細は不明である。

④ 調査区の東側部分に分布するⅡ層中からは、２次的に堆積したと考えられる古墳時代前期頃の土師器片が出土している。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（2003）：「南小泉遺跡第37次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第266集

仙台市教育委員会（2005）：「南小泉遺跡第42次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第287集

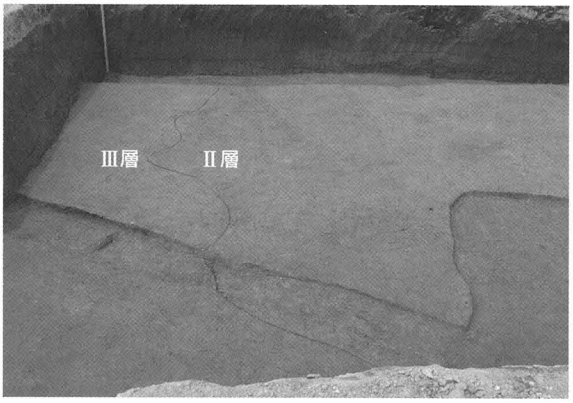
仙台市教育委員会（2006）：「南小泉遺跡第44次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第301集

1　遺構検出状況（西から）

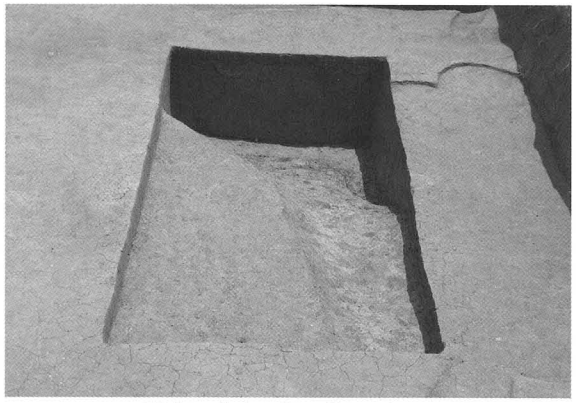
2　ＳＤ１溝跡土層断面（東から）

3　ＳＤ２溝跡土層断面（南東から）

4　ＳＤ1，ＳＤ２溝跡完掘状況（北西から）

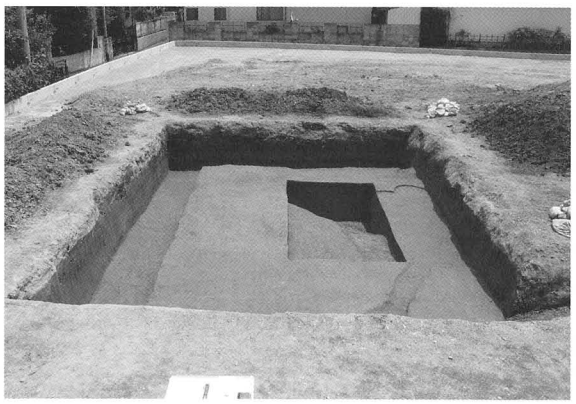


5　調査区西側部分Ⅱ層堆積状況（南から）



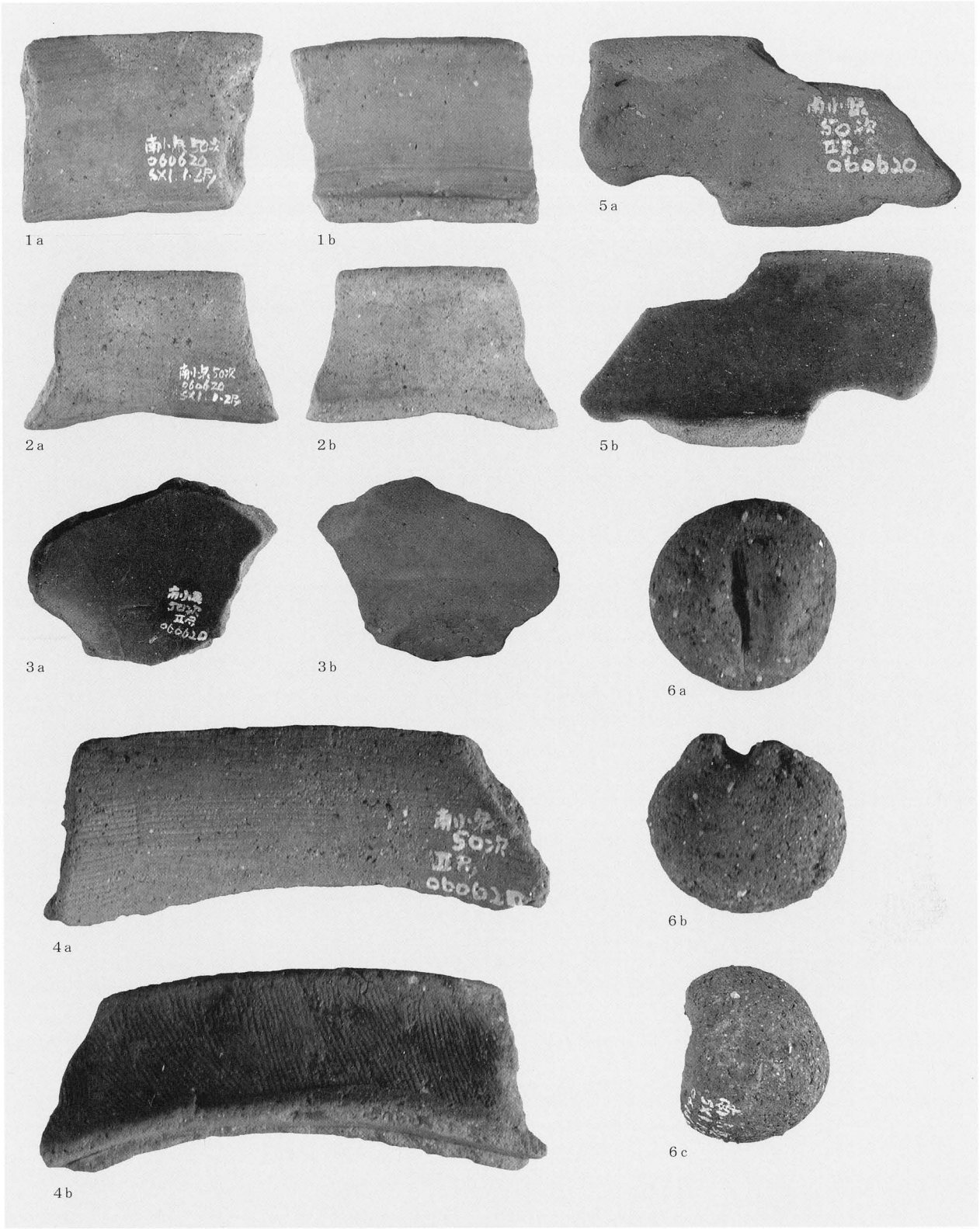
6　調査区中央深掘り状況（西から）

7　調査区中央深掘り東壁断面（西から）



8　調査区完掘全景（西から）

図版22　遺構調査・完掘状況



1　土師器　甕　C－1　Ⅱ層　(第30図1)
2　土師器　甕　C－2　Ⅱ層　(第30図2)
3　土師器　壷？　C－3　Ⅱ層　(第30図3)
4　土師器　甕　C－4　Ⅱ層　(第30図4)
5　土師器　甕　C－5　Ⅱ層　(第30図5)
6　土製品　土錘　P－1　Ⅱ層　(第30図6)

図版23　南小泉遺跡第50次調査出土遺物

Ⅵ　南小泉遺跡第51次発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区一本杉町21－4
調 査 期 間	平成18年９月19日～９月20日
調査対象面積	80㎡
調 査 面 積	30㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主任　長島榮一　　文化財教諭　今野秀治

2．調査に至る経過と調査方法

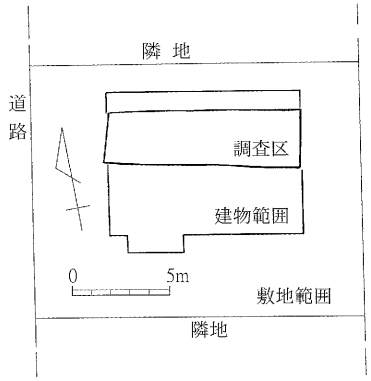
今回の調査は、平成18年８月15日付けで、地権者佐藤孝光氏より、湿式柱状改良の基礎工法による住宅建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。平成18年９月19日に建物部分を対象に３ｍ×10ｍのトレンチを設定して確認調査を行なったところ、柱列と小溝状遺構群、土坑などが検出されたので、引き続き本調査を実施した。

3．遺跡の位置と環境

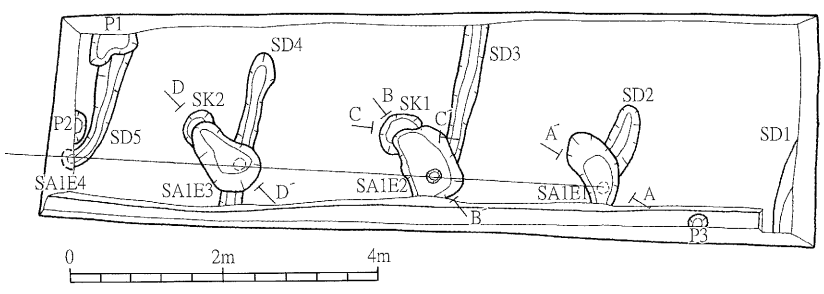
遺跡の位置と環境は、Ⅲ南小泉遺跡第48次発掘調査報告の記載のとおりである。今回の調査地点は、南小泉遺跡の北西部にあたり、標高は約12ｍである。

4．基本層序

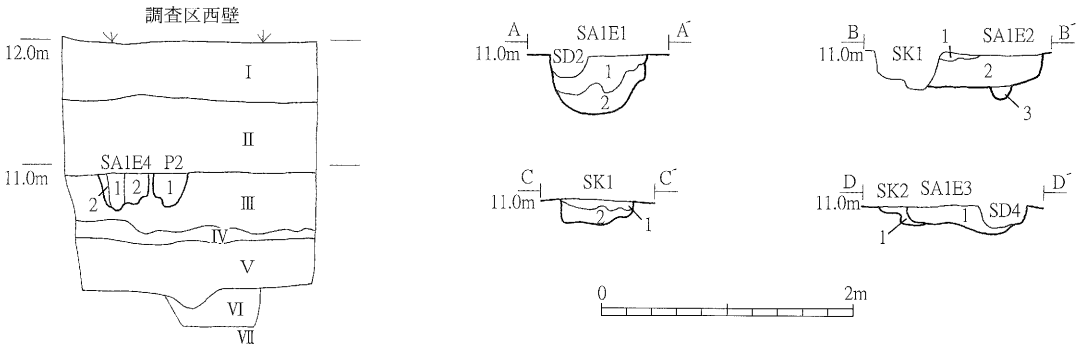
調査区で確認した基本層は、Ⅰ層からⅦ層まで大別７層である。Ⅰ層は厚さ約50cmの盛土である。Ⅱ層は厚さ約60cmの明黄褐色の粘土質シルト層で、旧畑耕作土である。Ⅲ層は厚さ約20～30cmの灰黄褐色の粘土層で、本調査における遺構検出面である。Ⅳ層は厚さ約10cmの灰黄褐色の粘土層である。Ⅴ層は厚さ約40cmの黒褐色の粘土層で、周辺調査においては縄文土器が出土している。Ⅵ層は厚さ約30cmのにぶい黄褐色の粘土層である。Ⅶ層は礫層である。



第31図　調査区配置図



第32図　調査区平面図



基本層序

層位	土色	土質	備考
I層	盛土		
II層	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	粘性やや有り。しまり無し。旧知耕作土。下部は天地返し。
III層	10YR6/6 明黄褐色	シルト質粘土	粘性有り。しまり有り。
IV層	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	粘性有り。しまり有り。
V層	10YR3/1 黒褐色	粘土	粘性非常に有り。しまり非常に有り。
VI層	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	粘性有り。しまり有り。
VII層	礫層		

SA1E1

層位	土色	土質	備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘性やや有り。しまり有り。
2	10YR7/4 にぶい黄橙色	シルト質粘土	粘性有り。しまりやや有り。

SA1E2

層位	土色	土質	備考
1	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト質粘土	粘性有り。しまりやや有り。マンガン粒を少量含む。
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	粘性有り。しまり有り。黄褐色粘土を少量含む。
3	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘土	粘性有り。しまり有り。褐灰色粘土をブロック状に含む。

SA1E3

層位	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	粘性有り。しまり有り。酸化鉄を多量に含む。

SA1E4

層位	土色	土質	備考
1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	粘性有り。しまりやや有り。最下部に白色粘土・酸化鉄集積。柱痕跡。
2	10YR7/4 にぶい黄橙色	シルト質粘土	粘性有り。しまり有り。柱穴掘り方。

SK1

層位	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	粘性有り。しまり有り。酸化鉄を多量に含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	粘性やや有り。しまり有り。黄褐色粘土をブロック状に含む。

SK2

層位	土色	土質	備考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	粘性有り。しまり有り。黄褐色粘土をブロック状に含む。

P2

層位	土色	土質	備考
1	10YR5/1 褐灰色	粘土	粘性有り。しまりやや有り。黄橙色シルト質粘土をブロック状に含む。

第33図　調査区・遺構断面図

5. 発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で、柱列１列、溝跡（小溝状遺構群）５条、土坑２基、ピット３基が検出された。

１）柱列

ＳＡ１柱列　【位置･重複】調査区南部で４個の柱穴が検出された。柱列は調査区の西側にのびる可能性もある。なお４個の柱穴は東側からそれぞれＥ１、Ｅ２、Ｅ３、Ｅ４とした。Ｅ１はSD２溝跡に、Ｅ２はSD３溝跡とSK１土坑にそれぞれ切られており、Ｅ３はSD４溝跡に切られSK２土坑を切っている。Ｅ４に関しては調査区西壁の断面において確認したのみである。【規模・配置・方向】規模は東西３間、約700cm、柱間寸法は220cm・260cm・220cmである。方向はＮ－77°－Ｗである。【柱穴･柱痕跡】Ｅ１～Ｅ３に関しては、柱穴は掘り方が60cm×100cm程の不整形であり、深さは23～46cmである。柱は抜き取られている。Ｅ４に関しては、調査区西壁での確認であり掘り方の平面形は不明であるが、上端幅約40cm・下端幅約25cm・深さ約46cmである。約12cm幅の柱痕跡が確認された。【堆積土】堆積土は、黄橙色や黄褐色・黒褐色などの粘土を基調としている。柱痕跡の下部に白色粘土や酸化鉄を含む柱穴も見られる。【出土遺物】Ｅ１の堆積土中から土師器片が１点出土している。

２）小溝状遺構群（ＳＤ１～５）

調査区を南北方向に縦断するよう200～260cm間隔で検出された。検出面での幅は25～35cmであり、深さは５～15cmである。SD２溝跡はSA１柱穴列Ｅ１を、SD３溝跡はSA１柱穴列Ｅ２を、SD４溝跡はSA１柱穴列Ｅ３を、SD５溝跡はP１をそれぞれ切っている。出土遺物はない。

3）土坑

ＳＫ１土坑　調査区のほぼ中央で検出された。SA１柱穴列E２を切っており、１辺が約50cmの隅丸方形を呈する。深さは約20cmで、断面形はおおむね扁平なU字形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は２層に分けられ、１層は酸化鉄を多量に含んでいる。出土遺物はない。

ＳＫ２土坑　調査区の中央西寄りで検出された。SA１柱穴列E３に切られているため、正確な規模は不明であるが、直径約50cmの円形を呈するものと思われる。深さは約16cmで、断面形は不明である。堆積土は１層である。出土遺物はない。

4）ピット

Ｐ１～３まで検出した。平面形は円形を基調とするが、Ｐ１は不整形である。大きさは直径25～50cmで、検出面からの深さは10～20cmである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

6. まとめ

①　本調査区は、南小泉遺跡の北西部に位置する。

②　柱列１列と小溝状遺構群、土坑２基などの遺構が検出された。

③　柱列および小溝状遺構群に関して、時期を決定できる資料はないが、周辺部での調査において古墳時代から平安時代の建物跡や小溝状遺構群が検出されていることから、この年代の遺構と推定される。柱列に関しては建物跡の一部となる可能性も考えられ、今後、周辺での調査の際に検討されていく必要があると思われる。

④　２基の土坑は、建物の造り替えなど柱列に関わる遺構となる可能性も考えられる。

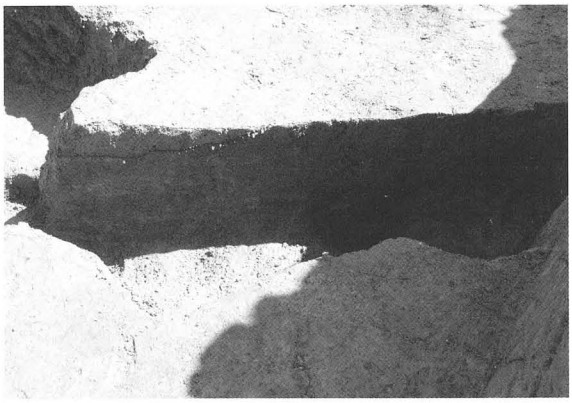
1　遺構検出状況（東から）

2　完掘全景（東から）

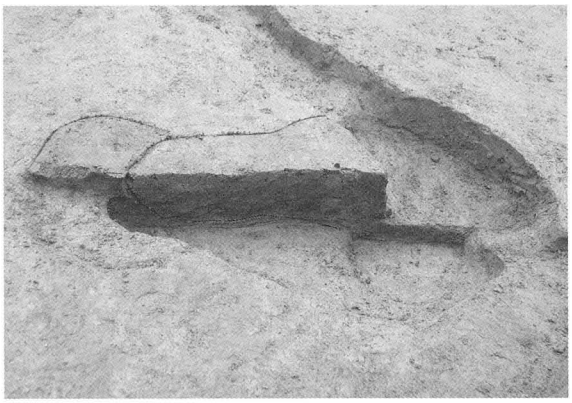
3　調査区西壁断面

図版24　調査区全景・西壁

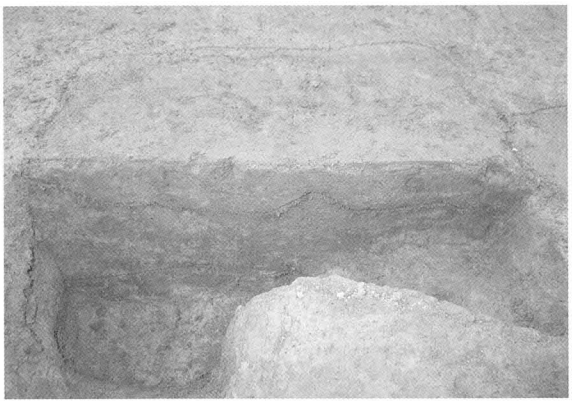
1　ＳＡ１Ｅ１断面（北から）



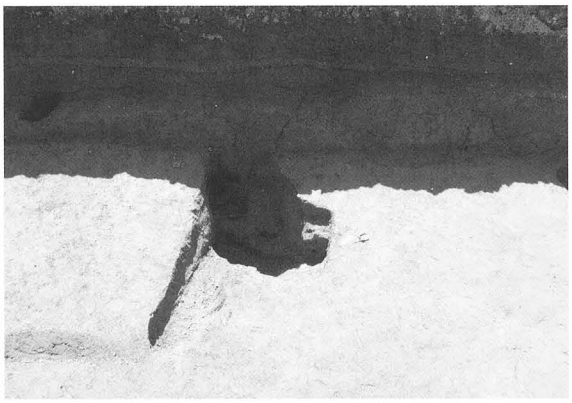
2　ＳＡ１Ｅ２断面（南から）



3　ＳＡ１Ｅ３・ＳＫ２断面（南から）

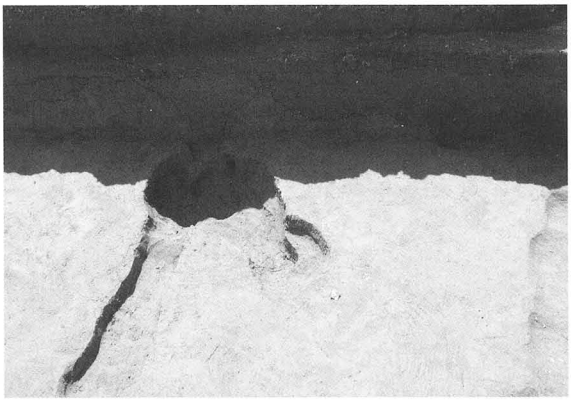


4　ＳＫ１断面（南から）

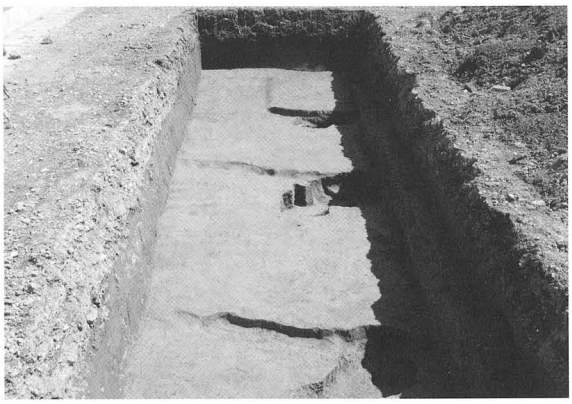


5　ＳＡ１Ｅ１・ＳＤ２（北から）

6　ＳＡ１Ｅ２・ＳＫ１・ＳＤ３（北から）



7　ＳＡ１Ｅ３・ＳＫ２・ＳＤ４（北から）



8　完掘全景（西から）

図版25　検出遺構・調査区全景

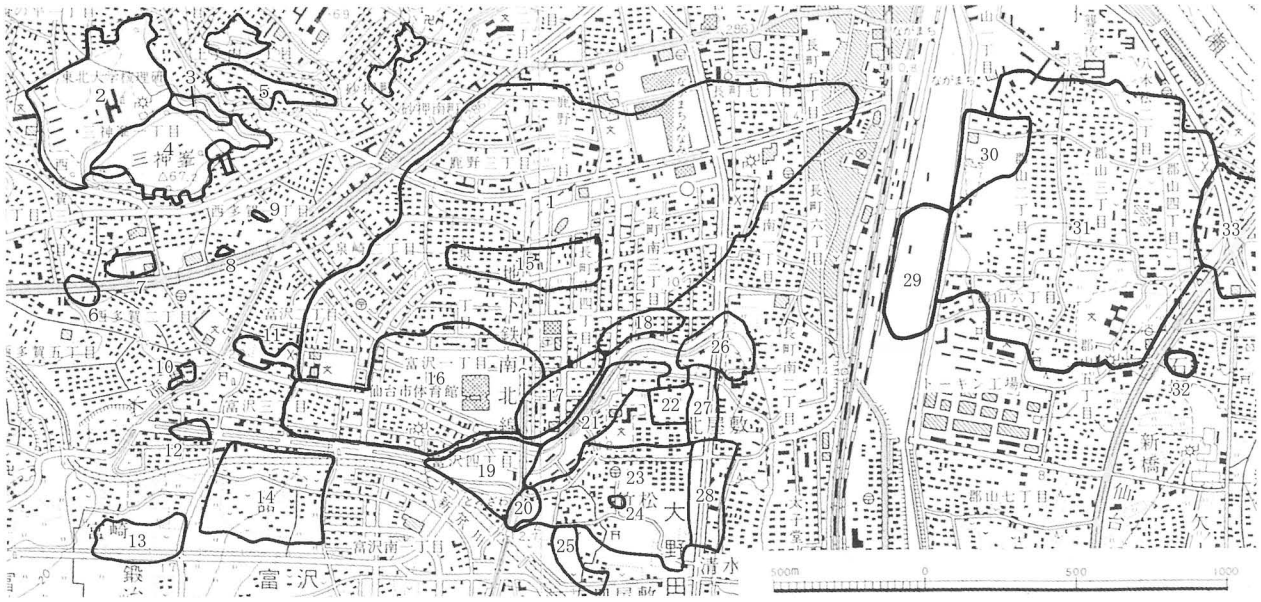
Ⅶ　富沢遺跡第137次発掘調査報告書

1. 調査要項

遺　跡　名　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
所　在　地　仙台市太白区泉崎一丁目３－４
調査原因　個人住宅建築
調査対象面積　99㎡
調　査　面　積　19.5㎡
調　査　期　間　平成18年５月８日
調　査　主　体　仙台市教育委員会
調　査　担　当　仙台市教育局生涯学習部文化財課
担　当　職　員　主査　工藤哲司　　文化財教諭　藤田　雄介　　早川　潤一

2. 調査に至る経緯と調査方法

平成18年３月28日付けで、笠松松壽氏より上記地内における個人住宅建築に伴う発掘届が提出された。これを受



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	旧石器､縄文､弥生､古墳､古代～近世	17	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
2	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文、弥生、古代	18	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
3	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳	19	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
4	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、古代	20	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、古代
5	土手内横穴墓群B地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳	21	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
	土手内窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳、古代	22	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代
6	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	古代	23	大野田古墳群	古墳群	自然堤防	古墳、古代、中世
7	原遺跡	散布地	丘陵麓	古代	24	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
8	原東遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古代	25	伊古田Ｂ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳、古代	26	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代、中世、近世
10	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、古代	27	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
11	富沢清水遺跡	散布地	丘陵麓	古代	28	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
12	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古代	29	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
13	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	古墳、古代	30	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳
14	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	31	郡山遺跡	官衙跡､寺院跡､包含地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
15	泉崎浦遺跡	集落跡､水田跡､墓跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世	32	北目城跡	城館跡､集落跡､水田跡	自然堤防	縄文､弥生､古墳､古代､中世､近世
16	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防､後背湿地	縄文、弥生、古墳、古代、中世	33	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

第34図　遺跡の位置と周辺の遺跡

けて平成18年５月８日に本調査を実施した。建物予定地内に東西約３m、南北約6.5mの調査区を設定し、重機により約80～90cm掘り下げ、調査区を東西約1.5m、南北約５mの範囲にして、調査区西壁ならびに東壁の土層の観察を主とする調査を行った。今回の調査区は、古代の条里制に関係する坪境の畦畔が通っていることが推定されたので、東西方向の坪境に相当する畦畔跡を確認することを主目的とした。

安全面に配慮して現地表下から約1.5m掘り下げた８層中で調査を終了した。

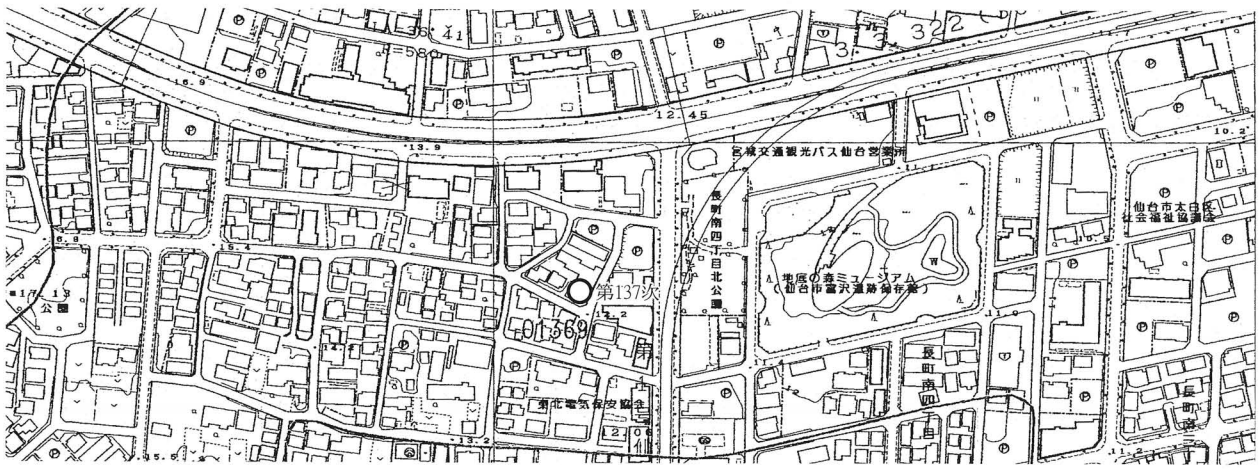
測量は、平面図は１/50平板測量、断面図は１/20実測とした。

3. 遺跡の位置と環境

富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地の西側にあり、北西部から西部にかけては丘陵に、他を自然堤防によって囲まれた後背湿地を中心に立地している。遺跡の範囲は東西２km・南北１kmにおよび、登録面積は約90haである。一帯はかつて水田が大きく広がっていたが、現在は区役所などの行政施設、大型商業施設のほか、大部分が住宅地になっている。盛土以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに下がっている。現在の標高は９～16mである。

これまで100次を超す発掘調査が行われており、弥生時代から近世・現代までの水田跡が重層して検出されている。また、弥生時代の水田跡のさらに下層から縄文時代や旧石器時代の遺構や遺物が発見されている地点もある。

今回の調査地点は、富沢遺跡のほぼ中心部にあたり、古代の条里制に関係する土地割の坪境畦畔の推定地点である。昭和60年に調査を実施した第19次調査区の西側約20m、平成14年に調査を実施した第125次調査区の西北西約20mの地点にあり、標高は約12.8mである。



第35図　調査地点の位置

4. 基本層序

区画整理事業の際の盛土が80～90cmあり、その下に旧表土の水田耕作土（Ⅰ層）がある。調査区で確認した基本層は大別８層・細別９層である。

Ⅰ　層　オリーブ黒色粘土。層厚は５～16cm。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。

Ⅱ　層　オリーブ黒色シルト質粘土。層厚は10～15cm。砂を多く含む。酸化鉄をまばらに含む。特に層下部に多い。近世以降の水田耕作土の可能性がある。13～14世紀の青磁片１点が出土している。

Ⅲ　層　灰色粘土。層厚は16～25cmである。砂を含む。炭化物粒を含む。平安時代以降の水田耕作土層と考えられる。

Ⅳ　層　黒色粘土。層厚は３～16cmである。灰白色の火山灰のブロックおよびVa層のブロックを含む。層底面

第36図　条里型土地割の復元と調査地点

に凹凸がある。

Ⅴａ層　黒褐色粘土。層厚は２～22cm。水田耕作土である。

Ⅴｂ層　黒色粘土。層厚は２～22cm。Ⅵ層起源の黒色土およびⅦ層起源の暗灰黄色土のブロックをまばらに含む。水田耕作土下部と考えられる。

Ⅵ　層　黒色粘土。自然堆積層で層厚は２～12cmである。

Ⅶ　層　暗灰黄色粘土。層厚は20～26cm。黒色土の薄層および同色の砂層（層厚３cm程度）を縞状に含む。

Ⅷ　層　黒色粘土。層厚は７～20cm。植物遺体を含む。下部ほど暗灰黄色粘土を縞状に含む。

5. 発見遺構と出土遺物

断面観察の結果、現代の水田を含めて５層の水田層と畦畔跡を確認した。本調査区と第19次調査、第125次調査

の基本層の対応は別表のように推定される。

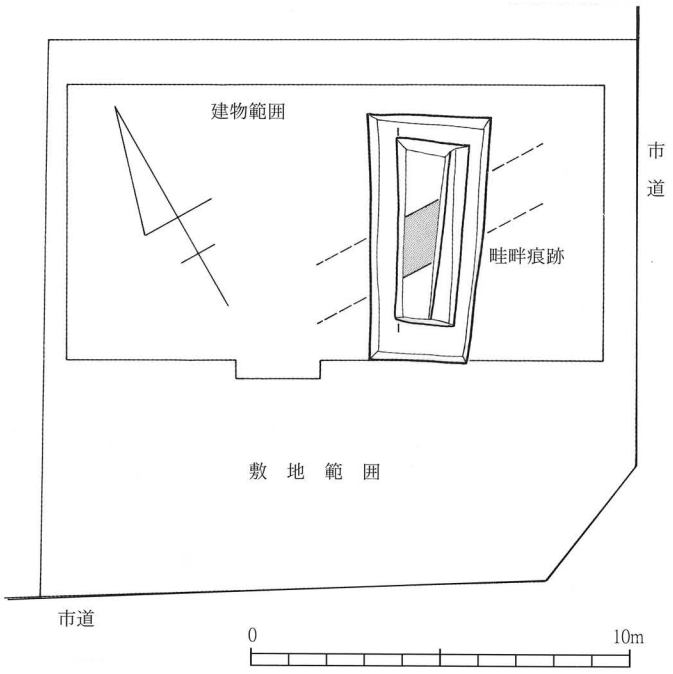
1）水田層

① Ⅰ層は層厚約５～16cmで、盛土以前の耕作土である。

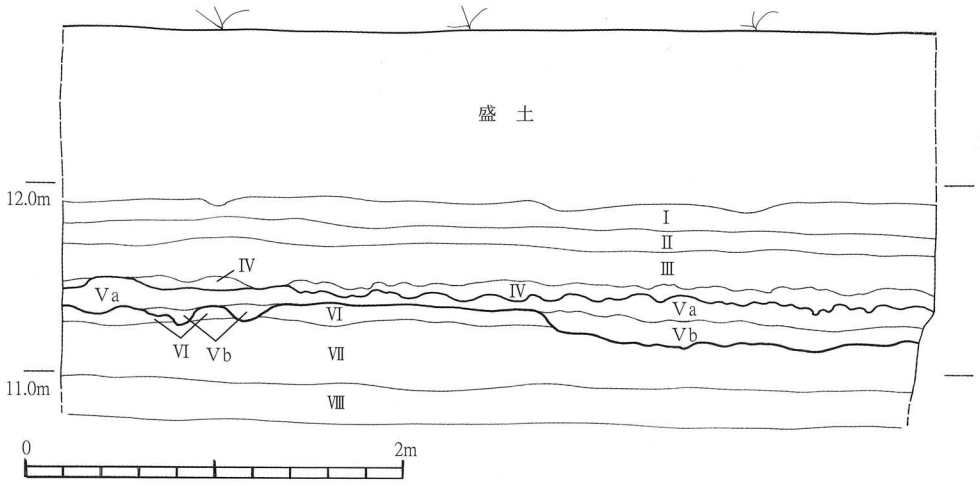
② Ⅱ層は層厚約10～15cmで、東壁北部から13～14世紀ごろのものと思われる青磁片１点が出土した。この時期以降であると考えられるが、これまでの調査成果との対応関係から、近世以降の水田の可能性がある。

③ Ⅲ層は層厚約16～25cmで、下面に起伏が見られ、平安時代以降の水田であると考えられる。

④ Ⅳ層は層厚約３～16cmで、「灰白色火山灰」を含んだ地層であり、層底面は凹凸が激しく、南側ではVa層を巻き上げている。Ⅳ層は富沢遺跡第125次調査の６層に対応するものと推定され、「灰白色火山灰」が降下した10世紀初頭以降の水田跡であると考えられる。



第37図　調査区配置図と畦畔痕跡



基本層序（西壁）

	土色	土質	備考
盛土			山砂
Ⅰ	7.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	水田耕作土。
Ⅱ	10Y3/1　オリーブ黒色	シルト質粘土	砂を多く含む。酸化鉄をまばらに含む。特に層下部に多い。水田耕作土（青磁片出土）。
Ⅲ	10Y4/1　灰色	粘土	砂を含む。炭化物粒を含む。水田耕作土。
Ⅳ	10YR1.7/1　黒色	粘土	灰白色の火山灰のブロックおよびVa層のブロックを含む。層底面に凹凸あり。水田耕作土。
Va	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	水田耕作土。
Vb	2.5Y2/1　黒色	粘土	Ⅵ層起源の黒色土およびⅦ層起源の暗灰黄色土のブロックをまだらに含む。水田耕作土下部。
Ⅵ	10YR1.7/1　黒色	粘土	自然堆積。
Ⅶ	2.5Y5/2　暗灰黄色	粘土	黒色土の薄層および同色の砂層（層厚3cm程度）を縞状に含む。
Ⅷ	2.5Y2/1　黒色	粘土	植物遺体を含む。下部ほど暗灰黄色粘土を縞状に含む。

第38図　調査区西壁断面図

第137次調査	第125次調査	第19次調査	推定時期	備考・特徴
Ⅰ層	1層	1ａ～1ｂ層	盛土以前	
Ⅱ層	2層	2ａ～2ｃ層	近世以降？	137次調査：13～14世紀ごろと思われる青磁片出土。
Ⅲ層	3層	3ａ層	中世～近世	
	4層	3ｂ層		
	5層	4～5ａ層	平安時代中葉～中世	125次調査：灰白色火山灰のブロックを含む。
Ⅳ層	6層	5ｂ層		125次調査：灰白色火山灰のブロックを含む。
Ｖａ層 Ｖｂ層			10世紀初頭以前	
Ⅵ層	7層	6層		
Ⅶ層	8層	7ａ層		
－	9ａ層	7ｂ層	弥生時代中期	19次調査：桝形囲式弥生土器出土。
－	9ｂ層	8ａ層		
		9ａ層		
－	10層	9ｄ～9ｅ層		

（※　　は、水田耕作土壌と考えられるもの）

表　富沢遺跡第137次調査と周辺の調査の土層対応表

⑤　Ｖ層は上部（Va層）と下部（Vb層）に区分できる。Va層は層厚２～22cm、平均８～10cmで、僅かな起伏がある。Vb層はⅥ層を切る形で検出された。層厚２～15cmで、Ⅵ層及びⅦ層を母材としており、Ⅵ層起源の黒色土ならびにⅦ層起源の暗灰黄色土のブロックをまばらに含んでいる。Ｖ層の水田耕作土の下部と考えられる。Ｖ層水田跡に伴う畦畔痕跡（擬似畦畔Ｂ）が断面で観察された。畦畔の北側は、Ⅵ層が残存せず、Ⅶ層の上面を一部切っており耕作が深い。それに対して南側は部分的にⅥ層を切る形で検出され、耕作深度が南側より浅い。Va・Vb層は富沢遺跡第125次調査の６層（平安時代中頃～中世）に対応する可能性が考えられるが、本層には「灰白色火山灰」が含まれないことから、富沢遺跡第125次調査の６層よりも古く、10世紀初頭以前の水田層と考えられる。

⑥　富沢遺跡第125次調査の９層に対応する水田跡は今回の調査では確認できなかった。

２）Ｖ層水田畦畔跡

西壁南寄りと東壁の中央部において、Ｖａ層直下でＶ層水田跡に伴う畦畔痕跡（擬似畦畔Ｂ）が断面で観察された。標高は11.2～11.3mで、畦畔の方向はほぼＮ－90°－Ｅで、東西方向に延びるものと考えられる。上端幅は約140cm、下端幅は約160cmを測り、断面形は扁平な台形状を呈する。作土底面との比高差は８～12cmである。畦畔の規模から推定すると、坪境の畦畔である可能性が高い。

6. まとめ

①　今回の調査は富沢遺跡の中央部、第19次調査の西約20m、第125次調査の西北西約20mの地点で実施した。

②　本調査地点は旧水田から約1.5mの深さまでの地層を大別８層、細別９層に分けることができた。

③　断面観察からは、現代の水田耕作土層であるⅠ層を除き、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ｖａ層・Ｖｂ層が水田耕作土層と考えられる。

④　水田の年代は、Ⅱ層は近世以降、Ⅲ層は平安時代以降～中世、Ⅳ層は平安時代中期以降、Ｖａ層・Ｖｂ層は10世紀初頭以前に属するものと考えられる。出土遺物がわずかであるため、詳細な年代は不明である。

⑤　調査前に推定されていた古代条里型地割に伴う坪境の畦畔跡がＶ層で検出された。幅は約160cmで、ほぼ東西方向に延びている。富沢遺跡第35次調査で復元された条里型土地割による坪境の畦畔（ＮＳ０）が、本地区まで伸びていることが明らかになった。

＜参考・引用文献＞

渡辺誠（1986）:「富沢遺跡第19次調査」『仙台平野の遺跡群Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第87集　仙台市教育委員会

斎野裕彦ほか（1987）:「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第98集　仙台市教育委員会

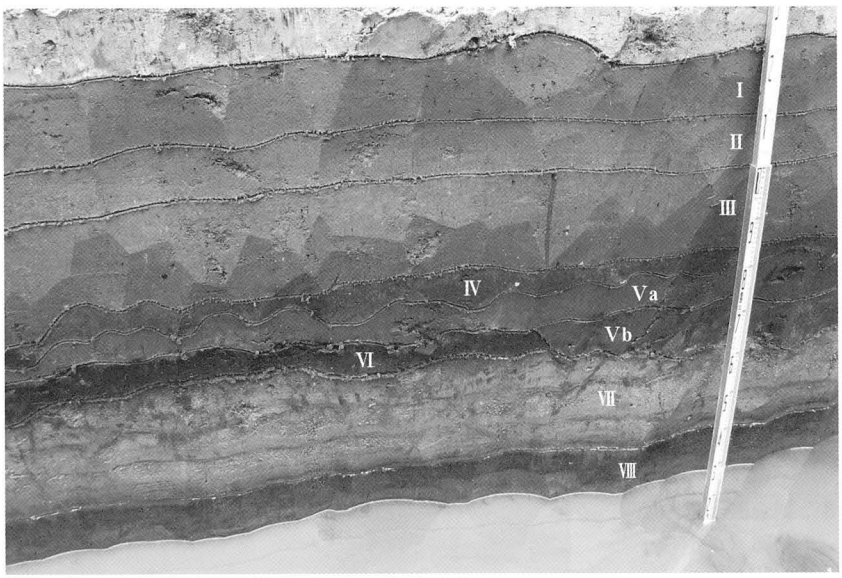
平間亮輔（1991）:「富沢遺跡－第35次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第150集　仙台市教育委員会

太田昭夫・斎野裕彦（1992）:「富沢遺跡－第30次発掘調査報告書第Ⅰ分冊－」仙台市文化財調査報告書第150集　仙台市教育委員会

豊村幸弘（2003）:「富沢遺跡第125次調査」『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第266集　仙台市教育委員会

1　調査区遺構検出状況（北から）

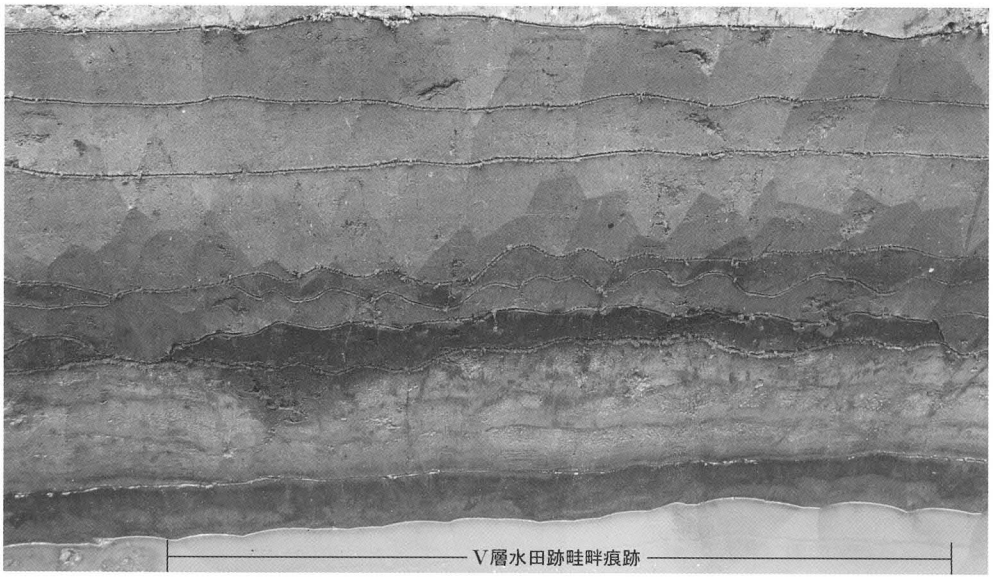
2　調査区西壁断面（北東から）



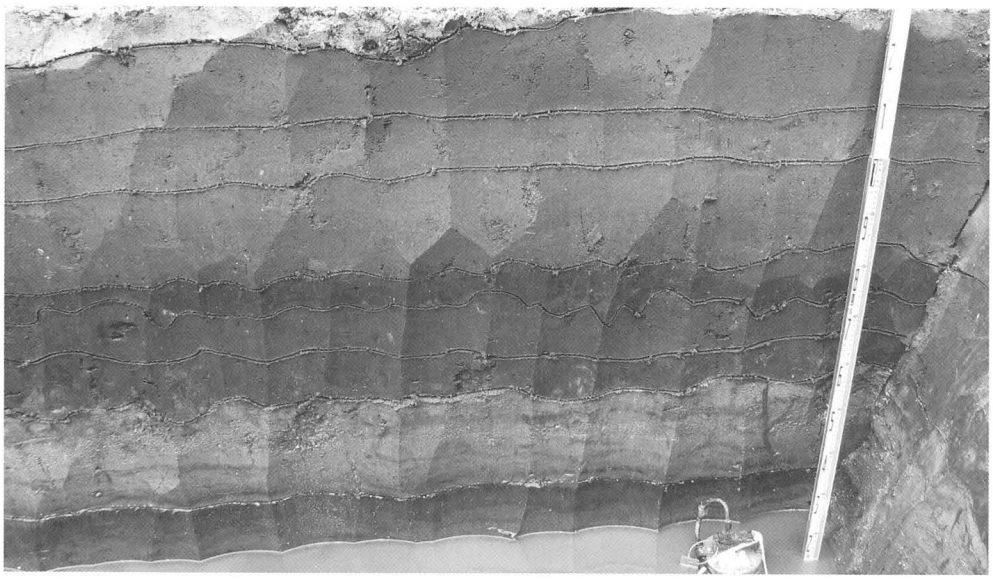
3　基本層序

図版26　遺構検出状況・土層断面

1　調査区西壁断面
南部（東から）



2　調査区西壁断面
中央（東から）



3　調査区西壁断面
北部（東から）

図版27　西壁断面

Ⅷ　富沢遺跡第139次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点	仙台市太白区長町５丁目85－８
調 査 期 間	平成18年11月13日～11月29日
調査対象面積	222㎡（敷地面積　291㎡）
調 査 面 積	34㎡（盛土除去面積66㎡）
調 査 原 因	店舗付き共同住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　早川潤一・藤田雄介

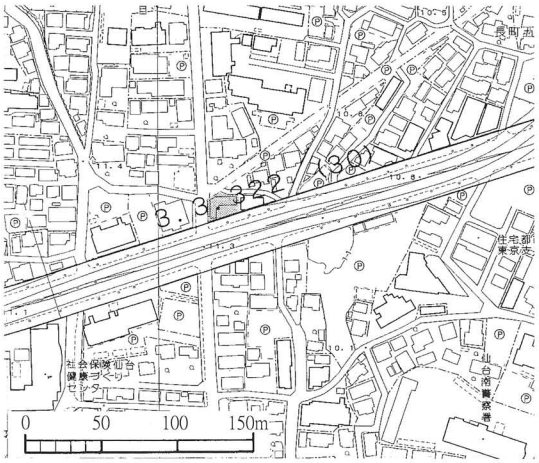
2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年９月12日付けで、申請者佐々勝利氏・佐々久子氏から当該地における杭打ちを伴う共同住宅建築に関しての埋蔵文化財の取扱いの協議書が提出されたことに起因する。協議の結果、当該地周辺部の調査で、弥生時代から古墳時代・古代・中世・近世の水田跡や、中世以降の建物跡等が検出されていることから、事業者の負担において本調査を実施することで協議が成立した。協議に基づき、平成18年９月19日には文化財保護法第93条第１項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。平成18年10月26日に申請者と仙台市の間で発掘調査委託契約を締結し、11月13日から実動12日間の予定で調査を開始した。

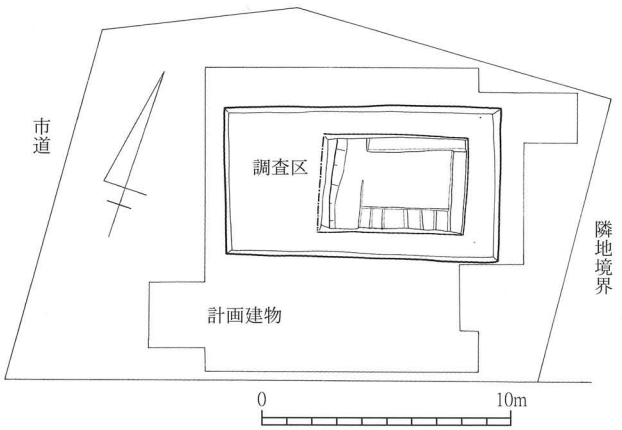
調査は、建築予定地に11m×６mの調査区を設定し、敷地が狭いために表土は場外に搬出した。盛土除去後、調査区を９m×４mに縮小して調査を行った。調査区の西部については土層観察とその記録の後、掘削土砂の置き場とした。調査区の東部は、周辺の調査成果から水田跡が存在すると考えられる層は平面的に調査し、それ以下の層は一部を掘下げて土層観察・記録を行った。

3　遺跡の位置と環境

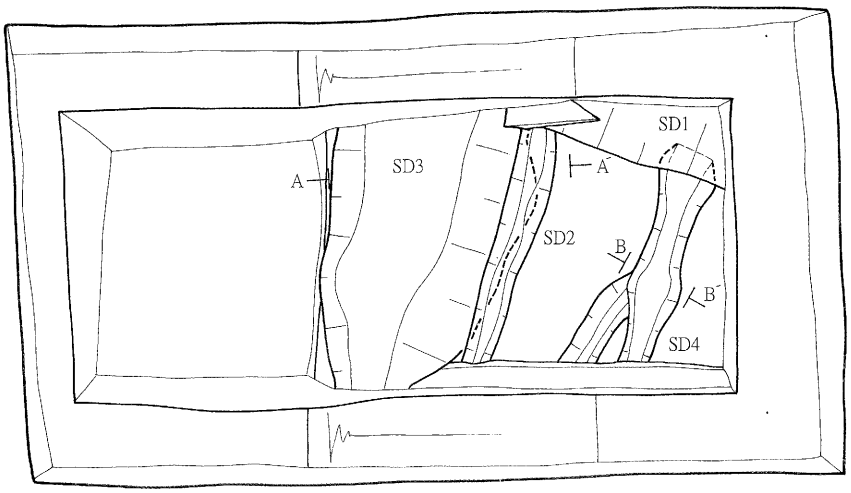
富沢遺跡の立地と環境は、Ⅶ富沢遺跡第137次発掘調査報告を参照されたい。今回の調査地点は、富沢遺跡の北東部にあたり、富沢遺跡の北側に形成された自然堤防の縁辺に近い後背湿地に位置する。



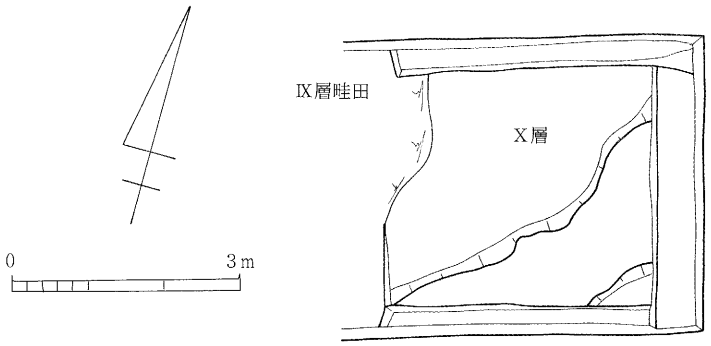
第39図　調査地点の位置



第40図　調査区配置図



Ⅲ層(SD1・2・3)・Ⅳ層 (SD4)



第41図　検出遺構実測図

4　基本層序

盛　土　残土による盛土層。調査区西部では層厚約30cm、東部では1.2mある。東部と西部の高低差がなくなるように盛土したとみられる。

Ⅰa層　5Y4/1灰色の砂質シルト層。層厚約20cm。盛土前の水田の耕作土。

Ⅰb層　10YR4/3にぶい黄褐色の砂質シルト層。層厚10～30cm。西から東に下がって傾斜する。盛土前の畑の耕作土。

Ⅰc層　5Y4/4褐色の砂質シルト層。層厚20～30cm。にぶい黄褐色土のブロックを多く含む。西から東に下がって傾斜する。畑の耕作土の下部層。

Ⅱa層　10YR4/6褐色のシルト質砂層。暗赤褐色砂・褐色砂縞状および斑状に含む。層厚30cm前後。

Ⅱb層　10YR5/3にぶい黄褐色のシルト質粘土層。粗砂をまばらに含む。層厚約20～25cm。溝状に堆積。

Ⅱc層　10YR5/3にぶい黄褐色のシルト質粘土層。明黄褐色の砂を縞状に含む。層厚約30cm。溝状に堆積。

Ⅱd層　10YR5/4にぶい黄褐色のシルト層。砂及び酸化鉄を縞状に含む。層厚約30cm。

Ⅱe層　10YR4/4褐色の粘土質シルト層。黒褐色砂を多く含む。酸化鉄を多く含む。層厚10～15cm。

Ⅱf層　10YR5/3にぶい黄褐色の粘土層。酸化鉄を粒状に含む。層厚15～20cm。

Ⅱa～Ⅱe層は急激な氾濫による堆積物と観察される。

Ⅲa層　10YR3/3暗褐色の粘土層。灰黄褐色粘土を霜降状に含む。層厚約10cm。調査区の南部に分布。

Ⅲｂ層　10YR４/２灰黄褐色の粘土層。暗褐色土を少量含む。層厚10～30cm。耕作土。上面で遺構を検出。

Ⅳ　層　10YR５/３にぶい黄褐色の粘土層。酸化鉄の薄層を縞状に含む。層厚20～40cm。自然堆積層と観察される。

Ⅴ　層　10YR４/１褐灰色の粘土層。灰黄色粘土と黒色粘土を縞状に含む。層厚約10cm。ほぼ均一に堆積。自然堆積層と観察される。

Ⅵ　層　10YR４/１褐灰色の粘土層。均一にこなれた土壌で酸化鉄を含む。層厚約５cm。水田耕作土と観察される。

Ⅶ　層　10YR５/１褐灰色の粘土層。均一にこなれた土壌で層底面に凹凸がある。層厚は５cm前後。水田耕作土と観察される。

Ⅷ　層　7.5YR５/１灰色の粘土層。褐灰色粘土と黒色粘土の薄い層を縞状に含む。層厚約５～10cm。自然堆積層と観察される。

Ⅸ　層　10YR４/１褐灰色の粘土層。均一にこなれた土壌で層の底面に凹凸がある。層厚約５～10cm。水田耕作土と観察される。

Ⅹａ層　10YR５/３にぶい黄褐色の粘土層。褐灰色粘土を縞状に含む。酸化鉄を多く含む。層厚約10cm。自然堆積層と観察される。調査区南部に分布。

Ⅹｂ層　10YR４/２灰黄褐色の粘土層。黒褐色土を縞状に含む。層厚15～25cm。自然堆積層と観察される。

Ⅺ～ⅩⅥ層　断面観察のみの調査で、平面的な調査は行っていないが、いずれも自然堆積層と観察された。各土層の特徴は第42図の観察表のとおりである。

５　発見遺構と出土遺物

１）Ⅱ層出土遺物

Ⅱ層堆積土中からは、18世紀代のものと考えられる肥前産の染付け碗の破片１点（第43図２）と、器種不明の土師質土器１点（第43図１）が出土している。土師質土器は、口縁部が内傾し、後円部の周囲に連続する三角形の透かしがあり、三角形の上下は交互に換わる。五徳のような用途が考えられる。この土師質土器に類似する器形の土器は、仙台城二の丸跡の幕末から明治初頭とされる地層から出土している（東北大学埋蔵文化財調査年報９:1988）。仙台城二の丸跡のものは、口縁部が内傾し、胴部に円形と逆三角形の透かしが交互にあけられている。

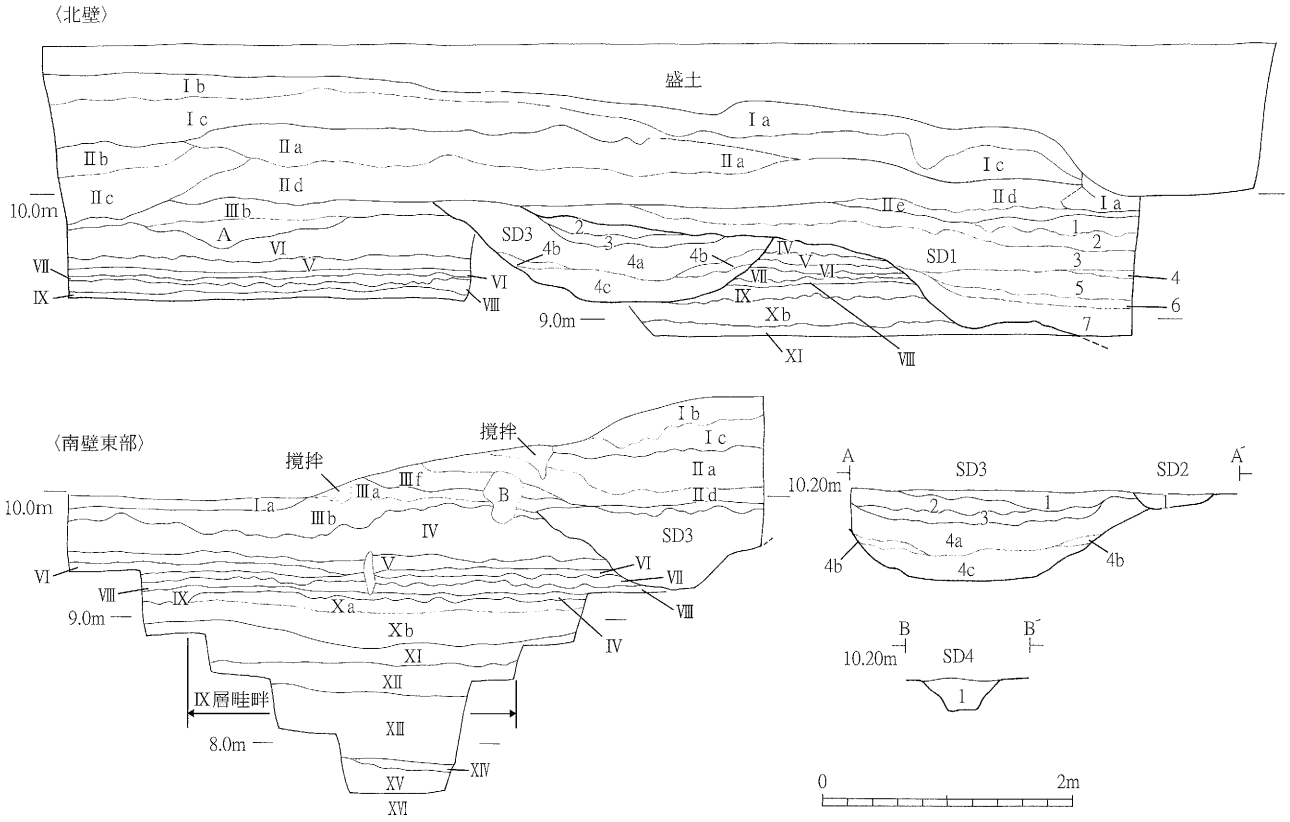
遺物の年代から、Ⅱ層は近世から近代にかけての時期に、洪水のような急激な堆積作用によって形成されたものと推定される。

２）Ⅲ層検出の遺構

ＳＤ１・２・３溝跡は、Ⅳ層面を検出した際に、遺構の輪郭が検出された。壁面の土層観察の結果、ＳＤ３溝跡がⅢ層上面まで立ち上がることが明らかになったので、Ⅲ層検出遺構とした。また、ＳＤ１・２溝跡は、ＳＤ３溝跡を切り、基本層Ⅱ層に覆われていることからⅢ層の遺構とした。

ＳＤ１溝跡　調査区の北東角付近で、東西方向にのびる溝の南側岸部が検出された。ＳＤ２・３・４溝跡を切っている。方向は南側壁面でＮ－88°－Ｗである。調査区内で底面は出ていない。検出部分の最大幅は100cm・深さは95cmである。断面形は逆台形ないしＶ字上を呈すると推定される。調査部分で堆積土は７層に分けられた。ＳＤ２・３溝跡と異なり、シマリが弱いことからⅡ層より古いがＳＤ２・３溝跡よりは新しい遺構と考えられる。いずれも自然堆積の状況を呈している。出土遺物はない。

ＳＤ２溝跡　調査区の中央で検出された。南北方向にのびる。ＳＤ１溝跡に切られ、ＳＤ３溝跡の東側岸を切っている。方向は南側壁面でＮ－２°－Ｗである。規模は、幅38～51cm・底面幅17～23cm・深さ12cmを測る。断面形は浅い舟底形を呈する。堆積土はⅢｂ層に類似する灰黄褐色シルト質粘土１層である。出土遺物はない。

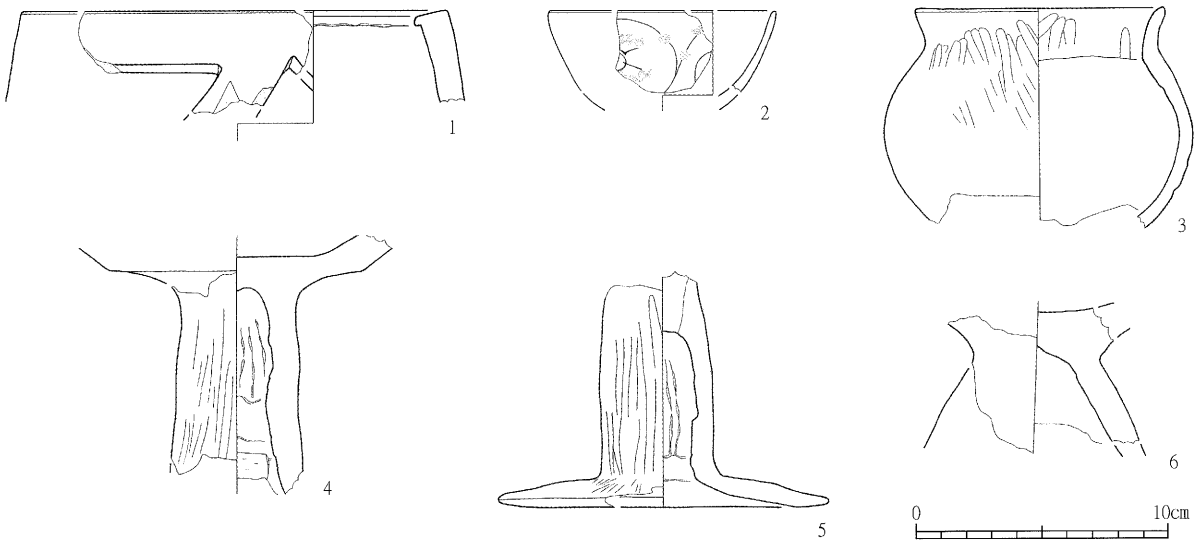


層No	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	5Y4/1　灰色	砂質シルト	炭化物粒を多くに含む。　水田耕作土
Ⅰb	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物粒を多くに含む。　畑耕作土
Ⅰc	10YR4/4　褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土のブロックを多く含む。　耕作土
Ⅱa	10YR4/6　褐色	シルト質砂	暗赤褐色・褐色砂を縞状に及び斑状に含む。　自然堆積
Ⅱb	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	粗砂をまばらに含む。酸化鉄を斑状に含む。　自然堆積
Ⅱc	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色の砂を縞状に含む。　自然堆積
Ⅱd	10YR5/4　にぶい黄橙色	シルト	砂及び酸化鉄を縞状に含む。　自然堆積
Ⅱe	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黒褐色砂・酸化鉄を多く含む。　自然堆積
Ⅱf	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を粒状に少量含む。　自然堆積
SD1-1	10YR3/2　褐色	粘土質シルト	黒褐色土を多く含む。にぶい黄褐色砂を含む。
2	10YR3/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色土を粒状にを含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	黒褐色土を粒状に少量含む。酸化鉄を多く含む。
4	10YR3/2　黒褐色	粘土	層下部に黒褐色粘土を縞状に含む。
5	10YR4/1　褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土を縞状に含む。酸化鉄を少量含む。
6	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	褐灰色粘土を層下部に斑状に含む。
7	10YR2/2　黒褐色	粘土	褐灰色粘土の薄層を縞状に含む。
SD2-1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックをまばらに含む。
SD3-1	10YR3/2　黒褐色	粘土	黄褐色土を部分的に霜降状に含む。
2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄・マンガン粒を含む。
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	層の上下ににぶい黄橙色土を霜降状に含む。
4a	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄を霜降状に含む。
4b	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	黄橙色土を縞状に含む。
4c	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄を管状に含む。上面から土師器出土。

層No	土　色	土　性	備　考
SD4-1	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	東部は上層の影響によりグライ化している。
Ⅲa	10YR3/3　暗褐色	粘土	灰黄褐色粘土を霜降状に含む。　自然堆積
Ⅲb	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	暗褐色土粒を少量含む。　耕作土
A	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	層下部に砂の薄層を含む。
Ⅳ	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄の薄層を縞状に含む。　自然堆積
Ⅴ	10YR4/1　褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土と黒色粘土を縞状に含む。　自然堆積
Ⅵ	10YR4/1　褐灰色	粘土	酸化鉄を環状に含む。　耕作土
Ⅶ	10YR5/1　褐灰色	粘土	層底面に凹凸がある。炭化物粒をわずかに含む。　耕作土
Ⅷ	7.5YR5/1　灰色	粘土	褐灰色粘土と黒色粘土の薄層を縞状に含む。　自然堆積
Ⅸ	10YR4/1　褐灰色	粘土	層底面に凹凸がある。　耕作土
Ⅹa	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	褐灰色粘土を縞状に含む。酸化鉄を多く含む。自然堆積
Ⅹb	10YR4/2　褐灰色	粘土	黒褐色粘土を縞状に含む。酸化鉄を多く含む。自然堆積
Ⅺ	10YR5/6　黄褐色	砂	灰白色粘土と黒褐色粘土の薄層を縞状に含む。自然堆積
Ⅻ	10YR5/1　褐灰色	粘土	黒褐色シルトを縞状に含む。酸化鉄を多く含む。自然堆積
ⅩⅢ	10YR2/1　黒　色 10YR5/3　にぶい黄褐色 10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	3色の土が互層状に堆積　自然堆積
ⅩⅣ	10YR5/1　褐灰色	シルト	自然堆積
ⅩⅤ	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	灰黄褐色土を縞状に含む。酸化鉄を含む。自然堆積
ⅩⅥ	10YR5/1　褐灰色	粘土質シルト	黒褐色シルトをまばらに含む。　自然堆積
B	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	

第42図　調査区・遺構断面図

ＳＤ３溝跡　調査区の中央で検出され、南北方向にのびる。ＳＤ１・２溝跡に切られている。方向は南側壁面でＮ－５°－Ｗである。規模は、検出部分の最大幅270cm・底面幅60～132cm・深さ最深で72cmを測る。断面形は舟底形を呈する。調査部分で堆積土は大別４層・細別６に分けられた。いずれも自然堆積の状況を呈し、土質・土色は基本層Ⅲｂ層に類似している。４ａ層下部ないし４ｃ層上面付近から土師器片が多数出土した。出土土師器には鉢１点（第43図３）、高坏脚部片２点（４・５）、台付甕の底部から脚部の破片１点（６）がある。高坏の脚部は中空で、脚部中央に張りがあり、外面は丁寧にヘラミガキ調整されており、器形や調整の特徴から南小泉式期にあたるものと考えられる。他の器種も高坏と共伴しても大きな矛盾はないと考えられる。したがって、この溝の年代については古墳時代中期頃と推定される。



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	J-1	Ⅱ層				瓦質陶器	五徳？	(3.5)	(17.0)			三角形の通気孔あり	36-1
2	J-1	Ⅱ層				磁器	碗	(3.3)	(9.0)			染付　外面：草花文　肥前　18c代	36-2
3	C-1		SD3	4層	No.1	非ロクロ土師器	壺	(8.8)	(9.9)			外面：ヘラミガキ　内面：口縁ヘラミガキ　体部不明	36-3
4	C-3		SD3	4層		非ロクロ土師器	高坏	(10.5)				外面：ヘラミガキ　内面：ヘラケズリ	36-5
5	C-2		SD3	4層		非ロクロ土師器	高坏	(9.2)			13.0	外面：ヘラミガキ　内面：ナデ、ヘラミガキ？	36-6
6	C-4		SD3	4層		非ロクロ土師器	台付甕	(6.0)				内外面とも磨滅	36-4

第43図　出土遺物

3）Ⅲｂ層：耕作土層

基本層Ⅲｂ層は、暗褐色土粒を少量含むが、良く攪拌された土壌で、層厚は10～30cmある。層の底面に大小の凹凸が観察される。耕作土となっていた可能性があるが、関連する遺構は不明である。層厚が厚いことから、畑の耕作土の可能性が高い。出土遺物はないが、ＳＤ３溝跡との関係から古墳時代中期またはそれ以前でもこれに近い時期と推定される。

4）Ⅳ層検出遺構

ＳＤ４溝跡　調査区の東部で検出された。南北方向にのび、北部はＳＤ１溝跡に切られる。南側は逆Ｙ字状に分かれている。方向は東側でＮ－７°－Ｅである。規模は、北部で幅50～75cm・底面幅20～50cm・深さ25cmを測る。断面形は逆台形を呈する。堆積土はⅢｂ層に類似するにぶい黄褐色粘土１層である。出土遺物はない。

5）Ⅵ層：水田土壌

Ⅵ層は、褐灰色の粘土層で層厚は約５cmである。上下層が薄い縞状を呈するのに対し、良く攪拌された均質な土壌である。Ⅴ層を薄く削って畦畔の検出に努めたが、検出はできなかった。また、Ⅵ層を除去する際にも畦畔の痕跡は検出されなかった。遺物は出土していない。

6）Ⅶ層：水田土壌

Ⅶ層は、褐灰色の粘土層で層厚は５cm前後である。攪拌された土壌であるが十分に均質にはなっておらずⅧ層を母材とする土壌のブロックを含む。層の底面に細かな凹凸があることから水田土壌と観察される。畦畔の痕跡は検

出されなかった。遺物は出土していない。

今回の調査では、Ⅵ層とⅦ層を土壌の攪拌状況によって分割したが、同一水田耕作土の上下である可能性もある。

7）Ⅸ層水田跡

Ⅸ層は、褐灰色の粘土層で層厚は５～15cmである。良く攪拌された均質な土壌で、層の底面に細かな凹凸がある。Ⅸ層を薄く削る過程で、Ｘ層の盛り上がり（掘り残し）を畦畔痕跡（擬似畦畔Ｂ）として検出した。畦畔の壁面は著しい出入りがあるが、およその方向はＮ－38°－Ｅである。畦畔痕跡の規模は、上面幅100～120cm、基底部幅120～150cm、高さは１～５cmを測る。Ｘａ層・Ｘｂ層はⅨ層水田の母材となっている。畦畔の規模から判断すると、大畦に相当すると考えられる。

6　まとめ

① 本地区は、近世から近代にかけて洪水のような現象により、厚く土砂が堆積したことが明らかになった。

② Ⅲｂ層の上面で溝跡３条、Ⅳ層で溝跡１条が検出され、Ⅲ層検出のSD３溝跡からは古墳時代中期の土師器が出土した。

③ Ⅲｂ層は、古墳時代中期頃の畑の耕作土層の可能性が考えられる。

④ Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅸ層は水田耕作土壌と推定され、Ⅸ層では畦畔の痕跡と考えられるＸ層の高まりが検出された。

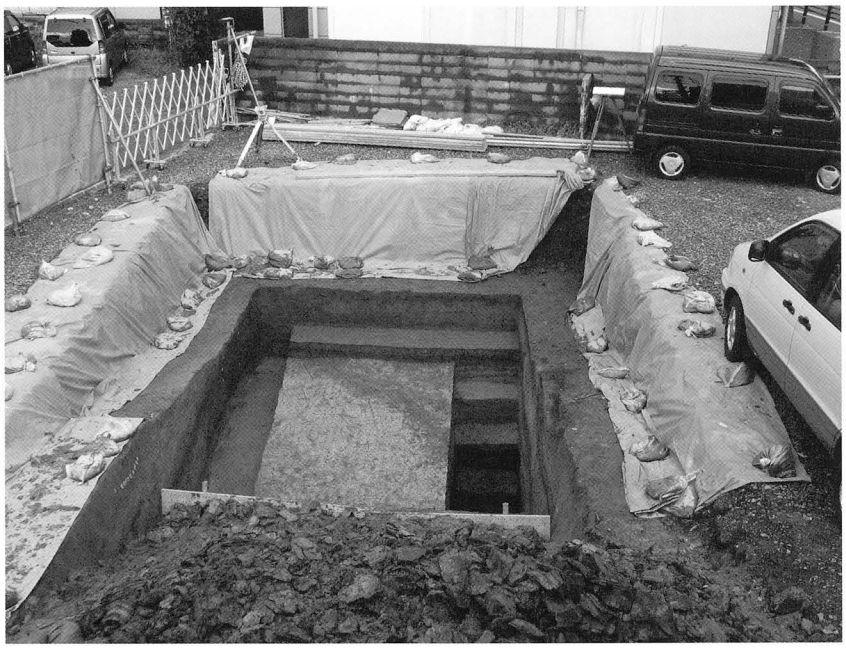
⑤ 周辺の調査区との土層の対比は、本調査区が後背湿地から自然堤防へ移行する場所に当たっているために明確ではないが、南側に隣接する第15次調査の成果と比較すると次のとおりに推定される。

第15次調査	第139次調査
Ⅴ区７ａ層（古墳時代中期：南小泉式）	Ⅲｂ層（古墳時代中期：南小泉式頃）
７ｃ層（弥生時代後期：天王山式）	（対応層無し：Ⅳ層の一部？）
９ａ層（弥生時代中期後半：十三塚式）	Ⅵ・Ⅶ層
11ａ層（弥生時代中期中頃：桝形囲式）	Ⅸ層
13ｂ層（弥生時代中期中頃：桝形囲式以前）	（対応層無し：Ⅻ層の一部？）

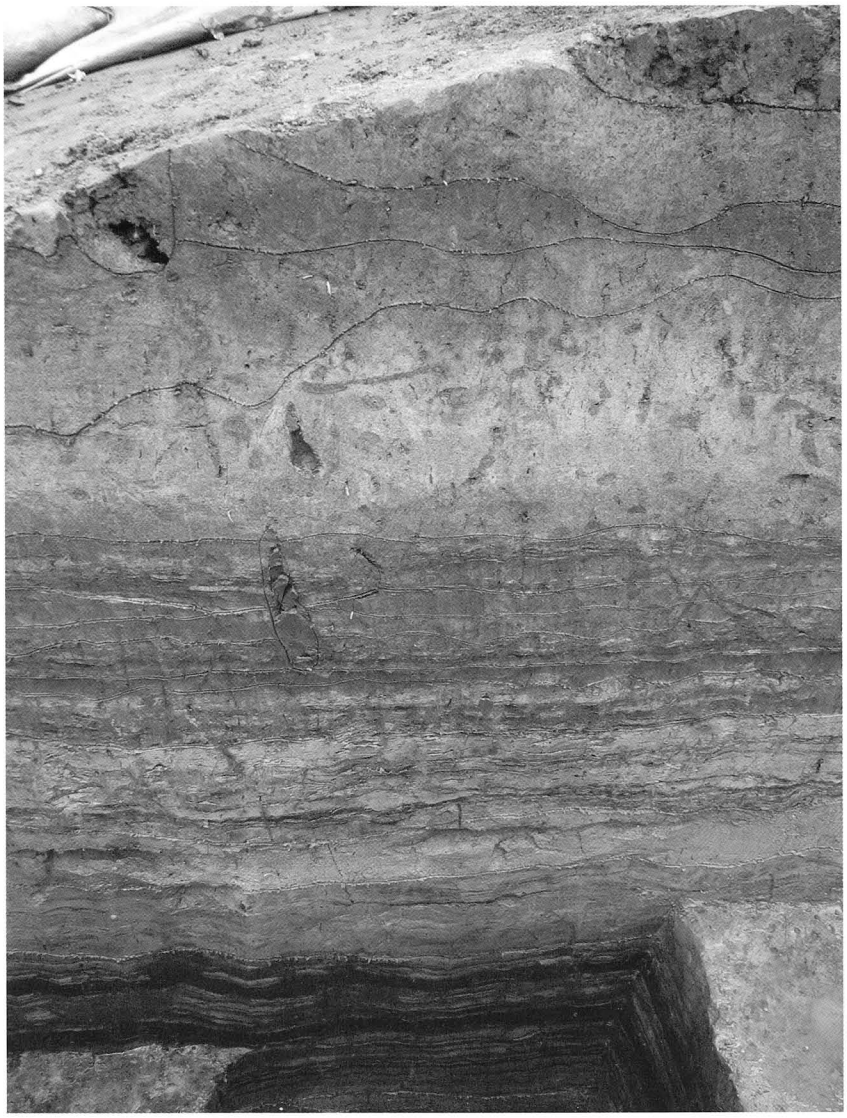
＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1987）：「富沢」仙台市文化財調査報告書第98集

仙台市教育委員会（1989）：「富沢・泉崎浦・山口遺跡」仙台市文化財調査報告書第128集



1　調査区全景（西から）



2　基本層序
：南壁中央（北から）

図版28　調査区と基本層序

1　Ⅳ層上面検出状況
（西から）

2　1号溝跡完掘と4号溝跡検出状況
（南西から）

3　2・3号溝跡完掘状況
（南西から）

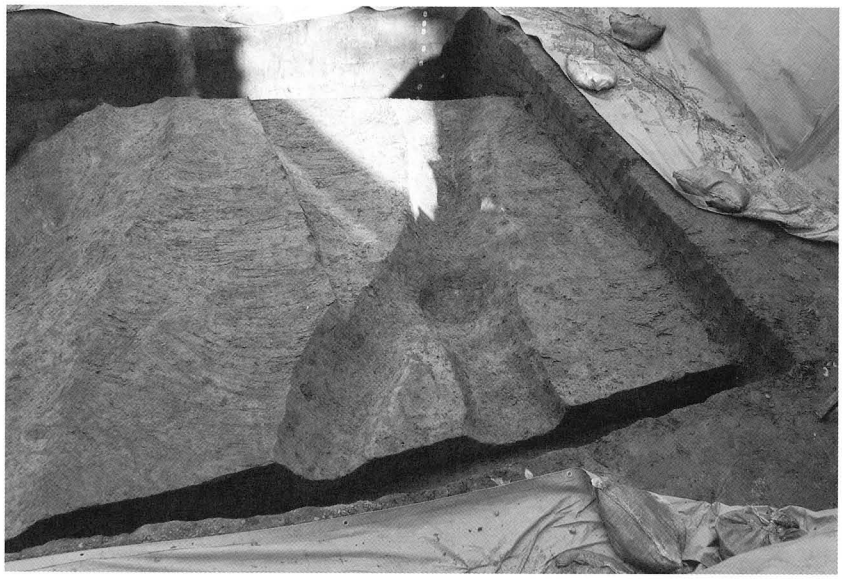
図版29　4層上面と検出遺構

1　２・３号溝跡断面
（南から）

2　３号溝跡出土土師器（C－１）
（南から）

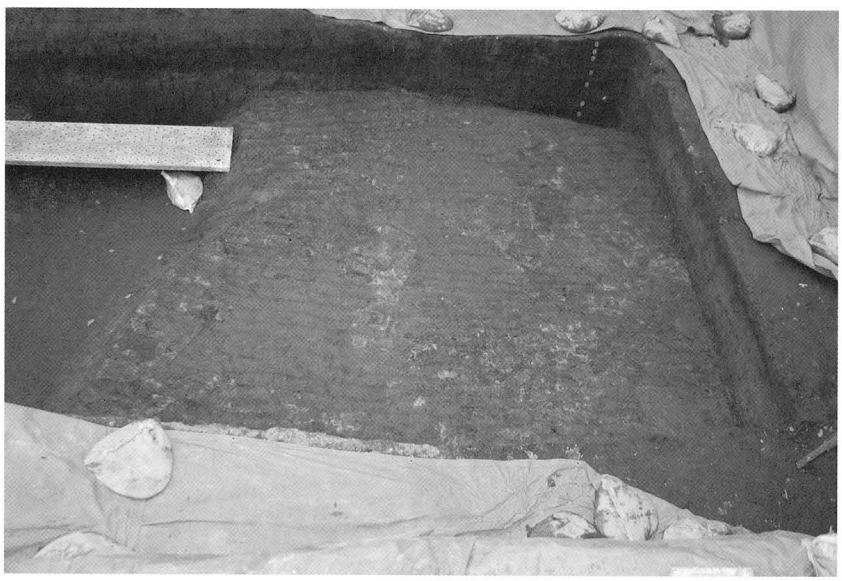
3　４号溝跡断面
（南から）

図版30　２・３・４溝跡断面と遺物出土状況



1　4号溝跡完掘状況
（南から）

2　Ⅳ層上面完掘状況
（南西から）



3　Ⅵ層上面検出状況
（南から）

図版31　Ⅳ層完掘状況とⅥ層の状況

1　Ⅶ層上面検出状況
（南から）

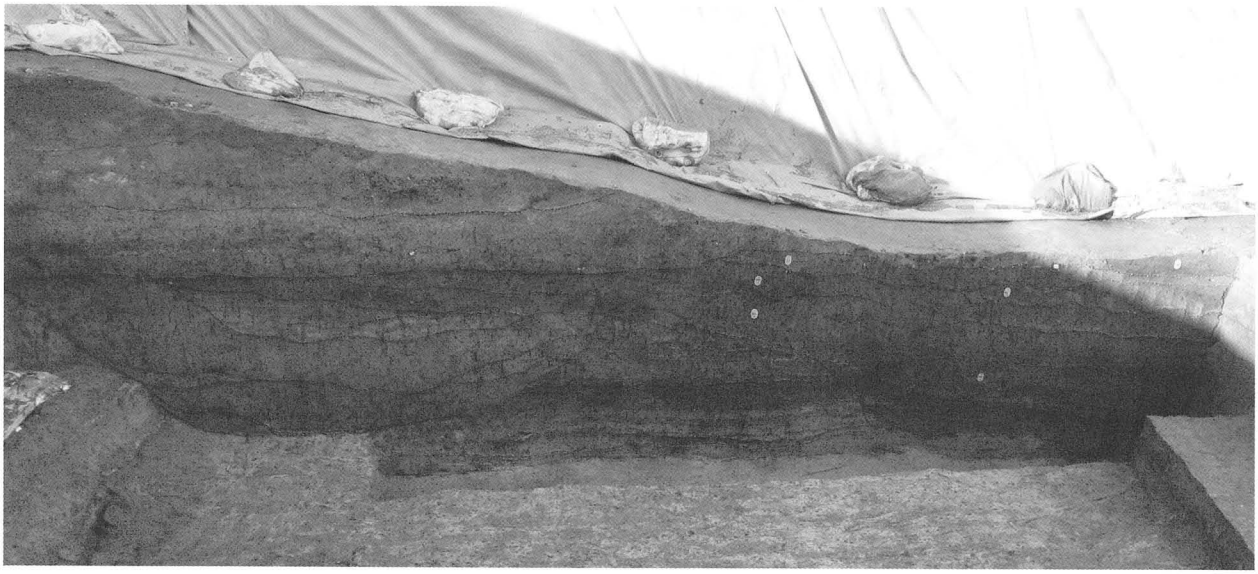
2　Ⅸ層上面検出状況
（南から）

3　Ⅸ層水田跡畦畔痕跡検出状況
（西から）

図版32　Ⅶ層上面とⅨ層水田跡の検出状況

1　IX層水田跡畦畔痕跡
（西から）

2　IX層水田跡畦畔痕跡
（南から）



3　調査区北壁東部（南から）

図版33　IX層水田跡畦畔痕跡と調査区断面

1　調査区北壁東部（南から）

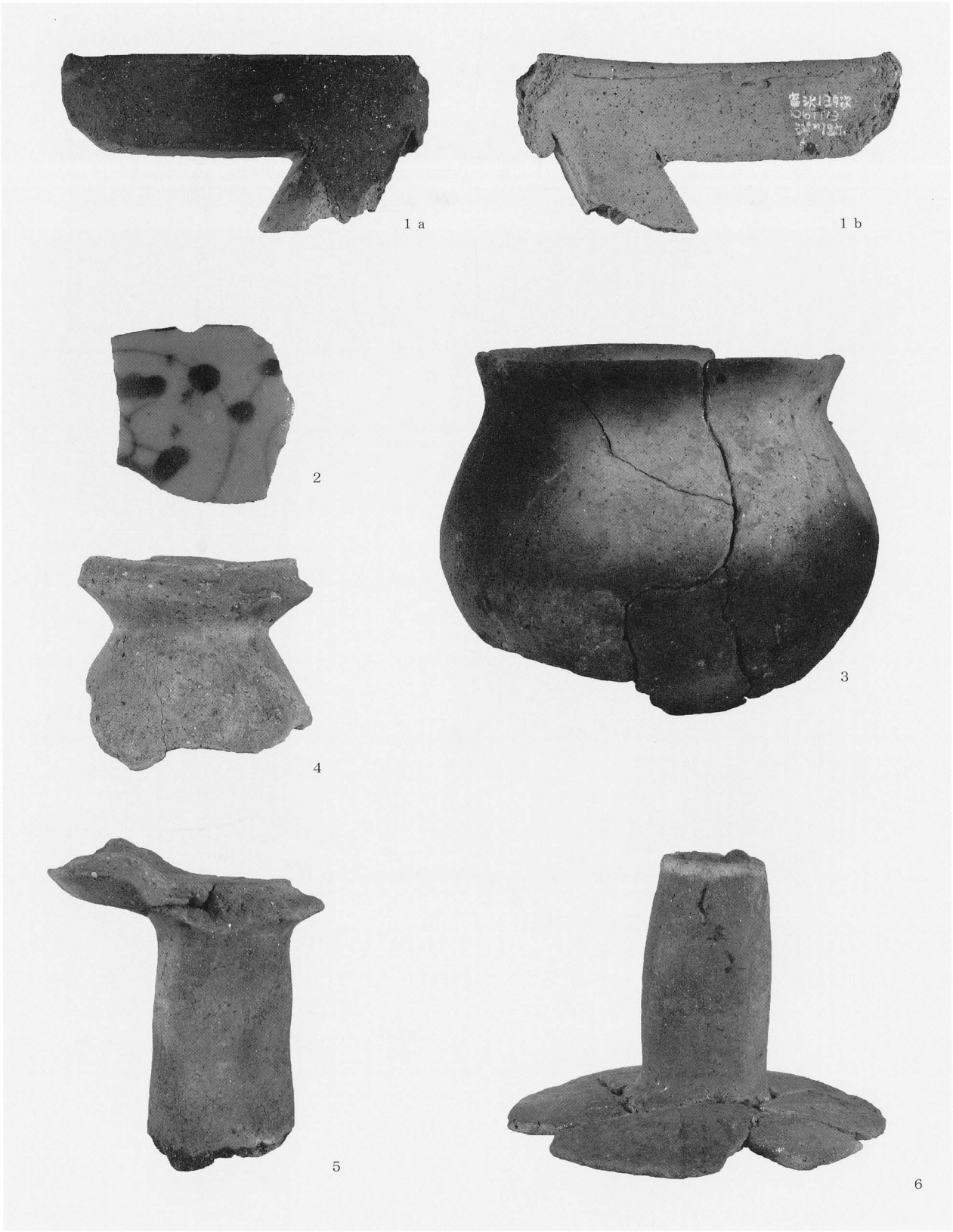
2　調査区南壁断面（北西から）

図版34　調査区土層断面１

1　調査区南壁東部土層断面（北から）

2　調査区南壁中央部土層断面（北から）

図版35　調査区土層断面 2



1	瓦質土器	五徳？	Ⅰ－1	Ⅱ層		（第43図１）
2	磁器	碗	Ｊ－1	Ⅱ層		（第43図２）
3	土師器	甕	Ｃ－1	ＳＤ３	４層	（第43図３）
4	土師器	台付甕	Ｃ－4	ＳＤ３	４層	（第43図６）
5	土師器	高杯	Ｃ－3	ＳＤ３	４層	（第43図４）
6	土師器	高杯	Ｃ－2	ＳＤ３	４層	（第43図５）

図版36　富沢遺跡第139次調査出土遺物

Ⅸ　田母神屋敷跡発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名　田母神屋敷跡（宮城県遺跡番号01231）
所　在　地　仙台市宮城野区蒲生字鍋沼41番、42番
調査原因　鉄筋コンクリート造平屋建て集会施設建築及び外構工事
調査対象面積　420㎡
調査面積　192㎡
調査期間　確認調査：平成18年５月29日
　　本調査：平成18年７月24日～平成18年７月27日
調査主体　仙台市教育委員会
調査担当　仙台市教育局生涯学習部文化財課
担当職員　主査　工藤哲司　　文化財教諭　早川潤一　　藤田雄介

2．調査に至る経緯と調査方法

平成18年２月18日付けで、仙台市建設局下水道部施設建設課より上記地内における集会施設建築工事に伴う協議書が提出された。これを受けて平成18年５月29日に、施設予定地内に２ヶ所のトレンチを設定して確認調査を行った。その結果、１区で溝跡と土坑、２区で溝跡と見られる遺構を確認したため、７月24日から本調査を実施することとなった。

本調査は確認調査の１区と２区の間に東西約15m×南北約20mの調査区を設定した。湧水が著しいため、調査区の周囲と壁際に排水溝を作り、排水を行いながら調査を行った。このため、調査区は確認調査の１区と一部重複した形で、全体的に建物予定地の東側を中心とする東西約12m×南北約16mとなった。重機により盛土及び耕作土層を除去し、現地表下約25cmのⅡ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。

測量は、平面図は１/50平板測量、個別遺構は１/20実測、断面図は１/20実測とした。

3．遺跡の位置と環境

田母神屋敷跡は仙台市の北東部に位置し、仙台市宮城野区蒲生字岡田に所在する。ＪＲ仙台駅から東へ約9.2km、ＪＲ仙石線陸前高砂駅の南東約2.8kmに位置する。仙台平野の北部、七北田川下流低地部の右岸（南岸）に広がる自然堤防を中心に立地し、標高は２m前後である。遺跡の規模は最も広い部分で東西約300m、南北約250mあり、面積は約6.8haである。

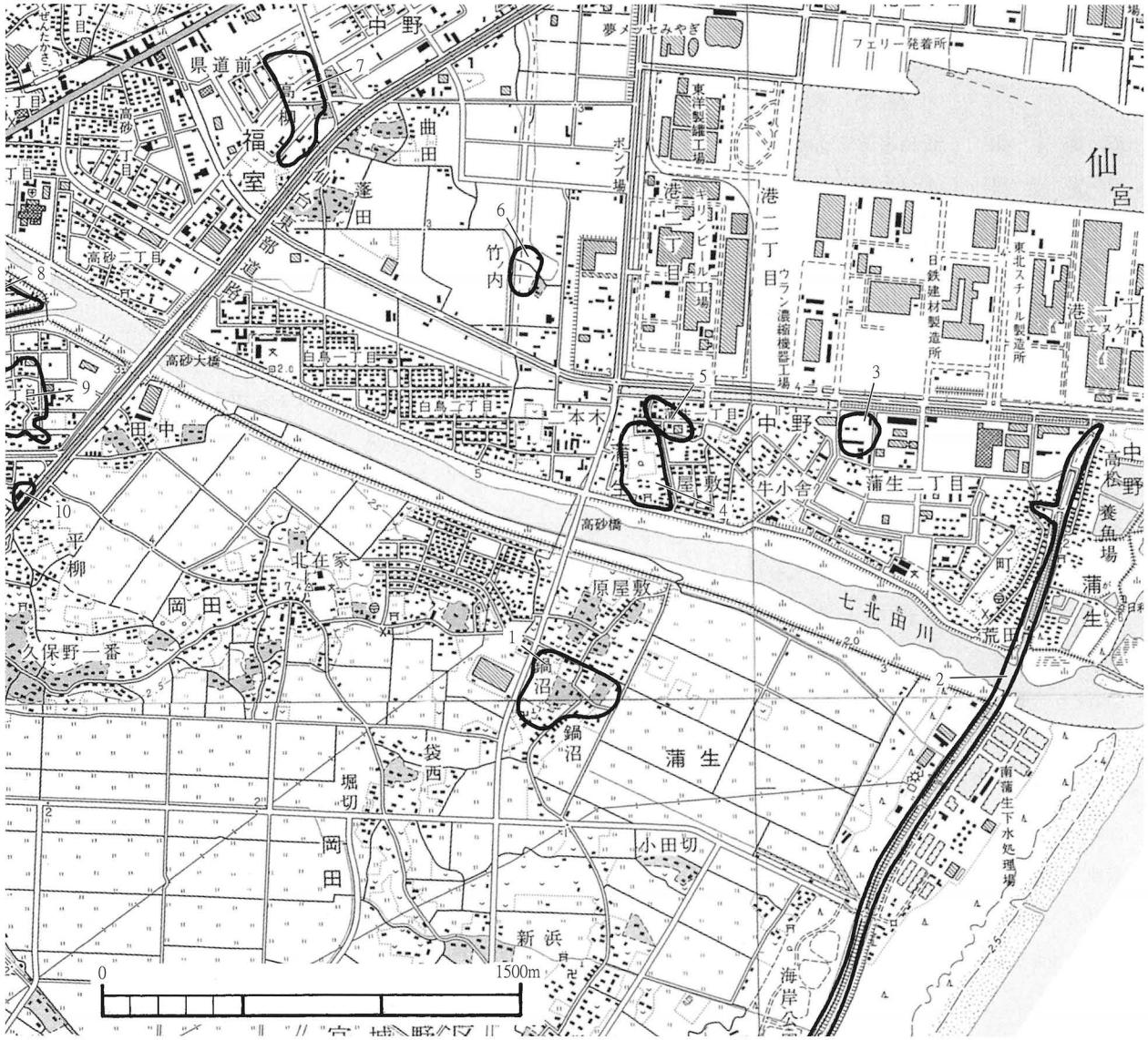
岡田地区は、近年宅地の造成も見られるようになってきているが、大部分の地域は米や野菜類を栽培する古くからの田園地帯が広がる。

紫桃正隆氏の『史料　仙台領内古城・館　第四巻』によれば、本遺跡は江戸初期に小太刀の師範として伊達家に仕え450石を拝領した田母神氏が居住したと言われる屋敷跡である。周囲を水濠と土塁に囲まれた南北約250m、東西約120mに及ぶ平城形式の屋敷で、田母神屋敷の中心は専能寺墓地の北側、かつて七北田川に架かっていた旧高砂橋へ向かう街道の西側にあったとされる。

周辺に位置する遺跡として、古代から中世にかけては、平安時代中頃以降の水田跡・畑跡・屋敷跡からなる中野高柳遺跡のほか、牛小舎遺跡、竹ノ内遺跡、西原遺跡、福田町遺跡、鶴巻Ⅰ遺跡、鶴巻Ⅱ遺跡、小原遺跡などが点

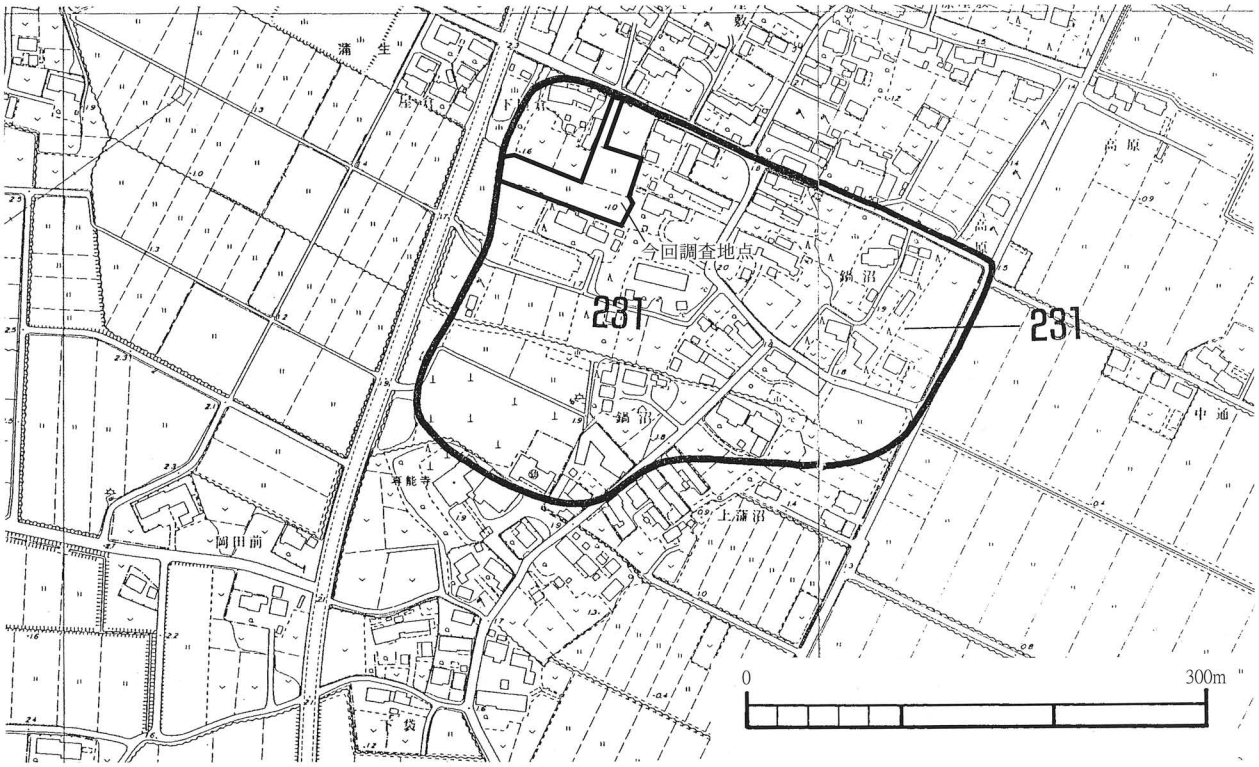
在している。また、近世以降の遺跡としては、藩政時代から明治初期にかけて開削され、塩竈市から岩沼市に至る全長30km余りの運河である貞山堀、伊達家の着座の格式を有した和田氏が蒲生在所として家中屋敷を構え、蒲生地区における新田開発の拠点だった和田織部屋敷跡などが分布している。

田母神屋敷跡ではこれまでに数度の確認調査が実施されており、当該地から東に約50m離れた地点では南東方向から北西方向に延びる溝跡１条が検出されている。

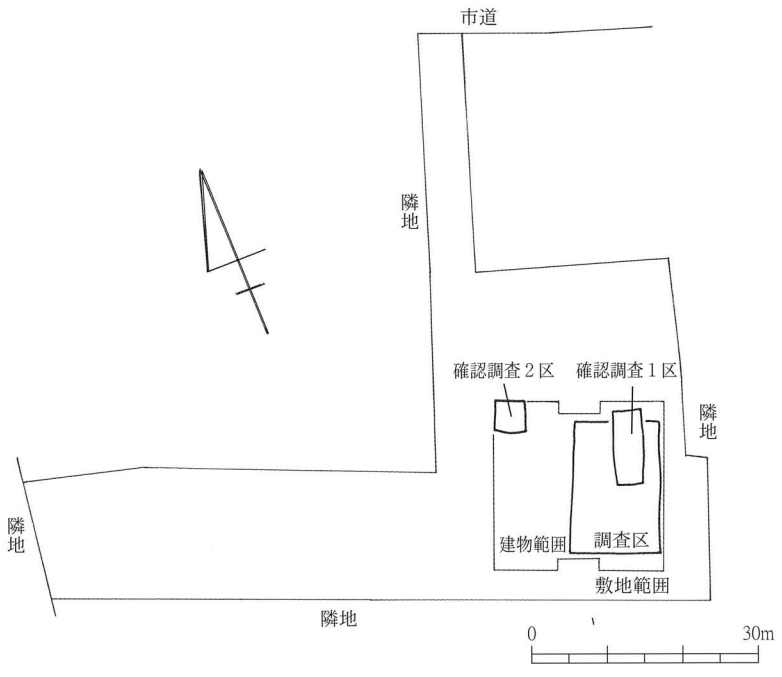


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	田母神屋敷跡	屋敷跡	自然堤防	近世	6	竹ノ内遺跡	集落・散布地	浜堤	平安・近世
2	貞山堀	堀跡・運河	浜堤	近世	7	中野高柳遺跡	集落・屋敷跡・水田	自然堤防	平安・中世・近世
3	西原遺跡	散布地	自然堤防	奈良・平安	8	福田町遺跡	散布地	自然堤防	平安
4	和田織部館跡	屋敷跡	浜堤	近世	9	鶴巻Ｉ遺跡	散布地	自然堤防	平安
5	牛小舎遺跡	散布地	自然堤防	奈良・平安	10	小原遺跡	散布地	自然堤防	平安

第44図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第45図　調査地点の位置



第46図　調査区配置図

4. 基本層序

調査区の周囲と壁際に排水溝を作り、排水ポンプを使用して調査区内および周辺の排水を行いながら調査を実施したが、調査区全域からの湧水があり、調査区内の壁面全体の断面調査を行うことができず、やむを得ず部分的な断面調査となった。西壁南部で確認した結果は以下の通りである。

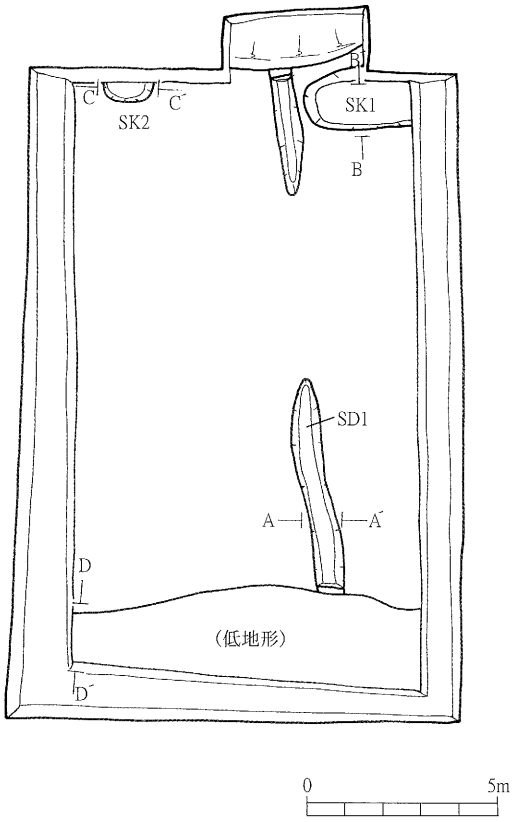
Ⅰ層　黒褐色シルト質粘土。層厚は約25cm。砂を含む。水田耕作土。

Ⅱ層　黄褐色砂。層厚は約５～10cm。上面の標高は0.8m。

5. 発見遺構と出土遺物

1）溝跡

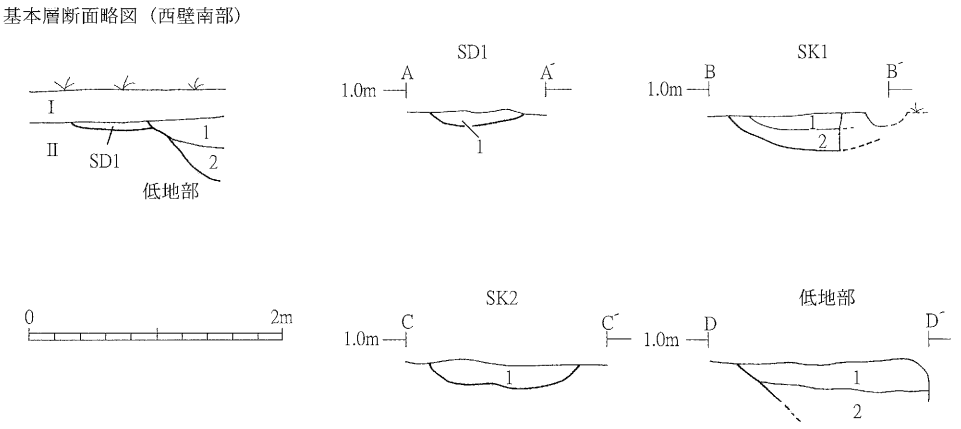
ＳＤ１溝跡　【位置・重複】調査区中央やや東寄りで検出された。溝は調査区中央部付近で途切れており、南側は低地形の堆積土に切られている。【方向・幅】全体の方向はほぼ南北方向である。検出部分の溝の長さは北半部で約３m、南半部で約5.5m、幅は検出面で約50～90cm、底面で約10～30cmである。【深さ・断面形】検出面からの深さは約15～25cmである。断面形は舟底形を呈する。【堆積土・出土遺物】堆積土はオリーブ褐色砂のブロックと、植物遺体を含む黒褐色砂からなる１層である。出土遺物はない。



第47図　遺構配置図

2）土坑

ＳＫ１土坑　【位置・重複】調査区北東部で土坑の一部が検出された。東側は調査区外に延びる。【平面形・大きさ】平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、検出部分では東西３m、南北1.2mを測る。【深さ・断面形】深さは14～32cmで、断面形は逆台形である。【堆積土・出土遺物】堆積土は２層に分けられる。１層は黒褐色砂で、２層は黒褐色砂質粘土である。遺物は１層から磁器３点、陶器片１点、木製品片２点が出土した。このうち図化できたのは、磁器（Ｊ－１）、陶器片（Ｉ－１）、木製品片（Ｌ－１～２）の計４点である。Ｊ－１はほぼ完形の状態で出土した。18世紀前半から中頃と考えられる肥前産の染付皿で、二重圏線で囲まれた見込の中央部に印判五弁花文があり、内側面には草花文が描かれている。外面の腰部、高台、高台内部に圏線が入っており、外面体部には土坡、雲、もしくは雁が描かれているようにも見えるが、何の文様なのかは不明である。このほかの磁器には、18世紀代の肥前産の染付碗と見られる小片（図版40－２）と、17～18世紀頃と見られる肥前産の青磁皿の小片（図版40－３）がある。Ｉ－１は美濃産の腰錆碗の一部で、口縁部に灰釉、体部に鉄釉がかけられている。時期は18世紀前半のものと考えられる。Ｌ－１は漆器椀で、内面に朱漆、外面に黒漆が塗られ、外面体部には二重輪に菱花菱または丸に菱花菱と見られる家紋らしき文様が施されている。Ｌ－２は柾目の板材で、湾曲が見られる。凸面の狭端側と中央部がくぼんでおり、箍の跡と思われる。このことから桶の側板の一部と見られる。



基本層序（調査区西壁南部　断面略図）

層位	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	砂を含む。
Ⅱ	2.5Y5/3　黄褐色	砂	

ＳＤ１溝跡

層位	土　色	土　質	備　考
1層	2.5Y3/1　黒褐色	砂	2.5Y4/3　オリーブ褐色砂をブロック状に含む。植物遺体を含む。

ＳＫ１土坑

層位	土　色	土　質	備　考
1層	2.5Y3/1　黒褐色	砂	植物遺体を含む。木製品・陶磁器出土。
2層	2.5Y3/1　黒褐色	砂質粘土	植物遺体を含む。

ＳＫ２土坑

層位	土　色	土　質	備　考
1層	10YR3/1　黒褐色	砂	同色の粘土を斑状に含む。

低地部

層位	土　色	土　質	備　考
1層	2.5Y2/1　黒色	砂	黒褐色土及び黄灰色砂を斑状に多く含む。
2層	2.5Y3/1　黒褐色	砂	植物遺体を多量に含む。

第48図　遺構断面図

ＳＫ２土坑　【位置・重複】調査区中央北西部で土坑の一部が検出された。北側は調査区外に延びる。【平面形・大きさ】平面形は隅丸方形と推定され、検出部分では東西約130cm、南北約50cmを測る。【深さ・断面形】深さは15～30cmで、断面形は逆台形である。【堆積土・出土遺物】堆積土は黒褐色の粘土を斑状に含む黒褐色の砂である。遺物は出土していない。

３）低地形

【位置･重複】調査区の南端から確認調査の２区にかけて延びる地形の下がりが検出された。北側でＳＤ１溝跡を切っている。【方向・幅】方向はほぼ東西方向であり、北側は調査区外に延びている。【深さ】掘り下げは行っていないが、建物予定地の南辺部分におけるボーリングの結果から深さは１ｍ以上あると推定される。【堆積土･出土遺物】断面観察を行った西壁では、上部の堆積土が２層に分けられる。１層は黒褐色土及び黄灰色砂を斑状に多く含む黒色砂、２層は植物遺体を多く含む黒褐色砂である。旧河道の可能性が考えられる。

6. まとめ

①　今回の調査は遺跡の北西部で実施した。

②　今回の調査では溝跡１条、土坑２基、旧河道と思われる落ち込みを確認した。

③　ＳＫ１土坑は出土遺物から18世紀より新しい時期の遺構と考えられる。

④　ＳＤ１溝跡、ＳＫ２土坑については出土遺物はなく、時期や性格など詳細は不明である。

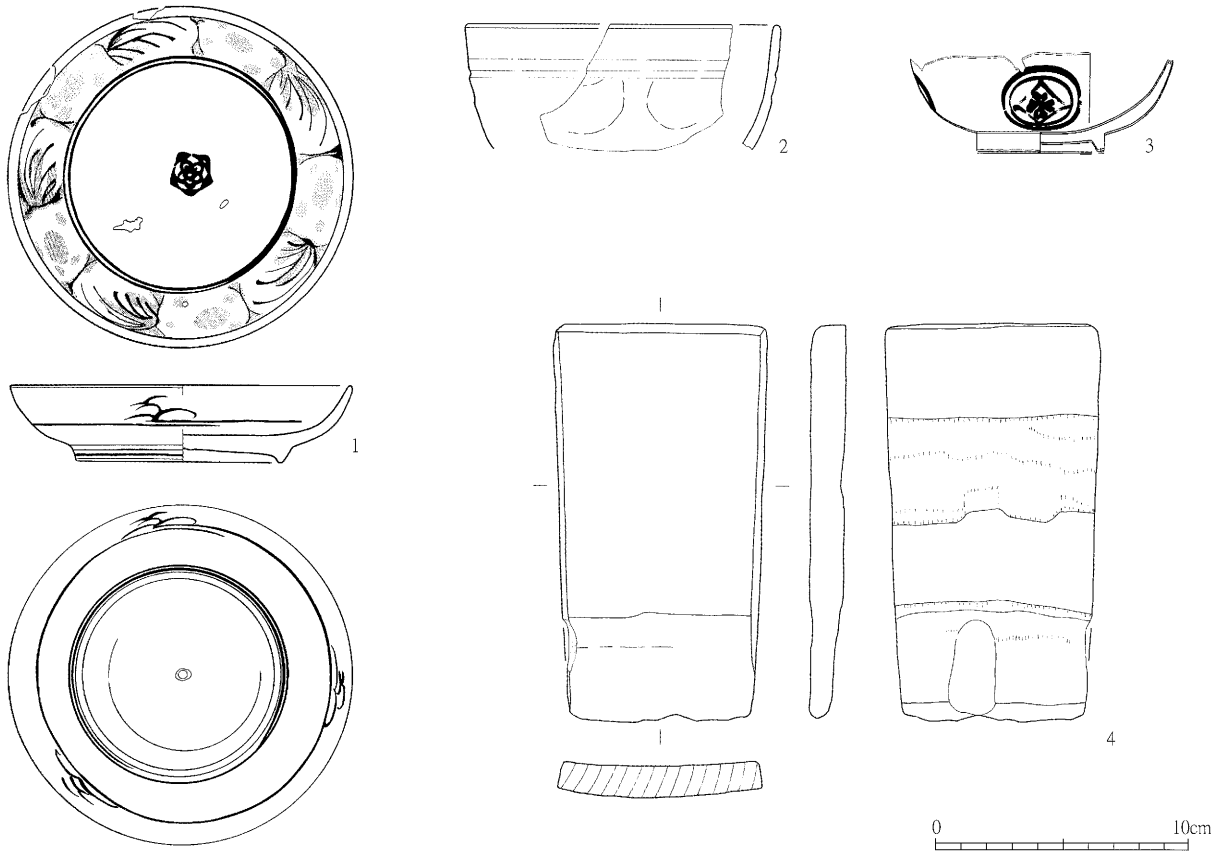
⑤　本調査区周辺では、近世ないしそれ以降に属する可能性のある遺構が存在することが明らかになったが、田母神屋敷跡と直接関係のある遺構かどうかは、今後の調査成果にかかる課題である。

＜参考・引用文献＞

紫桃正隆（1974）：『史料　仙台領内古城・館』第四巻　宝文堂

宮城県教育委員会・宮城県企業局（1976）：宮城県文化財調査報告書第43集『貞山堀運河』

宮城県教育委員会・宮城県土木部（2006）：宮城県文化財調査報告書第204集『中野高柳遺跡Ⅳ』
－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅳ－



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	J-1		SK-1	1層		磁器	Ⅲ	3.1	13.6		8.4	染付。外面に文様あり。内面：草花文。見込：印判五弁花文。肥前産。18c前半～中頃	40-1
2	I-1		SK-1	1層		陶器	碗	(5.0)	(12.4)			口縁：灰釉　体部：鉄釉（腰錆）　美濃産　18c後半	40-4
3	L-1		SK-1	1層		木製品	椀	(4.0)	10.5		5.0	外面：黒色漆。　三方に文様あり。内面：朱漆。	40-5
4	L-2		SK-1	1層		木製品	桶側板	15.9	8.5		1.5	木取り：柾目。	40-6

第49図　出土遺物

1　遺構検出状況（南から）

2　ＳＤ１溝跡断面（北から）

3　ＳＤ１溝跡完掘状況（南から）

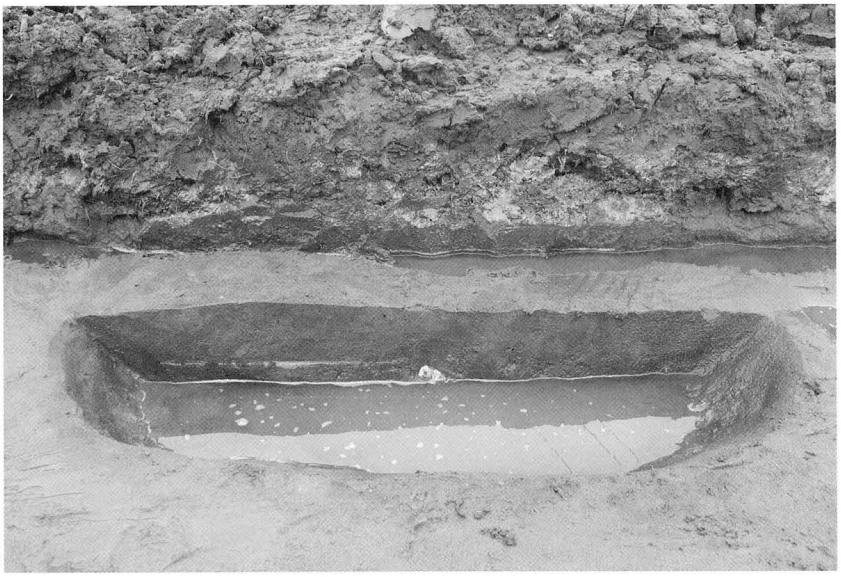
図版37　遺構検出状況・遺構調査状況

1　ＳＫ１土坑遺物出土状況（南から）

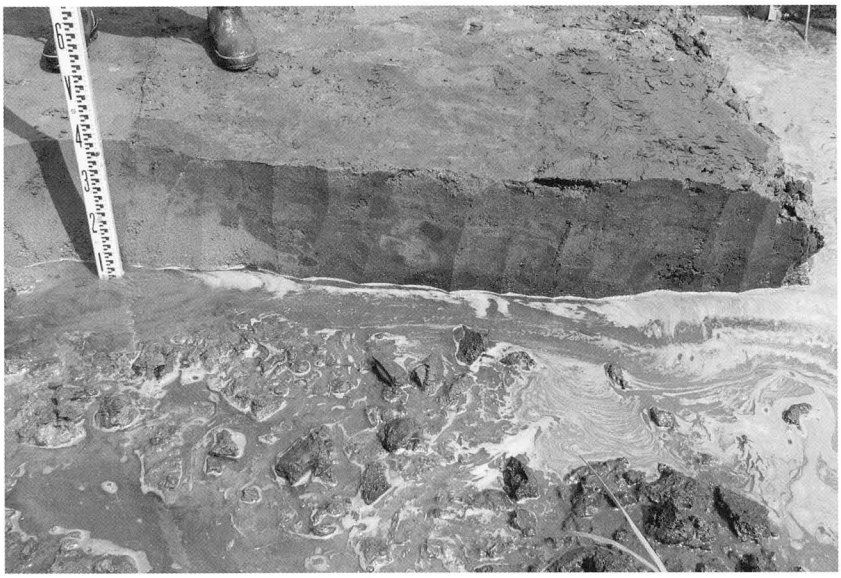
2　ＳＫ１土坑断面（東から）

3　ＳＫ１土坑（南西から）

図版38　遺物出土状況・遺構調査状況



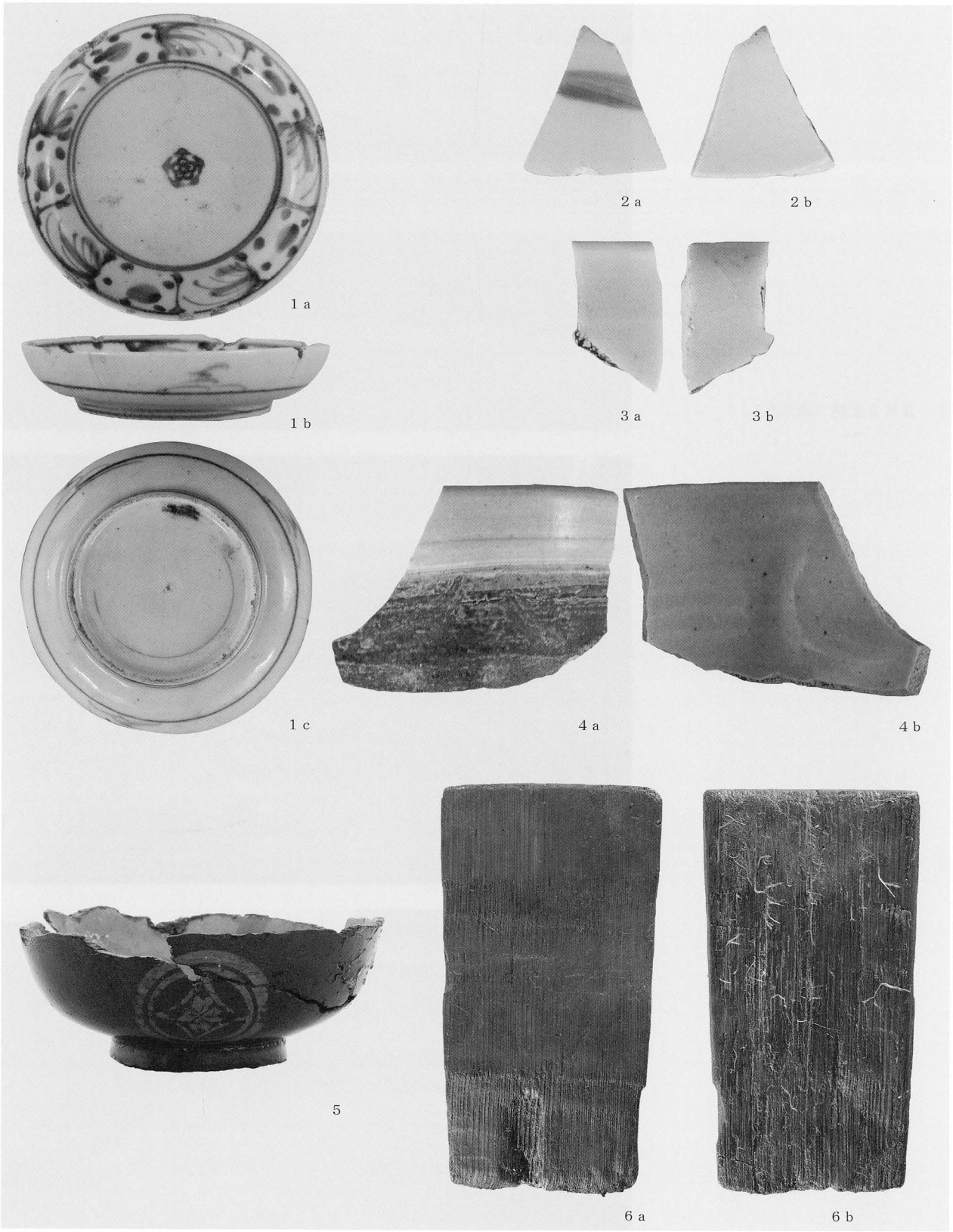
1　ＳＫ２土坑（南から）



2　低地形堆積土断面（西から）

3　完掘全景（北から）

図版39　遺構調査状況・完掘全景



1　磁器　染付皿　J－1　SK1　(第49図1)
2　磁器　染付碗？　SK1
3　磁器　青磁皿　SK1
4　陶器　腰錆碗　I－1　SK1　(第49図2)
5　木製品　漆器椀　L－1　SK1　(第49図3)
6　木製品　桶側板　L－2　SK1　(第49図4)

図版40　田母神屋敷跡出土遺物

X　袋前遺跡第３次発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名　袋前遺跡（宮城県遺跡番号01439）

調 査 地 点　仙台市太白区大野田字竹松地内

調 査 期 間　平成18年８月７日～８日

調査対象面積　195㎡

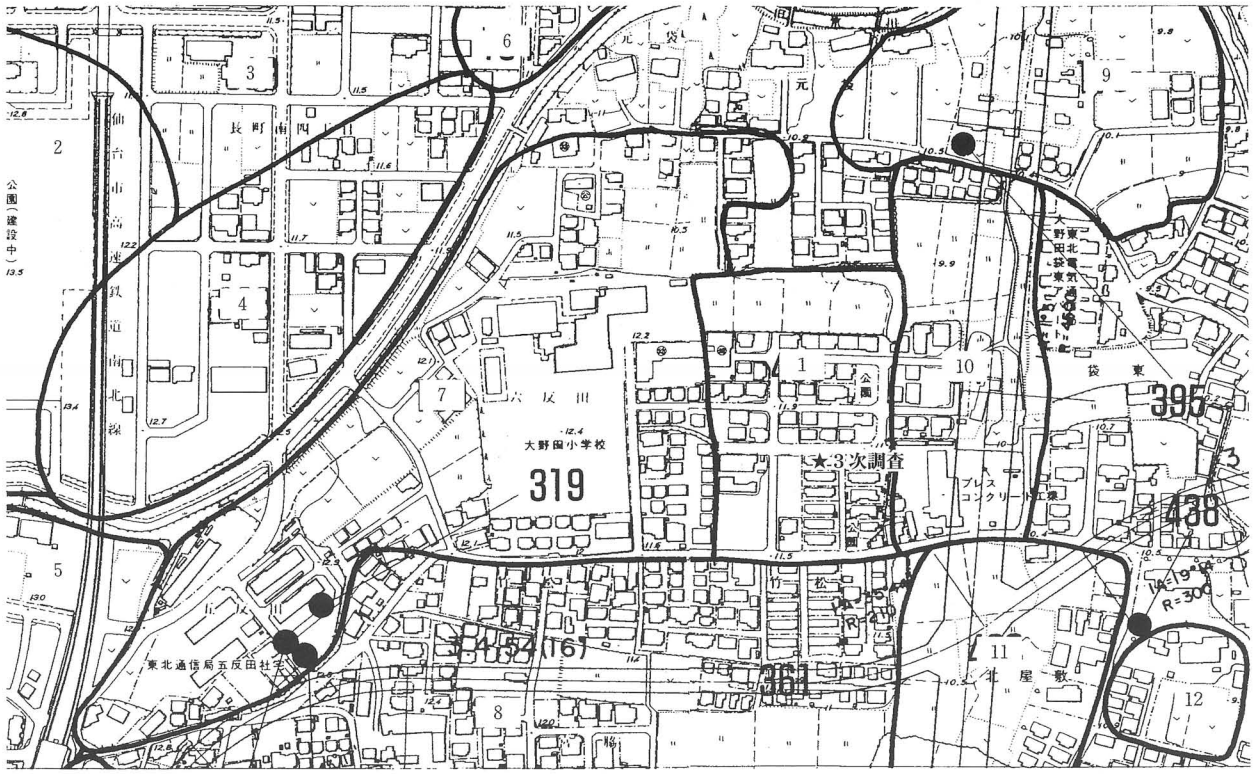
調 査 面 積　25㎡

調 査 原 因　鋼管杭打ちを伴う個人住宅建築

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担 当 職 員　主査　工藤哲司　　文化財教諭　今野秀治



番号	遺跡名	種別	立地	時代と主な遺構
1	袋前遺跡	集落	自然堤防	古墳：竪穴住居跡、古代：掘立柱建物跡・畑跡
2	山口遺跡	集落・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文：早期土坑・中期埋設土器、弥生後期水田跡、古代：竪穴住居跡、中世：掘立柱建物跡・井戸跡
3	富沢遺跡	集落・水田跡	後背湿地	旧石器：焚き火跡、縄文：早期落とし穴、弥生～近世水田跡、中世：屋敷跡、近世：墓跡
4	下ノ内浦遺跡	集落・畑跡	自然堤防	縄文：早期竪穴住居跡・落とし穴・後期配石遺構（墓跡）、弥生：後期竪穴遺構・土坑墓・壺棺、近世：掘立柱建物跡
5	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文：中期竪穴住居跡、弥生：後期土坑、古墳：竪穴住居跡、古代：竪穴住居跡
6	袋東遺跡	散布地	自然堤防	
7	六反田遺跡	集落・墳墓	自然堤防	縄文：中期・後期竪穴住居跡、古代：竪穴住居跡
8	大野田古墳群	集落・古墳・畑跡	自然堤防	縄文：後期包含層、古墳：中～後期前方後円墳・円墳、古代：掘立柱建物跡・竪穴住居跡・畑跡、中世：ピット列
9	元袋遺跡	集落	自然堤防	弥生：水田跡、古代：竪穴住居跡・掘立柱建物跡、中世：堀跡
10	大野田遺跡	集落	自然堤防・後背湿地	縄文：後期環状集石群・掘立柱建物跡・土坑、古墳：竪穴住居跡、古代：竪穴住居跡・畑跡
11	王ノ壇遺跡	集落・屋敷・道路	自然堤防・後背湿地	縄文：後期竪穴遺構・埋設土器・土坑・古代：畑跡、中世：屋敷跡（掘立柱建物跡・塚墓・火葬墓・土壙墓・井戸）
12	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	

第50図　調査区の位置と周辺の遺跡（1／5000）

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成18年６月28日付けで、高橋恒男氏・高橋英氏より、深さ5.5mの鋼管杭打ちを伴う個人住宅建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成18年８月７日に実施した。建築予定地に南北４m・東西16mのトレンチを設定して調査を行なったところ、盛土と表土層が合わせて1.1mの深さがあったので、実質の調査区は南北２m・東西12.5mの範囲となった。Ⅴ層上面で遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3. 遺跡の位置と環境

袋前遺跡は、仙台市の南部の「郡山低地」と呼ばれる地域にあり、南を名取川・北西から南東を広瀬川・北東から南西を大年寺丘陵に囲まれている。遺跡の近くは名取川の支流の一つである笊川が流れ、この河川が複雑な微地形を形成している。大野田周辺の自然堤防は古い時代に形成され、縄文時代以来多くの遺跡が密に存在している。調査区付近の標高は11m前後である。

縄文時代早期には下ノ内遺跡で竪穴住居跡・落とし穴、中期には六反田遺跡・下ノ内遺跡で竪穴住居跡、後期には六反田遺跡で竪穴住居跡、大野田遺跡で環状配石遺構、下ノ内浦遺跡で配石墓が発見され、この辺りの自然堤防上では縄文時代早期以来、活発な人間活動が行われたことが窺われる。弥生時代には自然堤防上の下ノ内遺跡や下ノ内浦遺跡では後期の竪穴遺構や土壙墓・壺棺が、後背湿地の富沢遺跡では中期から後期の水田跡が重層的に発見されている。古墳時代は、各遺跡に前期から後期の竪穴住居跡が散在しており、大野田古墳群では中期末から後期の前方後円墳や円墳があるほか、石棺墓・木棺墓なども発見されている。奈良・平安時代には、各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。また、袋前遺跡・大野田古墳群・六反田遺跡に跨って溝で囲まれた方形区画の中に大型の柱穴の建物群が存在することが明らかになってきた（平成16年度宮城県遺跡調査成果発表要旨・宮城県考古学会）。中世には王ノ壇遺跡に堀に囲まれた大規模な屋敷が形成され、多数の掘立柱建物跡のほか井戸跡・塚墓・火葬墓・土壙墓などがあり、近くには道路遺構も発見されている。

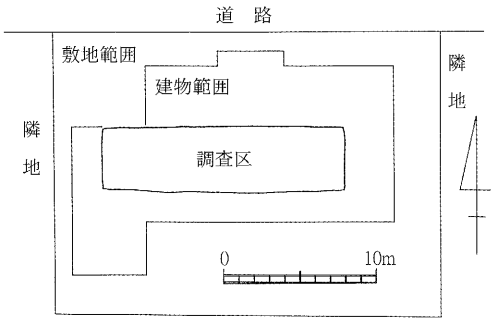
4. 基本層序

盛　土　山砂・砕石・残土による盛土層。層厚約110cm。

Ⅰａ層　10YR５/２灰黄褐色のシルト質粘土層。層厚約15cm。水田耕作土層。

Ⅰｂ層　10YR６/２灰黄褐色のシルト質粘土層。層厚約10cm。酸化鉄を粒状に含む。水田耕作土層。

Ⅰｃ層　10YR６/４にぶい黄橙色のシルト質粘土層。層厚約10cm。酸化鉄を縞状に集積。水田耕作土層。



第51図　調査区配置図

Ⅱ　層　10YR２/３黒褐色のシルト質粘土層。層厚約５cm。周辺調査における中世の遺構面である可能性がある。

Ⅲ　層　10YR３/４暗褐色のシルト質粘土層。層厚約５cm。酸化鉄を粒状に含む。

Ⅳａ層　10YR３/２黒褐色のシルト質粘土層。層厚約15cm。マンガン粒を含む。畑耕作土層。

Ⅳｂ層　10YR３/３暗褐色のシルト質粘土層。層厚約10cm。黄褐色土（Ⅴ層起源）のブロックを多量に含む。

Ⅴ　層　10YR５/６黄褐色のシルト質粘土層。地山。今回の遺構検出面。

5. 発見遺構と出土遺物

Ⅴ層上面で、溝跡（小溝状遺構）12条と性格不明遺構１基・ピット７基が検出された。

１）小溝状遺構群

Ⅴ層上面で検出された小溝状遺構群は、調査区壁面での断面観察から、そのほとんどがⅣ層からの落ち込みであることが確認できた。方向と切りあいから、南北方向のものを１群、東西方向のものを２群とした。１群が２群を切っている。

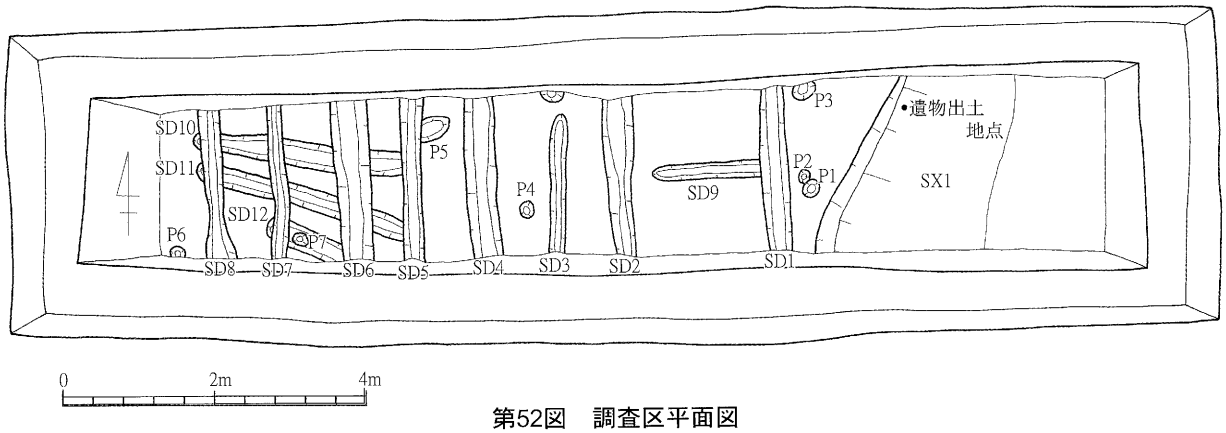
＜小溝状遺構１群　８条（SD１、SD２、SD３、SD４、SD５、SD６、SD７、SD８）＞

調査区を南北方向に横切る形で、80～90cm間隔で検出された。検出面での幅は20～40cmであり、深さは５～15cmである。堆積土は２層に分けられ、基本層のⅣa層とⅣb層に対応する。

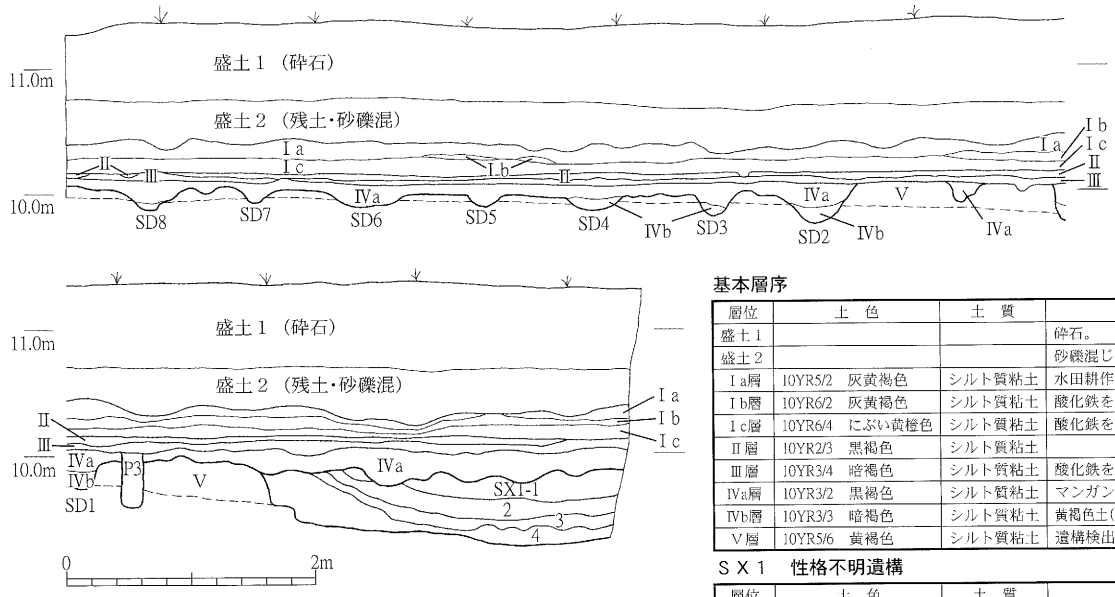
＜小溝状遺構２群　４条（SD９、SD10、SD11、SD12）＞

調査区を東西方向に横切る形で、約50cm間隔で検出された。検出面での幅は約30cmであり、深さは約５cmである。堆積土は１層で、いずれも褐灰色粘土質シルトで酸化鉄を霜降状に含んでいる。１群に切られている。SD９とSD10～12とでは方向が多少異なるので、時間差がある可能性も考えられる。

１群および２群からの出土遺物はない。



第52図　調査区平面図



基本層序

層位	土　色	土　質	備　考
盛土１			砕石。
盛土２			砂礫混じりの残土。
Ⅰa層	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	水田耕作土。
Ⅰb層	10YR6/2　灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を粒状に含む。水田耕作土。
Ⅰc層	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト質粘土	酸化鉄を縞状に集積。水田耕作土。
Ⅱ層	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	
Ⅲ層	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に含む。
Ⅳa層	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒を含む。畑耕作土。
Ⅳb層	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土（Ⅴ層起源）のブロックを多量に含む。
Ⅴ層	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	遺構検出面。

ＳＸ１　性格不明遺構

層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	
2	10YR4/6　褐色	粘土	
3	10YR3/2　黒褐色	粘土	炭化物・焼土を部分的に含む。
4	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	

Ｐ３

層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	

第53図　調査区北壁・遺構断面図

2）性格不明遺構

ＳＸ１遺構　調査区東部の壁沿いで検出された。Ｖ層上面で検出されており、調査区北壁の観察では掘り込み面もＶ層上面と考えられる。東壁沿いでの検出のため、正確な規模や平面形などは不明であるが、断面形が扁平な逆台形を呈する南北方向の溝状遺構である可能性も考えられる。検出部分から東西の幅は約480cm以上の規模である。深さは30～40cmである。堆積土は４層に分けられ、３層は部分的に炭化物や焼土片を含み、遺構底面から土師器甕の底部を含む土師器片が数点出土している。

出土した土師器（第54図）は、器形の特徴から塩釜式の甕と判断されるので、遺構の時期については古墳時代前期と考えられる。

3）ピット

Ｐ１～７まで検出した。検出面はいずれもＶ層上面であるが、Ｐ７に関しては小溝状遺構の底面で検出した。またＰ３に関しては調査区北壁の観察から掘り込み面がⅣ層上面と考えられる。平面形は円形を基調とし、大きさは直径15～30cmで、検出面からの深さは15～20cmである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

6. まとめ

① 今回の調査地点では、Ｖ層上面で、Ⅳ層の落ち込みからなる小溝状遺構12条と性格不明遺構１基、ピット７基が検出された。

② 小溝状遺構については畑の耕作に関わる遺構と考えられていることから、Ⅳ層は耕作土層であると判断される。周辺部の調査におけるＶ層上面検出の小溝状遺構群の年代について、当遺跡の南に隣接する大野田古墳群では古墳時代中期以降、奈良時代以前とされており、当遺跡の北西に隣接する六反田遺跡では奈良時代以降、平安時代前期以前とされている。

今回の調査ではⅣ層がＳＸ１遺構を覆っていることから、古墳時代前期以降、平安時代前期以前としておきたい。

③ ＳＸ１遺構について、詳細な性格など不明であるが、出土遺物から古墳時代前期の遺構と考えられる。

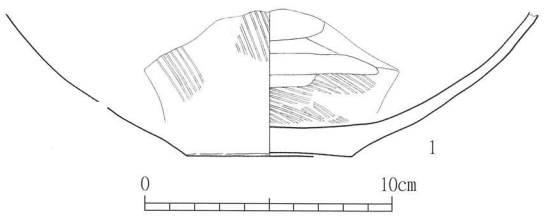
＜参考文献＞

渡邊誠ほか（2000）：『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第243集

佐藤淳（2005）：『大野田古墳群　第８次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第290集

佐藤淳（2005）：『大野田古墳群　第９次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第291集

工藤哲司ほか（2005）：「Ⅴ　大野田古墳群第10次発掘調査報告書」「Ⅵ　大野田古墳群第11次発掘調査報告書」「Ⅺ 袋前遺跡第２次発掘調査報告書」『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集



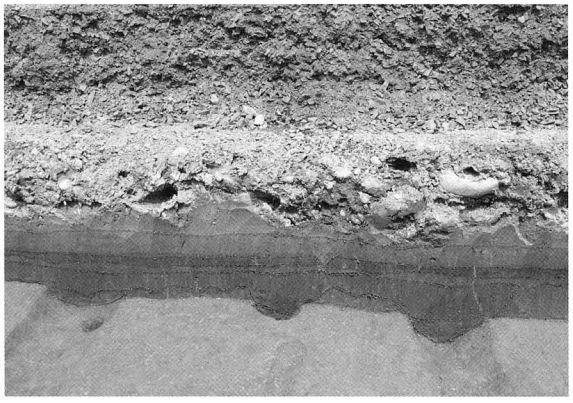
図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	C-1		SX1	底面		非ロクロ土師器	甕	(5.7)			6.6	外面：ハケメ？、内面：ナデ・ハケメ	—

第54図　出土土師器

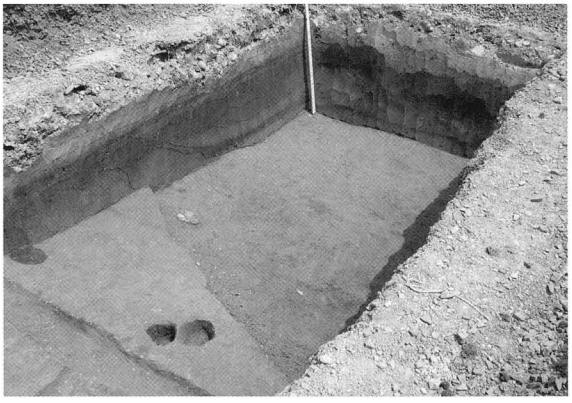
1　完掘全景（東から）

2　遺構検出状況（西から）

3　調査区北壁西端部（ＳＤ７・８断面）



4　調査区北壁中央部（ＳＤ２・３・４断面）



5　ＳＸ１遺構完掘全景（南西から）

図版41　調査区・検出遺構

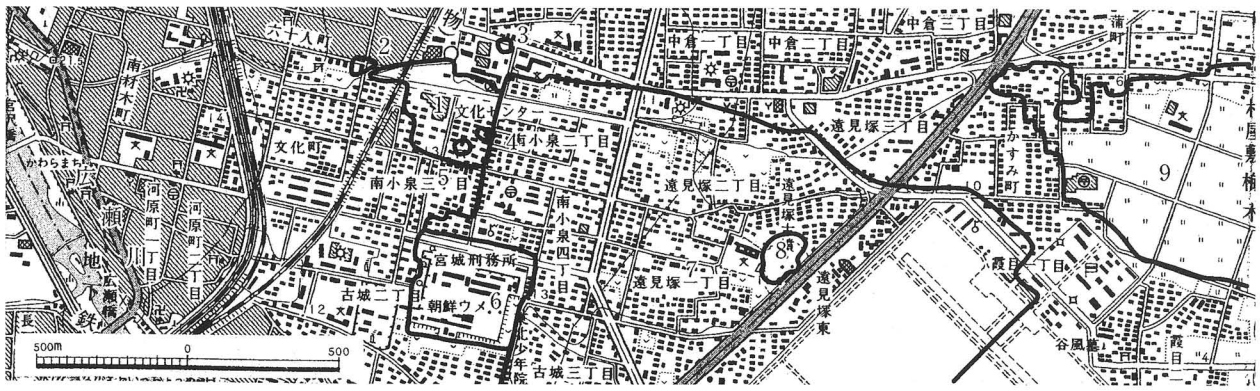
XI　養種園遺跡第６次発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名　養種園遺跡（宮城県遺跡番号01349）
調 査 地 点　仙台市若林区南小泉１丁目14－37
調 査 期 間　平成18年10月25日
調査対象面積　71.21㎡
調 査 面 積　30㎡
調 査 原 因　個人住宅建築
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主査　工藤哲司　　主任　長島榮一　　文化財教諭　今野秀治

2．調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成18年９月６日付けで松井順也氏より、深さ４ｍの柱状土壌改良を伴う個人住宅建築に伴う発掘届けが提出されたので、確認調査を実施しその上で、必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成18年10月25日に着手し、建物建築予定部分に東西10m×南北３ｍのトレンチを設定して調査を行った。重機により盛土およびＩ層を掘り下げたところ、溝跡の堆積土と思われる土層が検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区西端部で溝の立ち上がりが検出され、調査区のほぼ全体が南北方向の溝跡の中に位置していることが確認された。



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	養種園遺跡	集落・屋敷跡	自然堤防	縄文～近世
2	保春院前遺跡	集落・屋敷跡	自然堤防	古代・中世・近世
3	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳（終末期）
4	蛇塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）
5	猫塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）

番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
6	若林城跡	城館・古墳・集落	自然堤防	古墳～近世
7	南小泉遺跡	集落	自然堤防	縄文～近世
8	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（前期）
9	仙台東郊条里跡	条里遺構	後背湿地	古代

第55図　遺跡の位置と周辺の遺跡

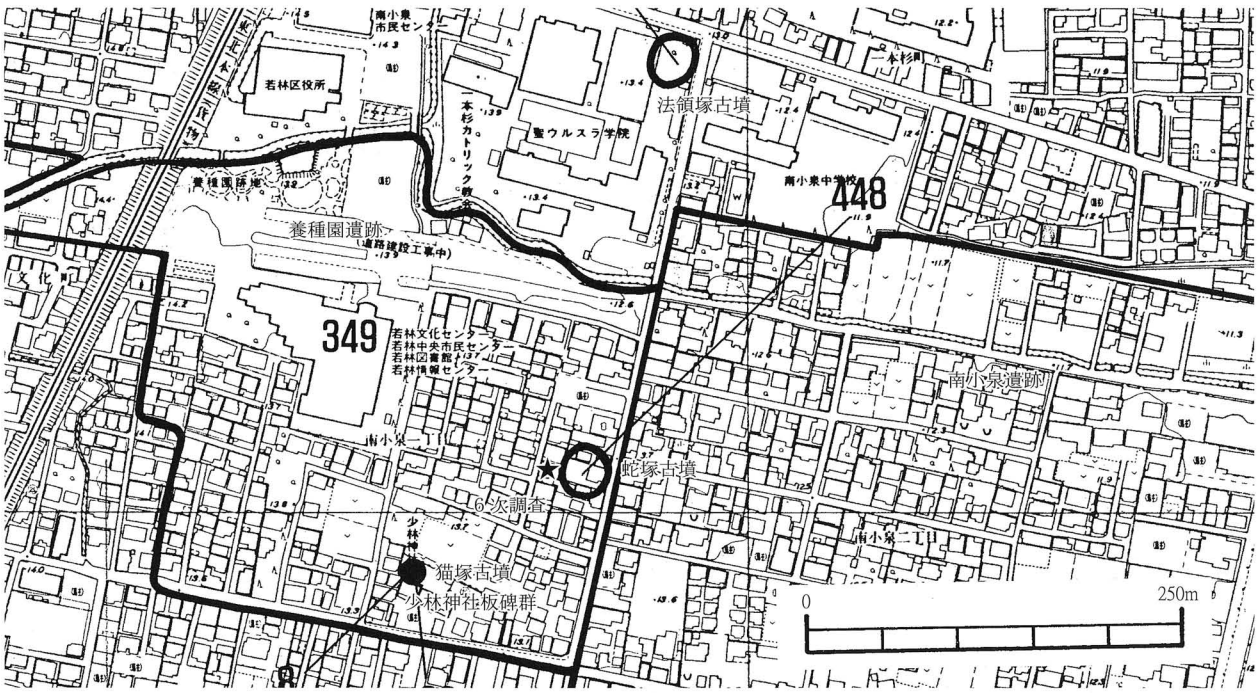
3．遺跡の位置と環境

養種園遺跡はＪＲ仙台駅の南東約2.5ｋｍ付近に所在する。宮城野海岸平野と呼ばれる沖積平野の自然堤防から後背湿地にかけて立地しており、標高12～14mほどである。東側には縄文時代以降、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世の各時代に遺跡の形成された南小泉遺跡が広がっており、南小泉遺跡のほぼ中央には全

長110mを計る前期の前方後円墳である遠見塚古墳が存在する。北側には終末期の円墳である法領塚古墳が存在し、遺跡内には、共に後期の円墳と思われる猫塚古墳、蛇塚古墳が点在している。また南方500mには伊達政宗の晩年の居城である若林城跡があり、当遺跡周辺にも若林城下の町割りと考えられる区割りが残存している。

これまでの養種園遺跡の調査では、縄文時代・弥生時代の遺物が出土し、縄文時代には前期の遺物包含層が確認されている。古墳時代から奈良・平安時代にかけては集落が発見されており、この時代には南小泉遺跡と一連の遺跡が形成されていたと考えられる。中世の遺構としては屋敷跡や道路跡・墓跡群などが検出されており、屋敷跡に関しては庇をもつ大型の建物を中心に数棟の付属建物と区画の堀で構成されるなどしており有力者層のものと考えられる。

その後この地域は、近世になると伊達家二代藩主忠宗により御仮屋（別荘）が、四代藩主綱村により国分小泉屋敷と呼ばれる別荘が造営され、明治期になって養種園が開設される。近世以降は、伊達家との深い関わりが持たれ、別荘跡と関係する堀跡や池跡などの遺構も発見されている。



第56図　調査地点の位置

4. 基本層序

調査区内で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層とⅡ層である。

盛　土：砂礫。層厚約80cm。

Ⅰ　層：10YR 4/2 灰黄褐色シルト層。層厚20～25cm。炭片を多く含む。

Ⅱ　層：10YR 5/6 黄褐色粘土質シルト層。地山。下部には砂が多く含まれる。

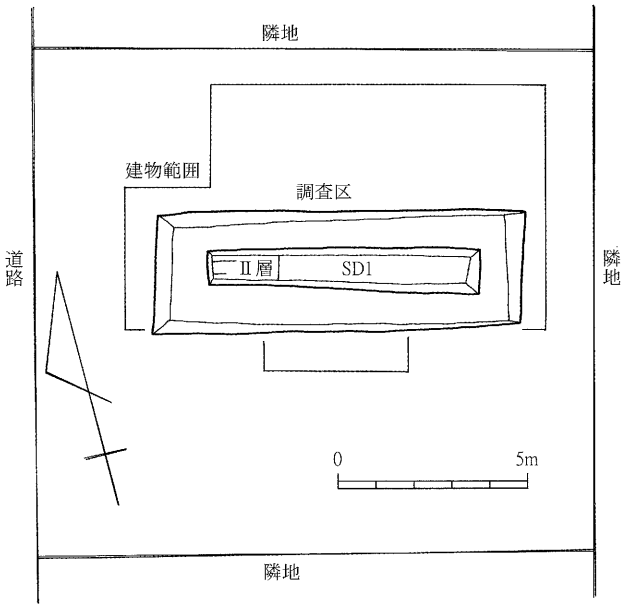
5. 発見遺構と出土遺物

調査区全域にわたって南北方向の溝跡１条が検出された。

溝跡

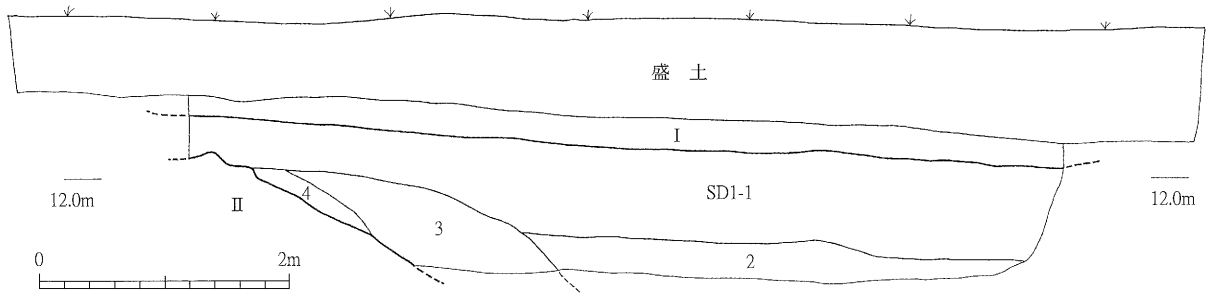
ＳＤ１溝跡　調査区のほぼ全域がこの遺構に含まれていたものと思われる。正確な規模などは不明であるが、上端

幅７m以上・深さ１m以上の南北方向に延びる溝跡であると考えられる。なお深さに関しては、一部ボーリングにより堆積土上面からの深さが２mを超すことを確認している。調査部分の堆積土は４層に分かれ、１層は暗褐色の粘土質シルトであり、径１～５cmの礫をまばらに含んでいる。２層はにぶい黄褐色の粘土であり、こぶし大の礫を少量含んでいる。調査区の中央付近ではグライ化している。３層は暗褐色の粘土であり、大小の礫を多量に含んでいる。しまりは無く、人為的に埋め戻された可能性がある。４層は暗褐色のシルト質粘土であり、基本層Ⅱ層起源の黄褐色粘土のブロックをまばらに含んでいる。出土遺物はない。



第57図　調査区と遺構配置図

規模や方向性などから、都市計画道路「南小泉～茂庭線」敷設に伴う養種園遺跡第１次発掘調査のⅣ区・Ⅴ区・Ⅵ区において検出されたSD１溝跡（近世の屋敷跡に関わる堀跡：深さ2.04～3.58m）［註１］の延長である可能性が考えられる。また本調査区の東に隣接する蛇塚古墳と関連する周溝である可能性も考えられるが、過去の調査実例からは仙台平野における古墳の周溝の深さは１～1.5m程度である状況が確認されているので、古墳の周溝の可能性は低いものと思われる。



基本層序

層位	土　色	土　質	備　考
盛土		砂礫	
Ⅰ	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	炭片を多く含む。
Ⅱ	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	下部には砂が多く含まれる。

ＳＤ１

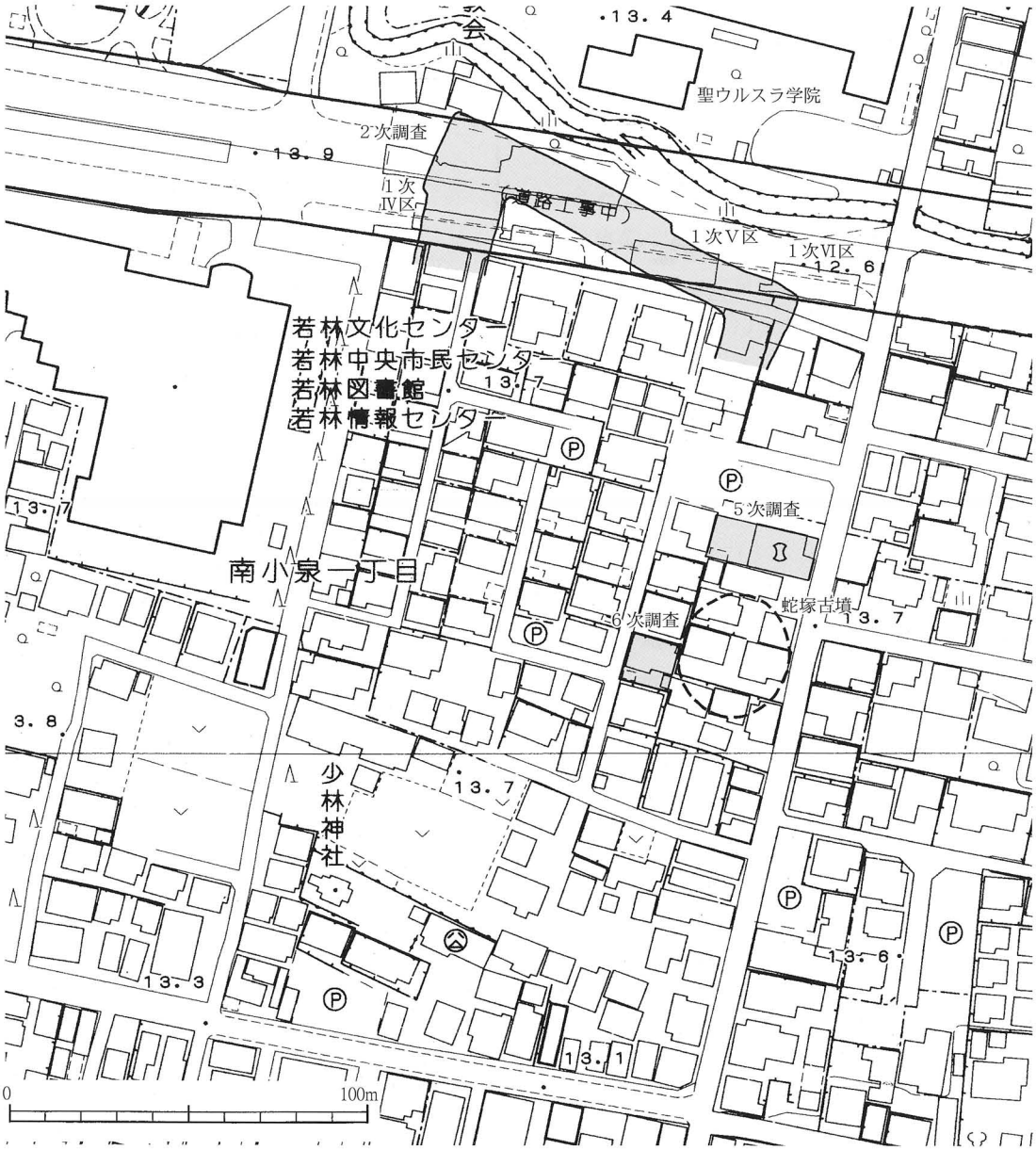
層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	径1～5cmの礫をまばらに含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	こぶし大の礫を少量含む。 トレンチ中央付近では2.5Y4/1黄灰色に変化している。
3	10YR3/3　暗褐色	粘土	大小の礫を多量に含む。
4	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土のブロックをまばらに含む。

第58図　調査区北壁断面図

6. まとめ

①　今回の調査によって検出された遺構は、南北方向に伸びる溝跡１条である。

②　この溝跡については出土遺物もなく性格や時期などの詳細は不明であるが、養種園遺跡第１次調査（Ⅴ区・Ⅵ区）で検出された近世の屋敷跡に伴う堀跡の延長部である可能性と、東に隣接する蛇塚古墳の周溝である可能性が考えられ、今後の周辺部における調査の際に検討されていく必要がある。



第59図　養種園遺跡の屋敷堀跡推定ライン（1／2000）

［註１］　本調査区の北側で南方向に折れることが確認されているが、第５次調査地点にはかかっていないので、本調査区にその延長がかかっている可能性が考えられる。

＜参考・引用文献＞

佐藤　洋（1997）「養種園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集

豊村幸宏ほか（2003）「養種園遺跡第３次発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他』仙台市文化財調査報告書第266集

豊村幸宏ほか（2004）「養種園遺跡第４次発掘調査報告書」『保春院前遺跡他』仙台市文化財調査報告書第274集

工藤哲司ほか（2005）「養種園遺跡第５次発掘調査報告書」『山田本町遺跡他』仙台市文化財調査報告書第287集

仙台市教育委員会（2001）「若林城跡と養種園遺跡」仙台市文化財パンフレット第48集

1　**調査区全景**（東から）

2　**調査区北壁土層断面**（南西から）

3　**ＳＤ１西端部**（南東から）

図版42　調査区全景・ＳＤ１

XII　杉土手第４次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	杉土手（宮城県遺跡番号01382）
調 査 地 点	仙台市太白区鹿野本町109
調 査 期 間	平成18年12月４日～12月７日
調査対象面積	150㎡
調 査 面 積	48㎡
調 査 原 因	駐車場造成
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　早川潤一　　藤田雄介

2　調査に至る経過と調査方法

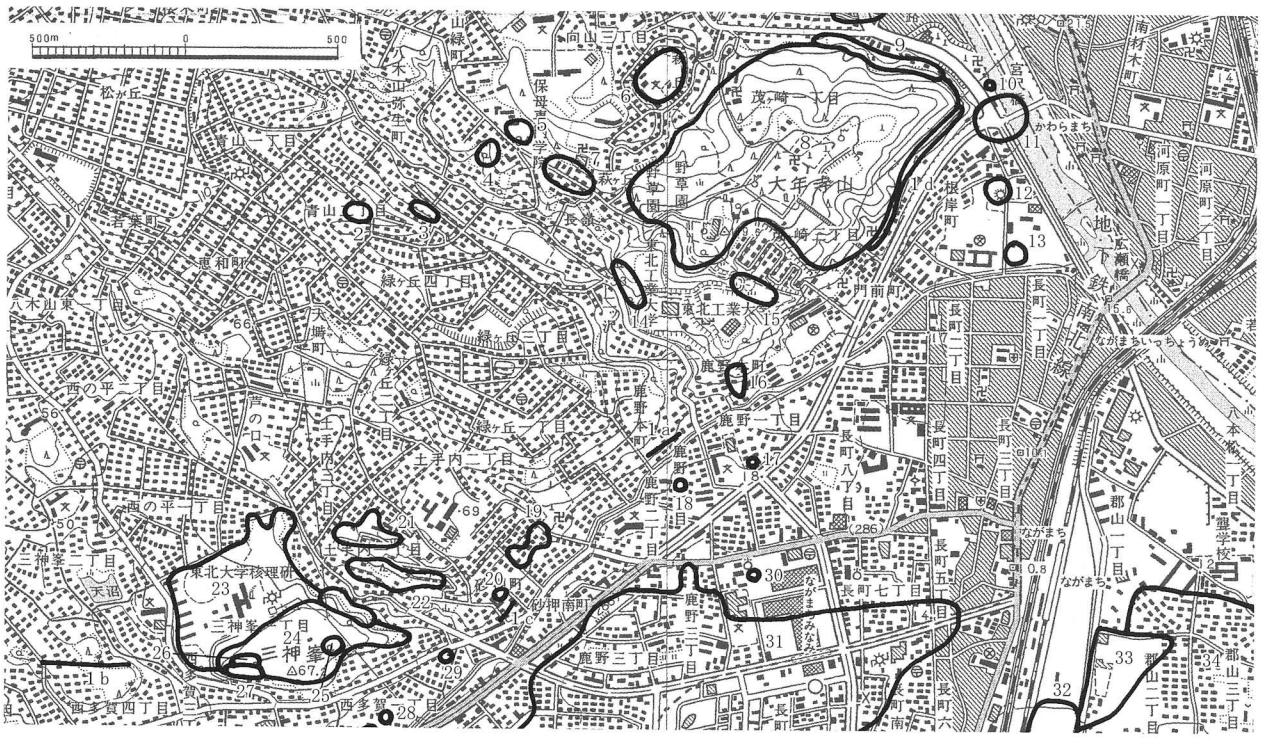
本調査は、平成18年10月10日付けで、栗山　健氏より、杉土手の削平を伴う駐車場造成の埋蔵文化財発掘の届出が提出された。計画は、土手上に長さ約80mに渡り、北側に沿う道路の高さに合せて、幅約６ｍの駐車場を造成するものである。80mのうち東側の約30m範囲が道路面より高く土手が残っていたので、この部分を調査の対象とした本調査を実施する必要がある旨を回答した。本調査は、栗山氏と仙台市が平成18年11月30日に契約を締結して実施した。造成予定地に３ｍ×15mのトレンチを設定して表土層を除去したところ、開発予定地の東側から12mの地点で、表土の除去面が道路面とほぼ同様の高さとなったので、調査区を縮小した。土手の残存部を検出した後、土手の構築状況を観察するための、比較的保存状況の良好な調査区東端部にトレンチを設定して土手の基部まで掘り下げて形成土層の観察を行った。

3　遺跡の位置と環境

仙台市は、西部は奥羽山系から派生する丘陵と、丘陵を切って東流する北から七北田川・広瀬川・名取川・阿武隈川などが形成した段丘地形が広がり、東部は河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が複雑な微地形を形成している。奥羽山系から派生する丘陵の末端部は、七北田川の北が富谷丘陵、七北田川と広瀬川の間が七北田丘陵、広瀬川と名取川の間が青葉山丘陵、名取川と阿武隈川の間が高館丘陵と呼ばれている。各丘陵の裾部には段丘地形が発達している。

杉土手は、名取川が青葉山丘陵と高館丘陵の間から沖積平野に流出する名取市「余方」付近の丘陵裾部から青葉山丘陵の南側の裾を巡って丘陵東端の大年寺山まで断続的に続いている。調査地点は、ＪＲ長町駅の西方1.5kmの青葉山丘陵の南側斜面の上町段丘にあたり、標高は40m前後である。沖積面との比高差は25m前後である。

本調査地点の周辺には、古くから遺跡が形成されている。丘陵の前面の富沢遺跡では、現地表下約５mから旧石器時代の石器と森林跡が発見され、その上層では縄文時代早期の落とし穴や土器・石器が発見されている。さらにその上層には弥生時代から近世まで続く水田跡が重層して存在する。三神峯遺跡には縄文時代前期に大きな集落が形成されている。三神峯遺跡の上には古墳時代中期頃の古墳群があり、その南麓には富沢埴輪窯や金山窯跡等の古墳時代の窯がある。土手内遺跡には弥生時代の竪穴住居跡が存在し、周辺には古代の須恵器窯や横穴墓群もある。丘陵裾の段丘の端部上には一塚古墳・二塚古墳・砂押古墳・金洗沢古墳などの古墳が列を成して築かれている。



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	杉土手	土手	丘陵斜面	近世	18	二塚古墳	古墳	丘陵麓	古墳
2	青山二丁目B遺跡	包含地	丘陵斜面	旧石器・縄文	19	砂押屋敷遺跡	古代	丘陵麓	古代
3	青山二丁目遺跡	散布地	丘陵斜面	古代	20	砂押古墳	古墳	丘陵麓	古墳
4	二ツ沢遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文	21	土手内遺跡	集落	丘陵	縄文・弥生・古墳・古代
5	八木山緑町遺跡	散布地	丘陵	縄文・古代	22	土手内窯跡	窯・横穴墓	丘陵斜面	古墳・古代
6	萩ケ丘遺跡	散布地	丘陵	縄文・古代	23	芦ノ口遺跡	集落	丘陵	縄文・弥生・古代
7	萩ケ丘B遺跡	散布地	丘陵斜面	縄文	24	三神峯遺跡	集落	丘陵	縄文・古代
8	茂ヶ崎城跡	城館	丘陵	中世	25	金山窯跡	窯	丘陵斜面	古墳
9	大年寺山横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	26	三神峯古墳	古墳	丘陵	古墳
10	宗禅寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	27	富沢埴輪窯跡	古墳	丘陵	古墳
11	根岸遺跡	集落跡	段丘	縄文	28	裏町古墳	古墳	丘陵麓	古墳
12	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	29	金洗沢古墳	古墳	丘陵麓	古墳
13	小兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	30	金岡八幡古墳	古墳	自然堤防	古墳
14	二ツ沢横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	31	富沢遺跡	集落・水田跡	後背湿地	旧石器・縄文～近世
15	茂ヶ崎横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	32	長町駅東遺跡	官衙・集落	自然堤防	弥生・古代
16	鹿野屋敷遺跡	散布地	丘陵斜面	古墳・古代	33	西台畑遺跡	集落	自然堤防	弥生・古代
17	一塚古墳	古墳	丘陵麓	古墳	34	郡山遺跡	官衙・集落	自然堤防	縄文・弥生・古代・中世

（1aが調査地点）

第60図　遺跡の位置と周辺の遺跡

4　基本層序

Ⅰa層　10YR 3/4暗褐色のシルト層。層厚約20～40cm。現表土。

Ⅰb層　7.5YR 3/2黒褐色のシルト層。層厚約30cm。土手の北側斜面の崩落土。抜根による影響も受けている。

Ⅰc層　7.5YR 3/3暗褐色の粘土質シルト層。層厚約30cm。土手の南側斜面の崩落土。

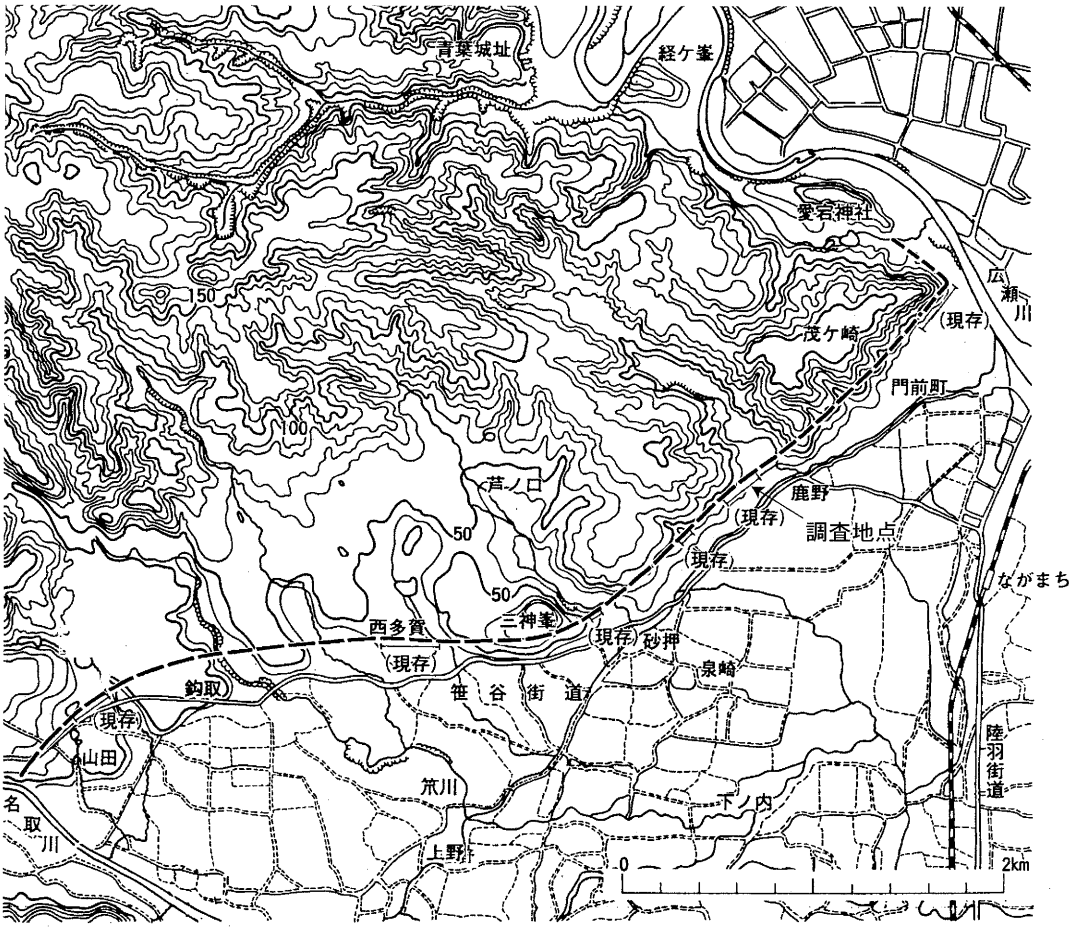
Ⅰd層　7.5YR 3/2黒褐色の粘土質シルト層と10YR 6/8明黄褐色の粘土質シルト層が交互に堆積。土手壁面の崩落土。

Ⅱa層　7.5YR 2/3極暗褐色のシルト質粘土層。層厚15～20cm。北から南側に傾斜しているが、南側では平坦になる。旧表土層。

Ⅱb層　7.5YR 3/3暗褐色の粘土層。層厚10～15cm。傾斜面に堆積。旧表土層からⅢ層への漸移層。

Ⅲ　層　7.5YR 4/4褐色の粘土層。層厚約50cm。下部は明褐色粘土に移行する。締まりが強い。地山。

Ⅳ　層　7.5YR 5/8明褐色の砂礫層。層厚30cm以上。締まりが非常に強い。地山。



大日本帝国陸地測量部明治38年測図
同40年度発行「二万分の一」地形図より作成

第61図　現存杉土手とその想定線

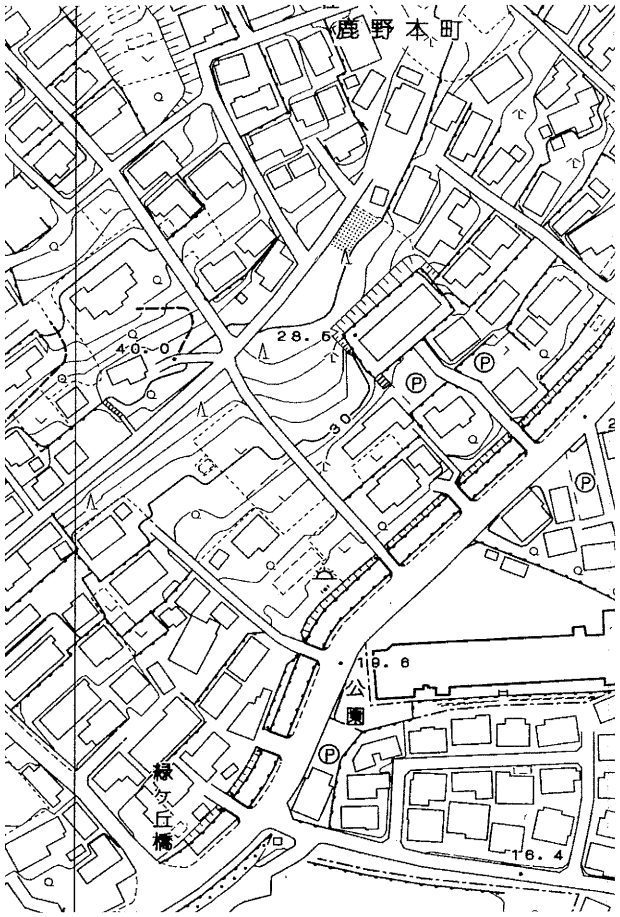
5　発見遺構と出土遺物

1）平面調査の検出状況

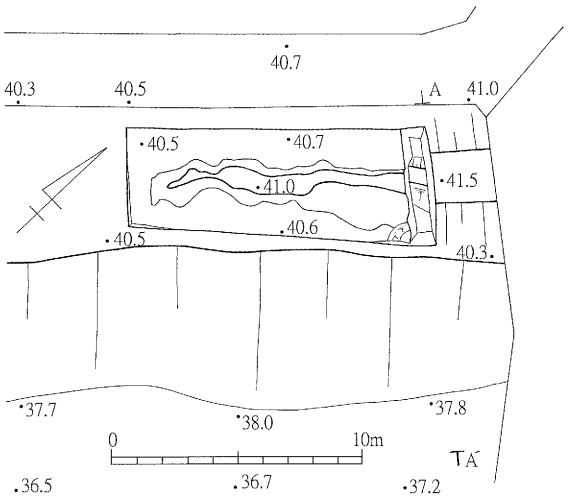
当該地区の杉土手は、調査対象地区の東側では道路面から約１ｍの高さで残るが、西に移行するにしたがって徐々に低くなり、土手残存部の東端から約30mの地点で路面との比高差がなくなる。また、道路面から盛り上がった土手の南側は、2.5m前後の落差の比較的急な傾斜面になり、土手の痕跡を残している。その南側は土手基部付近からは比較的緩い丘陵斜面となっている。

調査対象区の表土及び抜根による影響を受けた土砂を、工事の掘削計画面である現道路面の高さまで除去した状況が第65図である。土手残存部の東端から約14mの地点で、表土の方が路面レベルより低くなった。現道路面以下の表土層の除去は行わなかった。その結果、道路面と同一レベルで検出された土手の規模は、東部で幅230cm前後・高さ20～50cm、西部で幅150cm・高さ15～20cm程度である。検出された土手の積み土は、東部南辺の低い部分は後述する１期段階の土層で、それ以外の大部分は２期段階のものである。

杉土手については、仙台市太白区秋保湯元佐勘温泉に伝わる「御山守・湯守佐藤勘三郎家文書」に、御山守をしていた同家に対して、明暦二年に「ほけ」と呼ばれる長さ五尺の棒を、鹿除土手の忍び返しの構築のために50荷提出せよという指示文書があるので、検出された土手の上面を精査したが、掘り方や杭の痕跡は確認できなかった。



第62図　調査地点の位置（1／2500）



第63図　調査区配置図

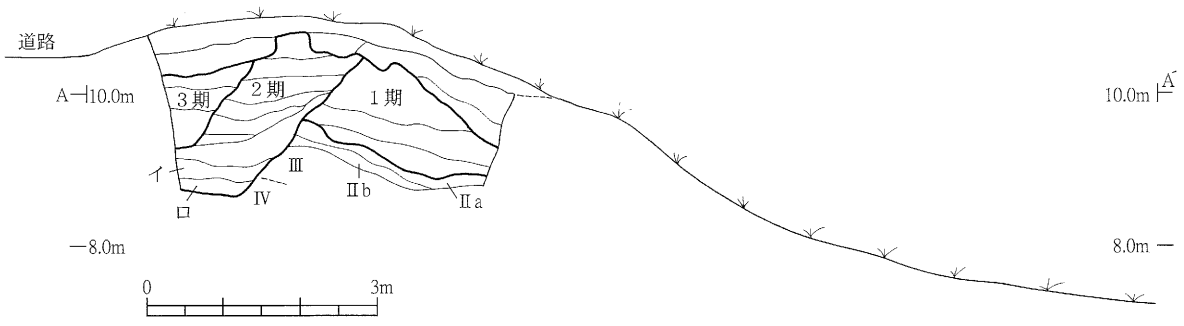
2）断面調査の状況

平面調査後、調査区の東端に土手を横断するように深掘りのトレンチを設定し、土手を基盤層まで掘下げ、積土の観察を行なった。土層観察の結果、土手の積土は大きく３時期に分けられることが明らかになった。古期から１期・２期・３期とした。２期は１期の、３期は２期の北側に寄せて盛り上げられている。

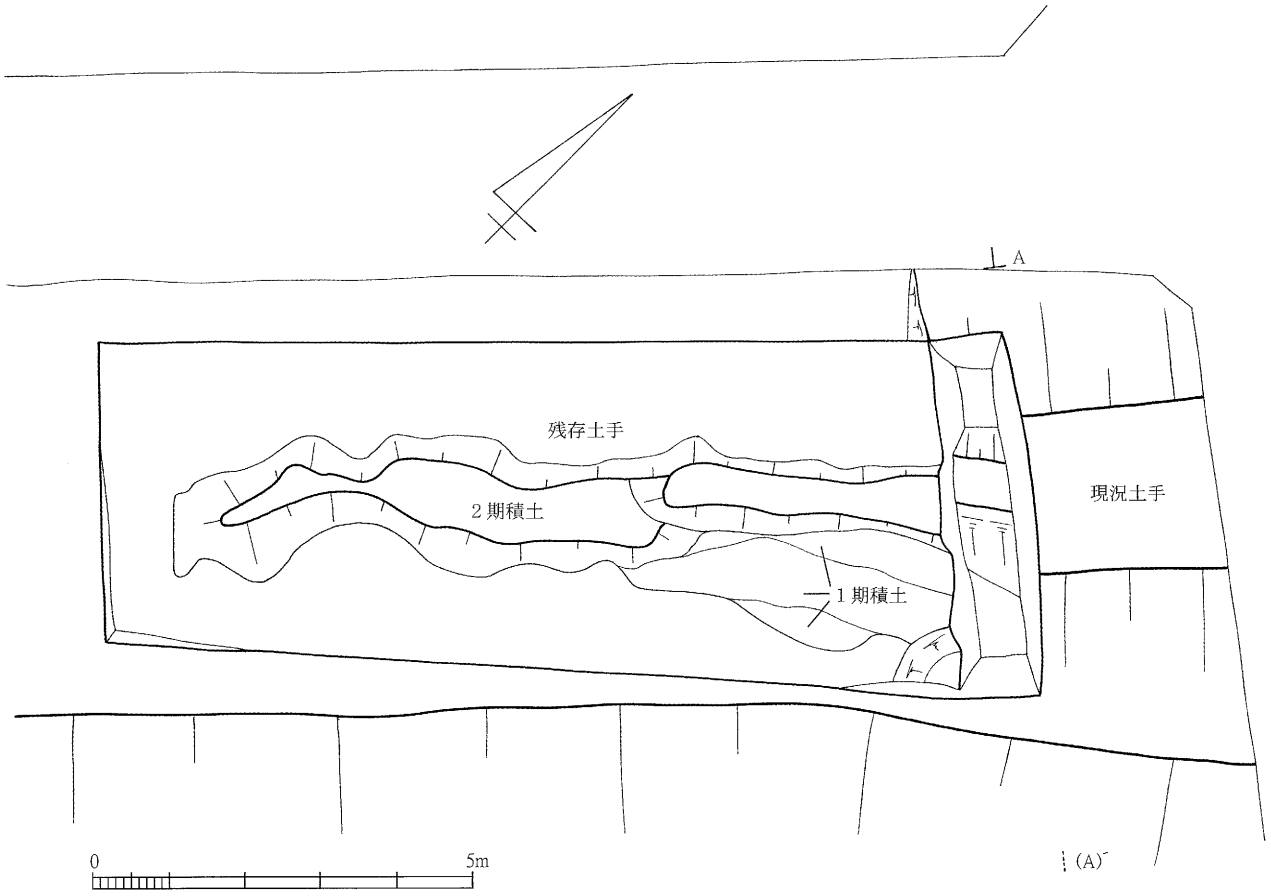
＜1　期＞

南側の基底部は調査区の外にのびているが、調査範囲で265cmである。高さはⅡａ層の山側上面からで約80cm、谷側の上面からで約160cmである。積土は３層に大別されるが、いずれも明褐色土ないし褐色土を基調とし、２期・３期の積土と比較すると明るい色調を呈する。各層は、細かく見るとさらに狭い間隔で積まれている。下部は傾斜面に沿って積まれているが、上層に移行するにしたがって水平になっている。積土はブロック状の土壌で、締まりは強くない。

土手の北側は、旧表土と観察されるⅡ層及び地山のⅢ層・Ⅳ層が土手の傾斜に合せて削られている。これについては、山側の旧表土及び地山を削って土手の積土にするとともに、相対的に土手の高さを上げるための作業の結果であると考えられる。このような山側の基底面の掘削については、杉土手第３次調査（太白区山田北前町）地点で



第64図　調査区杉土手断面図



第65図　遺構検出状況

も、旧表土上面からの深さ約70cm・幅約90cmの溝状の落込みとして検出されている。堆積土のイ・ロは土手の積土崩落土及び山側からの流入土と考えられる。

＜２　期＞

１期の北側に、100～120cmの幅で寄せるように積まれている。積土は７層に分けられ、各堆積土は北側に下がっている。暗褐色基調とする積土で、１期の積土とは明確に区別できる。現状では１期の上に積上げられたかどうかは不明である。なお、２－７層については、ブロック状の土壌であるが、１期の崩落土の可能性もある。

規模は、基底幅が４m以上、高さが３－３層底面からで150cmである。

＜３　期＞

２期の北側に、調査区内で最大120cmの幅で寄せるように積まれている。積土は３層に分けられるが、いずれも暗褐色・黒褐色を基調とする土壌である。各堆積土は水平になっている。１期・２期の上に積上げられたかどうかは不明である。この段階での規模は、基底幅が4.5m以上となる。高さは不明である。

平面調査及び断面観察の調査でも出土遺物はなかった。

6　まとめ

①　当該地区の土手は、土手の北側でも現道路面から約1.8mの深さまで遺構が存在することが明らかになった。

②　杉土手は何地点かに分かれて残存しており、本地点の調査は今回が初めてであったが、本地点でも調査が進んでいる太白区山田北前町地区と同様に３時期の積土があることが明らかになった。

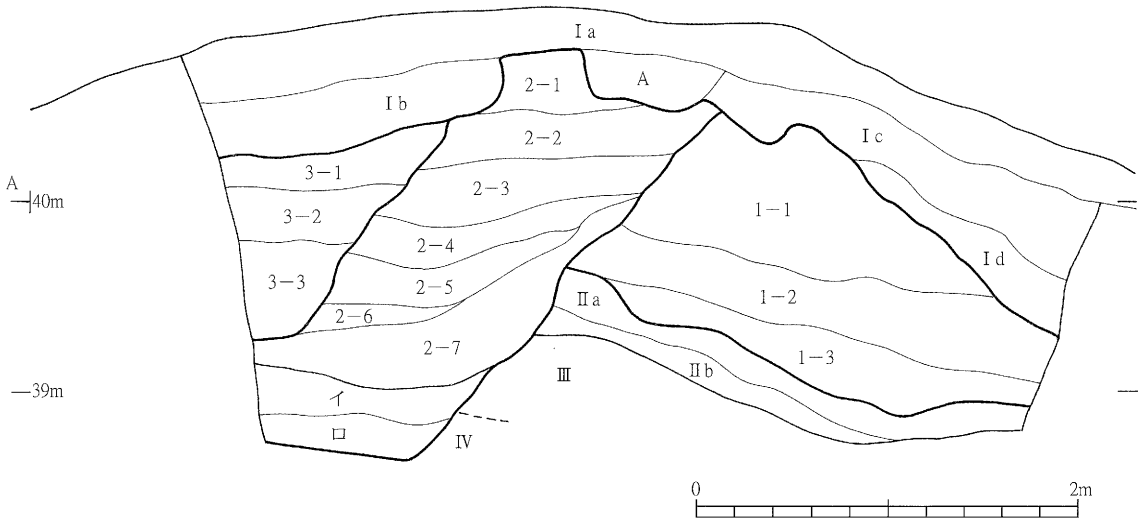
③　３時期の各時期の年代については、今回の調査でも明らかにできなかった。今後の課題である。

④　文献から、土手の上に柵が設置されたと推定されるが、今回の調査地点でも関係する遺構を検出できなかった。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1992）：『杉土手・北前遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第157集

仙台市教育委員会（1997）：「Ⅳ　杉土手（３次）・北前遺跡（５次）調査報告書」『高屋敷遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第223集



層No	土　色	土　質	備　考
Ⅰa	10YR3/4　暗褐色	シルト	部分的に褐色土のブロックを含む。（表土層）
A	7.5YR3/2　黒褐色	シルト	褐色土のブロックを多量に含む。（撹乱坑）
Ⅰb	7.5YR3/2　黒褐色	シルト	褐色のブロック及び褐色土粒を多量に含む。
Ⅰc	7.5YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	褐色土及び黒褐色土のブロックをまばらに含む。
Ⅰd	7.5YR3/2　黒褐色 10YR6/8　明黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	両層が交互に楔状に堆積。（土手崩落土）
1−1	7.5YR5/8　明褐色	シルト質粘土	黒褐色土のブロック及び粒を10〜20゜間隔で縞状に含む。
1−2	7.5YR4/6　褐色	シルト質粘土	黒褐色土をブロック及び粒状にまばらに含む。
1−3	7.5YR4/4　褐色	粘土	黒褐色土を縞状ないし網目状に含む。
2−1	7.5YR4/4　褐色	シルト質粘土	暗褐色土を縞状に含む。風化礫を多く含む。
2−2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	北部に黒色土及び明褐色土を縞状に含む。
2−3	7.5YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	明褐色土のブロック及び粒を多量に含む。

層No	土　色	土　質	備　考
2−4	7.5YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黒色土を縞状に含む。
2−5	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	明褐色土をブロック及び縞状に含む。黒褐色土を縞状に含む。
2−6	7.5YR4/3　褐色	シルト質粘土	明褐土粒を多く含む。
2−7	7.5YR3/3　暗褐色	粘土	黒褐色土のブロック及び明褐色土の大型のブロックをまばらに含む。
3−1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色土及び同色の風化礫を多量に含む。
3−2	7.5YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックをまばらに含む。
3−3	7.5YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	褐色土のブロック及び褐色土粒をまばらに含む。
イ	7.5YR3/4　暗褐色	粘土	灰褐色土を斑状に含む。
ロ	7.5YR4/3　褐色	粘土	風化礫及び砂を多量に含む。
Ⅱa	7.5YR2/3　極暗褐色	シルト質粘土	（旧表土？）
Ⅱb	7.5YR3/3　暗褐色	粘土	Ⅱa層からⅢ層への漸移層。
Ⅲ	7.5YR4/4　褐色	粘土	シマリ強い。下部は明褐色粘土に移行。（地山）
Ⅳ	7.5YR5/8　明褐色	砂礫	シマリ非常に強い。河床礫層？（地山）

第66図　調査区東壁断面図

1　**調査前の全景**（北東から）

2　**表土排除後の残存状況**（北東から）

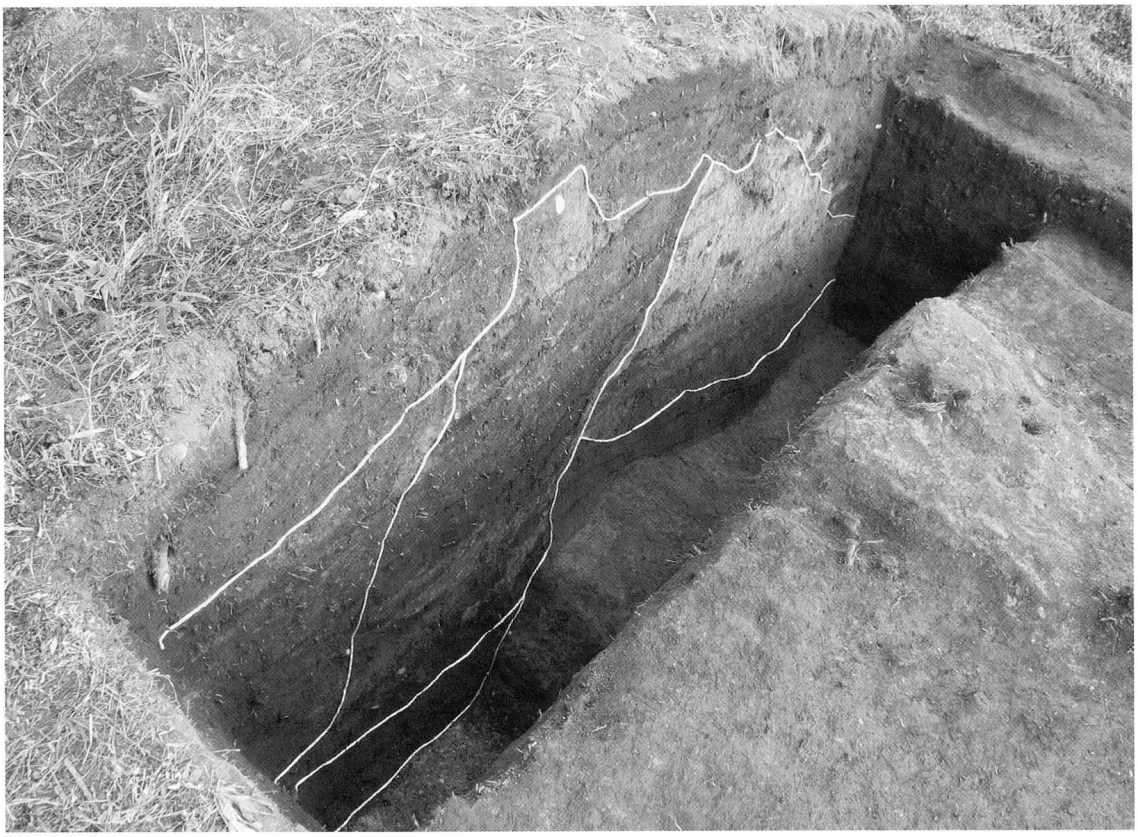
3　**表土排除後の状況**（西から）

図版43　調査前と調査状況１

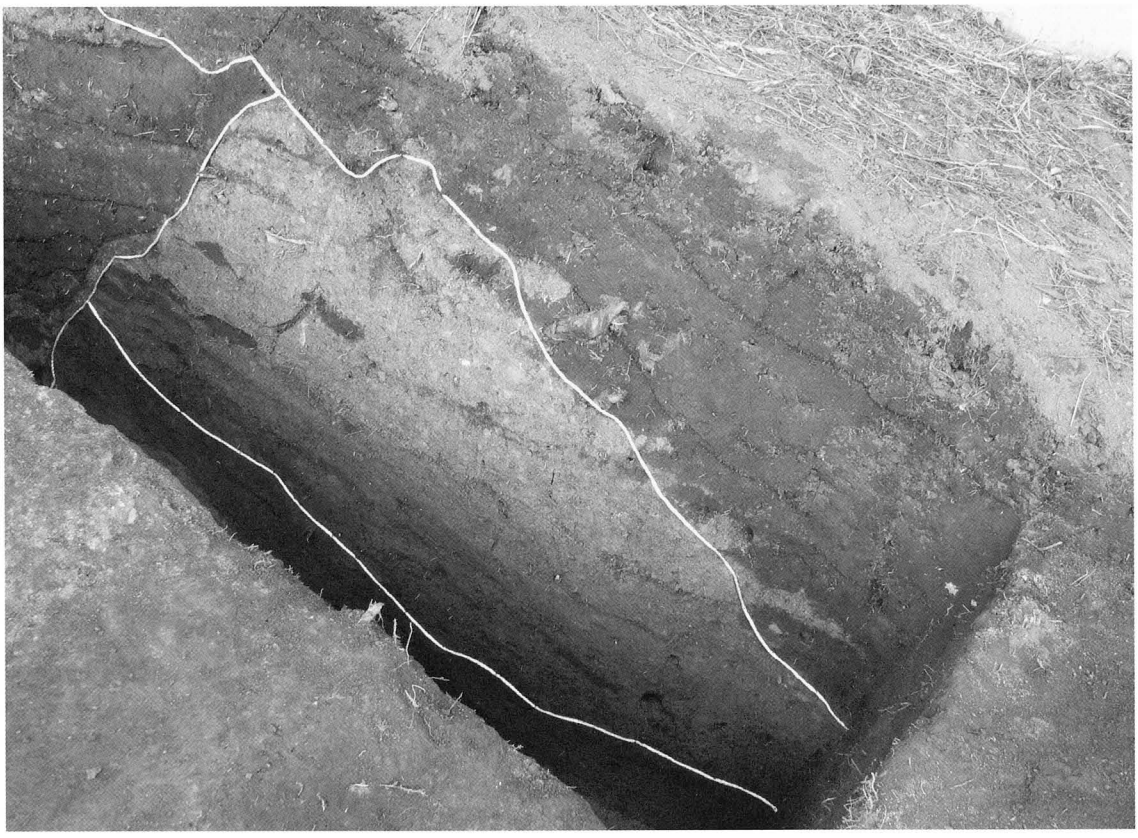
1　残存部積土の平面的検出状況（東から）

2　調査完了状況：奥が土層観察トレンチ（西から）

図版44　調査状況 2



3　**土手土層断面**（北西から）



2　**１期の積み土断面**：下部は旧表土と基盤層（南西から）

図版45　土層断面１

1　**2期・3期の積み土断面**：1期は旧表土と基盤層を掘削して構築（北西から）

2　**2期・3期の積み下部と1期の基部の堆積層**（西から）

図版46　土層断面2

報告書抄録

ふりがな	まつもりじょうあとほか
書名	松森城跡他
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第310集
編著者名	工藤哲司　今野秀治　早川潤一　藤田雄介
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７－１　電話　022-214-8894
発行年月日	平成19年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
松森城跡 （第１次）	せんだいしいずみくまつもりあざうちまち 仙台市泉区松森字内町 20－２、20の一部	04100	19020	38° 18′ 46″	140° 55′ 16″	2006・２・27 2006・３・10	94㎡	共同住宅建築
松森城跡 （第２次）	せんだいしいずみくまつもりあざうちまち 仙台市泉区松森字内町 19－１の一部	04100	19020	38° 18′ 47″	140° 55′ 15″	2006・３・１ 2006・３・10	302㎡	共同住宅建築
南小泉遺跡 （第48次）	せんだいしわかばやしくとおみづか 仙台市若林区遠見塚 １丁目37－６	04100	01021	38° 13′ 58″	140° 54′ 54″	2006・３・22 2006・３・28	21㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡 （第49次）	せんだいしわかばやしくとおみづか 仙台市若林区遠見塚 １丁目37－５	04100	01021	38° 13′ 39″	140° 54′ 54″	2006・４・12 2006・４・13	21㎡	個人住宅建築
南小泉遺跡 （第50次）	せんだいしわかばやしくいっぽんすぎまち 仙台市若林区一本杉町 26－１	04100	01021	38° 14′ 24″	140° 54′ 40″	2006・６・19 2006・６・22	64㎡	診療所建築
南小泉遺跡 （第51次）	せんだいしわかばやしくいっぽんすぎまち 仙台市若林区一本杉町 21－４	04100	01021	38° 14′ 25″	140° 54′ 35″	2006・９・19 2006・９・20	30㎡	個人住宅建築
富沢遺跡 （第137次）	せんだいしたいはくくいずみざき 仙台市太白区泉崎 １丁目３－４	04100	01369	38° 13′ 11″	140° 52′ 26″	2006・５・８	19.5㎡	個人住宅建築
富沢遺跡 （第139次）	せんだいしたいはくくながまち 仙台市太白区長町 ５丁目85－５	04100	01369	38° 13′ 23″	140° 53′ 7″	2006・11・13 2006・11・29	34㎡	店舗付共同住宅建築
田母神屋敷跡	せんだいしみやぎのく 仙台市宮城野区 がもうあざなべぬま 蒲生字鍋沼41番、42番	04100	01226	38° 15′ 3″	140° 59′ 33″	2006・７・24 2006・７・27	144㎡	集会施設建築
袋前遺跡 （第３次）	せんだいしたいはくくおおのだ 仙台市太白区大野田 あざたけまつ 字竹松地内	04100	01439	38° 12′ 48″	140° 52′ 48″	2006・８・７ 2006・８・８	25㎡	個人住宅建築
養種園遺跡 （第６次）	せんだいしわかばやしくみなみこいずみ 仙台市若林区南小泉 １丁目14－37	04100	01349	38° 14′ 20″	140° 54′ 22″	2006・10・25	30㎡	個人住宅建築
杉土手 （第４次）	せんだいしたいはくくかのほんちょう 仙台市太白区鹿野本町 109	04100	01382	38° 13′ 41″	140° 52′ 27″	2006・12・４ 2006・12・７	48㎡	駐車場造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松森城跡 第1次	城館跡	中世	掘立柱建物跡 溝跡・土坑・ピット	土師器・磁器	
松森城跡 第2次	城館跡	中世	溝跡・井戸跡 土坑・ピット	土師器・陶器 茶臼・古銭	
南小泉遺跡 第48次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡・土坑・ピット	土師器	
南小泉遺跡 第49次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡・土坑	土師器	
南小泉遺跡 第50次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡	土師器	
南小泉遺跡 第51次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	柱列・小溝状遺構 土坑・ピット	土師器	
富沢遺跡 第137次	水田跡・包含地	後期旧石器 ～中・近世	水田跡・畦畔	磁器	
富沢遺跡 第139次	水田跡・包含地	後期旧石器 ～中・近世	水田跡・畦畔・溝跡	磁器・土師質土器	
田母神屋敷跡	屋敷跡	近世	溝跡・土坑	磁器・陶器・漆器 木製品	
袋前遺跡 第3次	集落跡	縄文・古代	小溝状遺構・ピット 性格不明遺構	土師器	
養種園遺跡 第6次	集落跡・屋敷跡	古墳～中・近世	溝跡		
杉土手 第4次	土手	近世	土手		

仙台市文化財調査報告書第310集
松森城跡他
発掘調査報告書
2007年3月
発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課　022（214）8894
印刷　株式会社　建設プレス
仙台市青葉区折立三丁目2－10
TEL 022(302)0177